

海外協力の 現場から

ホンデュラス編

青年海外協力隊員の
記録

昭和55年12月

国際協力事業団
青年海外協力隊事務局

RY

JICA LIBRARY



1052196[1]

国際協力事業団	
受入 月日 1984.7.5.12:2	6935
登録No. 06576	1362
	J.V.P.

序にかえて

昭和55年12月

青年海外協力隊
事務局 長 野村 忠 策

青年海外協力隊が発足して15年を経た。昭和40年末から41年初にかけて1次隊の隊員約30名がフィリピン、マレーシア、カンボディア、ラオスの4ヵ国へ派遣されて以来、今日までに約3,400名の隊員が28の開発途上諸国へ派遣された。協力隊創設にかかわりをもった者のひとりとして、今昔の感に耐えない。

同時に、このような協力隊の発展を見るにつけ私は、受入各国で高い評価を培ってきた隊員および、本事業の意義を理解して協力隊を育てることに地道な努力を傾注されてきた政界および都道府県の方かた、青少年運動指導者をはじめ広範な関係者各位に対して深甚なる敬意と感謝の意を表したい。

さて、協力隊事務局では昭和54年度から、隊員が事務局へ提出した業務報告書を国別にとりまとめ、『海外協力の現場から』と題して報告書集の刊行を始めた。幸い、各界から「協力隊員の生々しい活動と生活状況に触れて感動をおぼえる」との好評をいただいたので、本年度もネパール、トンガ、西サモア、ホンデュラス、エル・サルヴァドル、コスタ・リカ、ボリヴィア、シリア、ガーナの9ヵ国編を刊行することとした。

いうまでもなく、協力隊員の活動は、開発途上諸国の国づくり、人づくりに“草の根”で協力しようとする我が国の青年のボランティア活動である。日本とは全く異なる文化社会で、そこに住む人びとと共に暮らし、共に働くことには種々の“壁”があり、時には挫折感にとらわれる。報告書は、その壁を乗り越えて新しい協力手法を生み出そうと日夜努力している隊員の哀歓に満ちた貴重な体験の記録である。協力隊事業の財産であると同時に、我が国、我が国民全体の財産でもある。

私は本事業は隊員受入国にとってはもちろん、我が国の将来にとっても素晴らしい事業であると確信している。今後の本事業の飛躍的発展のためには国民各位の御理解、御支援が不可欠である。一層、御理解を深めていただくうえで、この報告書集が活用されれば幸甚である。末筆ながら、報告書集作成に御協力願った関係職種の技術専門委員の方かた、ならびに隊員(OB)諸君に謝意を表する次第である。

ホンデュラス編

目 次

序にかえて……………野村忠策…(1)

◎ 農業試験場での活動と普及活動……………中村次義…(5)
 中村隊員の報告書を読んで……………太田成英…(30)

◎ 漁業の現状、展望と協力活動……………黒木 隆…(33)
 われわれが目指すもの……………黒木 隆…(44)
 黒木隊員の報告書を読んで……………野村正恒…(47)

◎ グアテマラ研修と業務活動……………小川 賢…(49)
 協力活動を終えるにあたって……………小川 賢…(115)
 小川隊員の報告書を読んで……………横村武宜…(117)

◎ 地方局巡回活動を中心として……………田淵 昭…(119)
 田淵隊員の報告書を読んで……………飯島幸雄…(135)

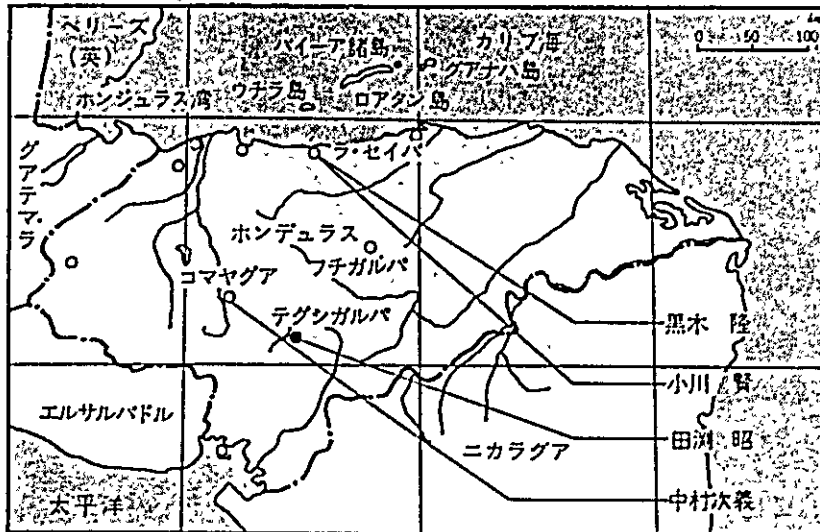
あとがき……………高橋成雄…(136)

〔付〕 ホンデュラスと協力隊……………(2)
 ホンデュラスの略図と概要……………(3)

ホンデュラスと協力隊 (昭和55年12月1日現在)

最初の隊員派遣：昭和51年2月								
職種部門	農林水産	加 工	保守換作	土木建築	保健衛生	教育文化	スポーツ	合 計
派遣中	13 (1)	4 (0)	6 (0)			13 (8)	3 (2)	38 (11)
集 積 (累計)	19 (1)	5 (0)	9 (0)			15 (9)	7 (2)	55 (12)

ホンデュラス



ホンデュラス共和国概要

面積：112,088平方キロメートル（日本の約3分の1）

人口：283万4,700人（75年，人口密度25人/km²）

宗教：カトリック教

公用語：スペイン語

1人当たりの国民所得：392ドル（76年，国連統計）

通貨：レンピーラ，1米ドル=2.00レンピーラ

首都：テグシガルバ（33万人，海抜1,000m）

政体：軍事政権下の共和制

元首：ポリカルポ・バス・ガルシア軍事評議会議長（暫定大統領）

主な生産物：バナナ，コーヒー，とうもろこし，棉花，木材



農業試験場での活動と普及活動

第7, 8号報告書

派遣国 ホンデュラス 52年2次前期組

職 種 野菜栽培

氏 名 中 村 次 義

配 属 先 天然資源省農村開発総局

—中村隊員の略歴—

氏 名 中 村 次 義

生年月日 昭和27年5月26日

出身 県 長崎県

職 種 野菜栽培

派遣期間 53年2月～55年2月

I はじめに

このところ猛暑が続いている、このコマヤグアである。部屋の中の温度計をみたら摂氏33度もあった。例年のごとくマンゴーの青切りが街角に出まわり、セマナサンタ（復活祭）の予行行列も早朝、3時頃からバンドの音を響かせ、何事ぞと、びっくりさせられた。

1年の任期延長の件が身体の不調と、天然資源省の都合であきらめざるを得なくなったことは残念であるが、この2年、自分で思ったことの60%ほどは達成できたかと思う。農民の中になんか深く入り込めたことや、試培のしただけが、1年をもって発生したこと等、強く印象的なことごとくも数多くある。まあ、思い切りやれた2年間であったと思う。今後、機会があるなら、体調を十分に整えた後、2年間の貴重な体験を生かし、再度、開発途上国の場で、新たな協力というものを試みたいと思う。

II 2年間の業務内容

この2年間の活動を大きく分けると、最初の試験場における様々の試験と、後半の普及デモンストレーションになる。前半の試験場時代は、まだまだ、ホンデュラスの農業事情もあまり把握できないまま、野菜の表面的な問題の対策、いわゆる栽培方法のあり方とか、病害虫のコントロール等に主眼を置いてすすめた。後半になるにつれて、農業試験場の影の薄さを、農村を回ることにより知り、普及活動の重要性をより多く見出した。野菜においては、その種類の少なさもさることながら、村部における栽培がほとんどなく、また栽培の知識・技術もかなり低度のもので、数箇所デモンストレーション菜園をもうけるかわら、栽培者の関心を高め、トマト、ピーマン、キュウリ等の栽培指導に取り組んだ。また、コマヤグアの平地においては主に新品種の導入や病害虫のコントロールに力を注いだ。

後半の普及活動においては、かなりの成果があったと思う。傾斜地が多くて土地条件のあまり良くない所がほとんどではあるが、農民の野菜栽培に対する評価がかなり高まり、栽培指導を願うものが続出してきた。こちらの方でもかなり力になったし、数々の村落で家庭菜園の普及をしようと動きだしてきたのも、実に、嬉しいことである。ただ残念なことは、すでに経験をもつ平地部の農民層において、耳を傾けることはあっても、こちらの指導につ

いてきてくれなかったことである。普及活動においては、すでに栽培されている所よりも、まだ何の知識・技術もない山間部の方が、ずっと、のみ込みも早いし、栽培の方法等も、こちらの指導するものに近い状態にすることは楽であった。

1. 農業試験場の1年

① 試験の目的、方法、結果

まず、どのような試験を、どのような目的、方法でやって、結果はどうであったかということを経括してみたいと思う。

試験の方法はすべて区画式で、3ないし4の小区の反復。1小区の面積はだいたい 10m^2 ($2\times 5\text{m}$) から 14m^2 ($2\times 7\text{m}$) の範囲でやった。試験総面積は 300m^2 くらいから $1,000\text{m}^2$ ほどまで、それぞれ野菜の種類、試験の目的によって上、下。試験用資材(種子、農薬、その他)は、協力隊に頼るところも大きく、50%くらいしか現地試験場で調達できなかったと思う。労働者は常時10名ほどいたが、それは野菜だけではなく、殺類の方にほとんどとられ、自分でかなりやらなければならなかった。

試験の種類であるが、これはコマヤグア地区に多く栽培されている野菜(トマト、玉ネギ)を中心として、品種試験、肥料、病害虫、除草剤、栽培方法と多岐にわたった。その目的は生産性を向上させるため、その障害の原因をつきとめ、より良い品種、より良い農薬の選択、あるいはその他の防除の方法の導入、栽培システムの改良等につきる。試験に使った農薬は Tamaron, Folidor, Metasistox, Lannate, Desis, Malathion, Parathion, Diptrex。病菌用としては Dithane, Benlate 等。肥料は 15-30-10, 12-24-12, 20-20-0, 18-46-0, 15-15-15, Urea (46%), Triple Fosfato (46%) 等。

トマトの栽植距離は 45×90 (cm) から 50×140 (cm)、無支柱、有支柱、現地式のハサミ込み方式、¹けん架方式等をいろいろ利用した。

玉ネギの栽植距離は 15×30 (cm) から 15×40 (cm) の溝植えと、現地式のタブラ方式をとった。

総括して試験の結果そのものはさんたんたるものに終わった。その原因は試験場での仕事に慣れていないこと、土が極端な粘質土で栽培に不

向きであったことの2つがあげられると思う。最初、現地の方法を利用して試験をやった結果、様々な技術的な問題と病害虫等の把握がかなりできたことが、成果といえはいるだろう。

しかし、玉ネギの品種試験においては、かなりの違いを見出すことができ、後半の普及活動にはずいぶん役に立ったと思う。トマトについていえば、トマト疫病の猛威を知ったことで雨期におけるトマト栽培に意欲を燃やせた。キャベツにおいては、高い農薬を使わないことには、虫害がひどくて、コントロールがなかなか難しいことがわかった。

肥料試験をする段階においては、土壌検査をやった。カリウムの成分がかなり高い濃度で含まれており、マグネシウム等微量要素との関連を明らかにし、それがトマトの疫病等に、どれほど関係があるものか調査してみることが大切ではないかと思われる。

② 病害虫問題（以下、列記する）

(1) トマト

病害=疫病：雨期栽培において多大な被害を与える。

青枯れ病：土壌条件の悪い所に多発し、かなりの被害がある。

ウイルス病：アブラムシによる感染と思われるが、100%発生した圃場もある。

虫害=エリオティス：夜盗虫の1種で果実に食い入り、多大な被害がある。

アブラムシ：ウイルス伝染。

デアプロティカ：ハムシの仲間で初期生育において茎を食いちぎったり、葉を食べたり、1年中発生する。

ハモグリバエ(ハマキ)：2月から3月にかけて大発生。葉を地団状に食害して最後は葉を巻いてしまう。

カメムシ：果実につき吸汁して腐敗の要因をつくる。

(2) 玉ネギ

病害=疫病：雨期において育苗時から大発病。白くなって枯れてしまう。

虫害=トリップス、ヤギトビムシモドキ：12月頃より発生。茎部にもぐり、昼夜をとわず被害を与え、茎葉が白くなるほど吸汁して、多大な害を与える。

(3) キャベツ

コナガ：結球期に防除をおこたると、被害を防ぐことは難しい。

(4) ビーマン

ゾウムシ：開花期頃より発生。果実内に卵を産みつけ、幼虫の生育とともに落果をおこす。被害甚大。

(5) キュウリ

ウドンコ病：栽培後期にかなり発病。

まだ多くをあげることはできるが、今後の課題として特に重要な項目は、トマトの疫病対策、玉ネギ疫病対策、ビーマンゾウムシ対策の3つをあげたい。そのためにも植物病理関係の隊員派遣が望まれるところである。

施肥についてはまだ考案の段階であるが、前記したようにカリウムの含量が非常に高いことと、マグネシウムの含量が非常に少ないことからトマトの疫病等との関係をみる必要がある。

2. 普及活動の1年

① 対象農家の選定

後半の普及活動に移って、まずは、対象農家の選定及び農家への取り入り方について少し記してみる。

最初は、やはり、全体的な農家の実態を知るという意味において、ありとあらゆる所まで足を延ばし、現状の把握に努めた。具体的には野菜の栽培がしてある所ごとに足を止め、培地の中へ入り、生育の状況を見ながら農民の姿を探す。何か最初は、勝手に耕作地の中に入ったら怒られるのではないかと、おそろおそろ近づいて見ていたものだが、今までに「俺の土地に勝手に入りやがって」と怒られたことはない。たいていの農民はにこやかな態度で迎えてくれる。だから、取っつきは非常に楽であった。チノ、チノと珍しがられることもたびたび。自分の栽培の経験を誇らしげに話してくれる。こちらから「こういう目的で、こんな計画をもっているんだが、やってみないか」というと、「それはいい考えた、もっともだ、そうあるべきだ」という。その同調ぶりにこちらが喜ぶほど、舌のまわりはなかなか素晴らしい。ついでに、「日本へは車で何時間かかるのか」とか、「その長靴はなかなかいいが、いくらした」

とか、「その時計は、いくらだ」とか、人なつっこく聞いてくる。だから仕事の話もそっちのけで日本の紹介を始めなければならない。だいたい彼らの質問の大部分は「日本は車やカセットレコーダーが安くていいだろう」とかいうように、あふれる日本製品を背景にしたものが非常に多い。日本には「トルティーヤはないぞ」というと、何か感心したように「トルティーヤがないって、それじゃ何を食っているんだ」と、まるで彼らの世界では考えられないこととして妙な顔をする。彼らの固定観念とはものすごいものだと思う。それは何年もの間、ただ、トルティーヤとフリフォーレスで生きてきた彼らにしてみれば、トルティーヤがないということは、歴史がないということに等しいのであると思う。ともかく、最初は日本とホンデュラスを比較しながら、様々な話題を並べ、彼らを驚かせたり、おだててみたり、批判してみたりして、彼らの一部に入り込んでいくのである。どのような農民でもよい。手当たり次第にあたって話をしてみる。そして、だんだん気づくことは、あまり調子よく同調したり、良いことばかりいいてる農民はだめだということである。

間違っても、ある程度は自分自身の意見をいうくらいの農民の方が、その先、ずっと長続きするし、こちらも、その気に対応できる。だから普及対象の農民の選定にあたっては、何でもかんでも「そうだ、そうだ」と同調してくる人間は選ばないことが、その先、失敗しなくてよい。そういう連中にあたって失敗でもしたら、手のヒラを返したように「俺はそう思っていなかった。あれは間違っていた」等と、自分の不十分な管理を責任転嫁して、常に自分を正当化しようとする。そのような観点からも、農民の選定は慎重でなくてはならないと思う。だから、農民の選定は、ほんとうにやる気のある者を見つけだすことが第1である。

第2に選定項目としてあげられることは、栽培に関する問題の大小である。資金、水、病虫害の3つがこの地区でのネックである。種子を購入したいが金はない。肥料も農薬も買いたい金が無い。これは農業試験場からの持ち出しや、自腹を切った購入でやれるが、対象範囲は狭いものとなる。大きな土地を対象とすることは難しい。当然、小さな土地を細々と耕やしている農民ということになる（試験研究を対象とする小面積の設置は、いずれの場所でも可能である）。

水の問題は深刻である。こればかりは手に負えない。最低限度の水が

確保できないことには、どうしようもない。だから、対象はさらにずっとしぼられる。農地の近くを小川が流れていて、小さなポンプで吸水灌漑することができる所、小川から直接水を引くことができる所、あるいは水道からホースで水を導くことができる所、そして、あとは雨期の利用と限られる。ポンプも、弱小な農民に購入を期待することは難しく、試験場あたりからの持ち出しで、ようやく、いくらかの農民をカバーできる程度である。また水道からの取水は生活用水に替くので、なかなか思うようにできないのが現状で、現に水道からの取水で問題を引きおこした例も2、3あり、また、1例ではあるが、ある村でデモンストレーションをかねて少しばかりの野菜を水道の水でつくることにした。生活用水は十分あり、水タンクからは水があふれていた。また、灌水は毎日するわけではなく、1週間に1度くらいで、それも夜だけだと説明し、承諾を得ようと思ったが、1農民の中に何か新たなことが進行することを嫌ってか、結局、「水は不足していて、たとえ夜といえども、農業用水としてはやるわけにはいかない」という村人の意見におされてしまった。定植したあとだったので、これは大変だと思ったが、その農民はロバで水を運んでも収穫してみせると気負っていた。結局、例年にない時雨によって栽培はどうか成功することができた。このように、水の問題はかなり複雑でもあるし、よく調査してからでない、後で大きな失敗をする恐れが十分にある。

次に病虫害の対策である。これも最初は薬散器から確保しなくてはならない。小さい噴霧器でも1万円以上はする。これも結局、試験場からの持ち出し、貸し出しで始まる。病虫害の種類も実に豊富で、農薬散布なしでは収穫できないのが現状である。変わったものでは、ソノボポと呼ばれるアリの親玉みたいなのが、苗床とか定植後の畑でかなりあばれる。茎や葉を切り落としてしまう。それもバラバラにして行列をつくり巣の中へ運んでいく。夜に活動することが多いので、ちょっと目を離すと、ひどい害をこうむる。たいていの所にいる。巣をつきとめて、BHC粉剤などで徹底して抑えているが、巣を見つけるのもなかなか大変で、これにも大変頭を悩まされたものである。貧農ばかりだから、他の病虫害の防除も安い農薬を使った通り一遍のものだけに、きわだった効果を見い出せないのが頭の痛いところである。それだけに重要なポイントは

散布の適期というものを農民に早く的確につかんでもらうことである。その指導が病虫害対策においては、もっとも必要なことだと思う。

② 農民への融け込み

農民の選定と場所の確保はできた。これまでもかなりの時間が費やされ、無駄と思われることも積み重ねなければならないが、これから先がまたなかなか大変で、思うようには進まない。彼らとは四六時中接してはなくてはならない。悪くいえば見張っていなければならない。それほど彼らは、こちらがいったことを実行しない。口をすっぱくして何度も何度も同じことをいい、「必ずやるように」といっても、次に出かけた時には上の空。こちらがいいたさない限り、忘れたようなふりをしている。様々の口実を並べて責任転嫁するのはまだよい方なのかもしれないが、こちらもやる気をなくすのはあたり前である。だが、やるからにはしつこく食いさがらなくてはならない。最初が肝心で、徹底して、すぐやるクセをつけさせることである。口先だけでは、どうにもならない。畑に引っぱって行って、ともに汗水を流すことは、普及活動の中で一番大切なことと思う。彼らは働かない現地の普及員や技師を見ているからともに働く「チノ」に何かを感じるはずであり、彼らとしても働かないわけにはいかない。

普及活動は地味な仕事だが、クワを持った時にはちゃんと持って、派手に働かなくてはならない。それはかなりの重労働である。それも1ヵ所ではない。1日に、車で100㎞ほども乗ったうえで、口がすっぱくなるほど、繰り返して説明し、クワを持って動き回る。肉体的な疲労感もさることながら、先が見えないような精神的な疲労感によって、疲れはますます重なる。最近では車に乗るだけでも疲れる。

要は彼らがいかにして1人立ちできるかだ。幸いにして、最近、あちこちで野菜に関心を持ち、栽培を手がけてみたいという人たちや、家庭菜園のグループをまとめて指導して欲しいというような動きが目立ってきたのは嬉しいことではある。しかし、それは、まだまだ表面的なものではなく、好奇心の一部みたいなものだ。それを実際に実のあるものとするには、単調ではあるが、同じことを繰り返して繰り返して、疲れ果てるくらいまでやらなくてはいけないような気がする。

III 生活状況と野菜栽培

「やっぱり難しいなあ」と、つくづく感ずるホンデュラスである。確かに、この国にも都会にはちゃんとした建物があり、流行の車も走り、人々もさっそうと歩いている。私の住んでいるコマヤグアにしても、最近とみに新しいきれいな建物や映画館が建設されている。何か町がよくなってきているような感じである。そういう一面を見れば、この国も発展しているといえるのかもしれない。だが私の目にはそれが虚像としか映らない。ありとあらゆる電機製品、車、衣服等から生活必需品にいたるまで外国製品である。この貧弱な国のどこに、それらを買えるだけの資産があるのかと、不思議でならない。

この国の産業は農業が主体である。コーヒー、バナナ、木材、肉といったところが主な輸出品である。資料等を見ても、輸出量がかなり伸びているとはいえない。ただコーヒー価格の値上がりは少しは潤いをもたらしている程度である。毎年、同じような生産を続けていても都会には何か新しい物が出現してきている。これは、どうみても、おかしな現象である。外国からの援助とは、そんなものだろうか。援助というのは、ますます高所得者の富をふくらませているようにしか思えない。ホンデュラスのほとんどの部分である村部の人々の生活は30年、40年前の生活、いや300年、400年も前の生活とさして変わらないであろうと思う。彼らの食生活の基盤は雨期を利用したトウモロコシとフリフォーレスの栽培である。それは、何百年も前から同じようにしてつくられ、トルティーヤや豆煮として食べられてきたのである。そして今日、まったく同じような栽培法（雨期が始まると同時にトウモロコシを播き、雨期後期にトウモロコシ栽培地後にフリフォーレスを耕種）で、同じような料理法で食べられている。

住居は土をこねて固めたブロックを積んで造ったものがほとんどである。奥地へ入って行くと、まだまだ草ぶきの家も少なくない。家財道具といえるものはほとんどない。

衣服は、ほころび、やぶれたものを何度もつくろって着ている。子供たちはほとんど素足。大人でも概して素足が多い。靴を持っているものでも足の指がはみだすような代物である。

電気は、まだほとんどの村にないといってよい。かりにあっても、小さ

なディーゼル発電機による、ごく一部の時間帯配電がよいところである。たいていはランプによる照明を利用している。水道は意外に普及している。各村落ごとに水源地を見つけ、そこから長いパイプで水を引いている。

トイレは、まだまだ不備だが、保健所関係の努力でコンクリートの管状のものがかなり普及しだしたようである。

食事は上記のように、トルティーヤとフリフォーレス、そして時期ものの果実（アグアカテ等）やバナナ。燃料はマキが主体である。村落部では水道がかなり普及していること、学校や簡単な保健所が設置されたこと、ラジオがかなり出回っていることぐらいが歴史上改善されたことであろうか。

こう書くと、何か「立派なものではないか」という気もするが、個々の農民の生活自体はほとんど変わっていないのが現状である。トウモロコシやフリフォーレスの耕種法ばかり。2,000年間も変わったことのない牛とスキで土を起し、クワで耕やし、チューソ（棒の先に鉄ヤリをつけたもの）で挿種穴をつくり、種をまく。肥料はやらない。できたトウモロコシは手でばらされ、フリフォーレスは棒でたたいたあと、風で種ともくずに分けられる。全く旧態依然である。彼らはまったく工夫ということをしなない。ちょっとした仕かけや新たな道具等で、作業をもっと能率よく、楽にするという工夫はみられない。そんなことをしなくとも十分であった、といえ、それまでであるが、何か新しいものが考案されてもよかったのだ。ゆえに、この国の農業者に改良策を見い出す能力がなかったともいえるかもしれない。

しかし農業に限っては、一口にそうだとばかりはいえない。農業の発展の段階は常に工業より一歩遅れたものであって、手工業や軽・重工業の副産物の恩恵を多分に受けてきている。いわゆる、工業によって生みだされた新しい機械、設備等が農業のそれこれに利用できるという形で発展してきたものであって、農業そのものの中から生まれたものはスキとかクワといった類でしかない。そういうところに農業の負い目があると思われる。この国の手工業、軽工業を極論すれば、粘土焼きがいいところであろうか。そして、それは農業の発展を担うものではなかった。

日本及び先進諸国においては、手工業、軽工業、重工業と発展していく段階において、農業も大変な恩恵を受けて、今日ではものすごい設備と機

械力で多大な生産量をあげられるようになった。はたして、それが農業といえるかどうかは別として。

いわゆる農業は、工業の発展という裏づけがあり、生活水準の向上、食生活の変化、消費量の拡大への道を歩み始めてこそ発展という名を聞くことができるのである。そうすると、『生活向上のために農業の発展をはかる』という課題をかかげることは、どだい無理なことで、まったく骨のおれることばかりであると思う。工業のない国では農業の発展もありえないというのが、私の実感である。

最近になってやっと気づいたことだが、野菜栽培の目指すものは、現段階で新しい技術の導入とか新しい方法による収穫量の増加ということではないということである。野菜というのは、生産から販売まで、かなり手っ取り早くすませてしまわなければならない。それには、それに見合う消費量があって、その流通経路がしっかりしたものでないといけぬ。生産量を高めるということはよいことだが、それに消費が追いつかなくては、何にもならない。ホンデュラスは、たかが300万の人口。国内需要を満たすには、さほどつらくともすむはずである（食生活の急変は考えられないから）。野菜の消費量が生活水準の向上によって上向けば、生産拡大も意味があると思うが、生産だけ伸びて消費が伸びなくては、野菜はだぶつき、価格は下落する一方であろう。野菜は他の作物と比べると流通に非常に弱いし、外国への輸出というのもままならない。まして、まわりの国々も似たりよったりの農業国だし、やたらと商業的な生産を増やすことは、かえって悪い状態をもたらすと思える。

それでは何をすればよいかといえば、家庭菜園の村部普及である。個々の家庭から、小規模ながら、国民の食生活の改善をはかることが一番大切なことのような気がする。農民は意外と、野菜はただ換金作物としか考えておらず、小さな菜園はまずやろうとしない。だが、消費拡大のないままつくりすぎたら、価格は下落して、現在野菜を栽培している人々をおびやかすだけである。

自給自足という形の小さな家庭菜園で、生産から食べ方まで一貫した指導をして、貧しい農民の食生活をフリフォーレスとトルティーヤだけの現状から、野菜類を加えた潤いのあるものに変化させたいものである。流通に弱い野菜は、つくりすぎではいけない。ともかく現状の生活水準では、

家庭菜園程度に抑えておくのが妥当なところだと思う。それで米とか、大豆とかいった穀物やコーヒー、綿、タバコ等の生産にもっと力を注ぐことが妥当である。国際的に不足がちな、輸出力のある作物にもっと力を入れることである。

一面、野菜でとらえれば、世界的に原油の供給が高コストとなってきた現在、農業においても必然的に高い生産費を強いられるわけだ。北部アメリカやヨーロッパにしても、冬場の施設園芸はこれからかなり難しくなるものと予想され、とりわけ、米国あたりのグリーンハウスによる冬場のトマト、キュウリ等の栽培はかなり減少して、供給不足になることが考えられる。そういう観点で将来をみると、冷凍設備を完備した輸送体系を整えながら、それらの生産を目指すのも、1つの道であると思う。

現にこの国も数年前から、冬場の米国市場向けトマト、キュウリの輸出試験が、米国資本の会社と天然資源省の一部である園芸部等によって、毎年行なわれている。そういう意味においては、将来を見越した素晴らしいプロジェクトであると思えるし、国としても、もっと力を入れるべきであろう。

IV 私の見たホンデュラス

私はこの国に欠けている大事な要因を見い出すことができる。2年間の生活を通じて肌で感ずる、いつものないものである。それは、この国の人間がアラガン（怠け者）といわれていることとエゴイズムである。

貧しい人々に、一足飛びに自分の国を良くしようという意欲をもて、ということは難題であるが、個々人が自分の生活をよくするために一生懸命働くことさえしないのである。この中米諸国は、時おり地震はあるが、中東やアジア地区に比べれば、比べものにならないほど自然条件に恵まれていると思う。広大な砂漠があるわけでもなし、豪雨による洪水になやまされることも少ないし、働こうと思えば自然は多くの恵みを与えてくれるはずである。私の知る限りの農民は、午前中一杯働いて、午後はゴロゴロしている連中がほとんどである。

1つには、さして働かなくとも、飢えずに食っていけるだけの最低のものはあるという考えが底流にあるからであろうか。確かに、この国は、文化的な生活を望まない限り、気候も年中おだやかだし、さして、あくせく

働かなくとも十分に生きていけるのである。また何百年もの間、そうしてきたのである。彼らにも「もっと豊かな文化的な生活をしたい」という願望はあるはずであるが、その願望は、いつも「そんなに働かなくとも、こうして朝のうちにトウモロコシの草をとって、あるいはフリフォーレスを播いて、耕やして、昼からゆっくりしていても、悪いものじゃない」という考え方で打ち消されてしまうのだろうか。

もし彼らの願望がほんとうに強かったら、新たな意欲をもって、もっと働くであろうし、生活にも活気が出てくるはずである。しかし2年間を通じて感ずることは、彼らが「今のままでいいじゃないか。貧しくはあるが、さして苦しむほどのことじゃない」という哲学の中に生きているのではないかということである。

私はそう考える時、迷いを感じる。「このままでいいのではないか」という考えと、「いや、彼らにも、もっと文化的な生活を楽んでもらいたい」という2つの考えが錯綜する。しかし私は、人間として生まれたからには、常に努力と前進が無くてはだめだと思う。親から子へという同じ生活、慣習の繰り返しではだめだ。親の世代の考え方をより前進的にすることは、今の状態ではまず不可能だとしたら、子供たちに必要なものは一体何だろうか。彼らに努力と前進の気風をもたせることができるものは教育しかないと思う。いわゆる、教育革命こそが、この国を発展させる礎であると信じて疑わない。

この国の宗教は、カトリックであって、教会は、どのような貧しい村へいっても、必ず、立派な建物である。だが、学校はどうか。確かに学校もかなり充実してきているものの、教会の比ではない。スペイン語でいう Fe (信念・信仰・信頼・正義等) ということのカトリックでは教義としていられる。しかし、私はこの国のカトリックは死んでいると思う。これほどの教会がありながら、その国民の大半は Fe というカトリックの教義をもっていない。とてもエゴイスティックであるとさえ思える。すべては自分を中心にして動いているというような考え方で、相手への思いやり、細やかな心遣いがほとんどみられない。もはやカトリックは死に絶えたといえよう。後に残るは学校教育である。

この学校教育で大切なことは、知識や技術を伝授するだけではいけない。日本でいう道徳教育という面をかなりの重点にしなければならない。

教育施設の充実をはかることもさることながら、教育者の教育、とくに道徳、倫理といった観念教育が重大な課題である。ホンデュラスの小学校教員養成学校はエスクエラ・ノルマルと呼ばれ、全国に6ヵ所ほどあるようだが、彼らは卒業とともに田舎の貧しい村々の小さな学校に配属され、1人で数段階の教育をやらなければならない。そういう村々で子供たちを立派に教育する責任が彼らにはあるわけだが、はたして現在の教員養成学校で、道徳、倫理といったことをどれほど重要視しているか疑問である。ともかく唯一の教育機関である村々の小学校。ここではっきりとした倫理教育を施さないと、立派な国の礎はできないというのが、私の意見である。

教育の場で働く教育者の教育が、まだまだだと思える。現在、日本において、先生は、サラリーマンとしか評価されなくなったが、昔は聖職といわれ、私の小さい頃にはそのしつけは厳しく、またそういう時代に育ってきたことを誇りにも思っている。やはり、そういうふうな聖職に近い状態にまで教育者を引き上げない限りは、この国の子供はいつまでもエゴイスティックな考えで物を見る。ひいてはそれが、国の発展の妨げになることはいくらでもないことである。怠け者とエゴイズムを少しでも少なくすることが、この国のなすべき最初の国策でなくてはならないと思う。そのためには、具体的にどのようにしたらよいか、それは我々にはいえない。それは、この国の中で、この国の人々が考えることである。

日本の飯が食いたい。おふくろのあの料理から出るふるさとの味を。最近つくづくそう思う。トルティーヤはもう全然食べない。フリフォーレスはノドにつかえそうな気がする。もっとサラッとした食物を食べたい。そう思うと、もうだめだ。トルティーヤやフリフォーレスはもう食べることができない。最近、21ヵ月住んだ寮から出た。コマヤグアの街の中に部屋を見つけることができた。ついに、コウモリからも解放された。そしてあのまずい、あの食堂の変化のない食事からも。1ヵ月は、このコマヤグアの街の中の食堂で食べてみた。あの寮の食堂よりは、ずっとよい。やっぱり生活の基盤は食べ物の良し悪しからだ。あんな所にあと1年も住んだら、最後にはコウモリに血を吸われて、ひからびてしまうだろう。しかし、よく我慢した。表彰ものである。あのベチャとしたフリフォーレスが皿に平たくおさまり、黄色いマンテカ（油）の海の中に浮かんだ目玉焼の白味の真ん中に、色鮮やかにこんもりと盛りあがった黄味を思い出すたびに、

「ああ、今夜もか」と期待を裏切られ、生きなければならぬと思いつつ食べた日々。あれは悪夢であったのだ。いやいや私もまんざら捨てたものではない。こんなに迫った素晴らしい詩が書けるではないか。あの過ぎ去りし日々の生活を思い出しつつ。

フリフォーレスも腹がかなりすいている時は、味をうまくつけ、固めに仕上げたら食えるということ、このコマヤグアに移ってきてから発見した。だが日本はもう近い。泣きごとをいうまいぞ。もはや、あのトルティエヤとフリフォーレスは過去のものぞ。

—新聞—

最近ようやく新聞が読めるようになってきた。コマヤグアの街の方に移って、よく手に入るようになったからかもしれない。たいていは、緊迫した世界情勢の動きを知るためだ。最近とみに国際情勢の記事が豊かになっている。このところ、どこもここも戦だ。困った世の中になったものだ。先が思いやられる。

この国には新聞が4つある。ブレンサ、ティエンボ、トゥリブナ、ヘラルドだ。ヘラルドは最近新しく出た新聞。この国の人にいわせると、ブレンサは軍部新聞だそう。『読むならトゥリブナ、ティエンボにしる』といわれた。この国の人々も軍部に対する不満はかなりもっている。時おり、そのトゥリブナ、ティエンボに皮肉ったマンガや写真が出ている。印象的なのは、どちらの新聞だったか覚えていないが、警察のトヨタのパトロールカーの中で寝ているポリス、それも足を高々とドアにたてかけて、ぐっすりと眠り込んでいる写真だ。軍部の統制がないだけ、まだましなのか。各新聞は、その性格をかなり異にしているようだ。

またこちらの新聞は人の死体を大写真で載せる。特に交通事故等の凄まじい血の海と死体を平気で載せる。こういうところにも国民性が出ているのだろうか。スポーツ欄も最後のページの方に、かなりさかれる。ほとんどはサッカーの記事で埋められる。それに何でもない人の誕生日だとか、人の紹介記事もかなりのウエイトを占めている。人口の少ない所だからできる芸当なのかもしれない。値段は20セントボ、約20円。

—しいたけ—

しいたけの試培は全部で4ヶ所で行なっているが、楯国を前にして最後のチェックに出かけた。場所はラ・オキ。沖電気がその山の頂に電波中継

所を設けたところから付けられた地名である。標高は1,500m以上はあるかと思われる。山の方を見ると雲もかかっているし、気温もそれほど問題がないとみて、昨年2月、種菌を接種した。まる1年、長かったといえれば長かった。「帰るまでには、まず発生することはなかろう」と、ただ菌のまわり具合を、同じくコマヤグアで働いている君波隊員とともに、見に出かけた。彼にはこれから後の面倒を見てもらうために、見識を深めてもらいたかったからである。全部で3ヵ所に分けて置いてある原木。最初の所は菌のまわり具合は実によく、これなら今年雨が降り出す頃には、きのこが出るだろうと思い、次の場所へ移動した。原木を伏せ込んだ後に笠木を置いてあったので最初はわからなかったが、回り込んで下からのぞいて見ると、その椀木にきのこがひょっこり顔を出していた。一瞬、自分の目を疑ったが、まだ他にもいくつも見える。大急ぎで笠木をよけて見る。そこには、はっきりした輪郭のナバ（九州の方では、しいたけのことをそうに呼ぶ）が見える。びっくりすると同時に、それにもまして、ついにきのこが出たという喜びを抑えることはできなかった。こんなに嬉しいことが今までにあったらうか。それも日本とは違う異国の地で、ちょっと気候がきついで、半分は出ないだろうとあきらめていた矢先だった。この2年間のうちで一番感激した日であった。掃国を前に実によくおみやげができた。ホンデュラスでは、もちろん初めてのしいたけであろう。この国には、原木に使用できるロブレという木が割と豊富にある。とにかく、しいたけができるということは証明された。あとは君波隊員にいつの時期に、どのように採れるかということ調べてもらい、一応、しいたけ栽培の試験報告ということになるが、現在、日本ではしいたけ菌は輸出不可としている。この場合、はたしてどのような措置ができるものか、こちらできのこ菌をつくって、それから広げるしか手がないようだ。そのためには、どうしても、きのこ隊員が必要となるが、まず、もう1年は、君波君からのデータを待つことになるだろう。そのデータ次第で、隊員派遣、そして、きのこ菌の培養及び市場の開発が残る課題であると思う。いずれにせよ、こんなに嬉しい経験は、めったにあるまいと思う。

——神と道徳——（あるホンデュラス人との会話）

ホンデュラス人と話をしていると、宗教の話題がよく出てくる。「お前は神様を信ずるか」とくる。こちらは神について、特別に深く考えたことも

ない浅はかな人間であるから、すぐ「俺は神様というものを信ずるとか、信じないとかというふうに考えない」、「俺にはどうでもよいことである」と答える。すると、それじゃ「この世界はだれがつくったのか、お前は どうしてここにいるのだ」などと、つまらなくはあるが、するどい質問が返ってくる。ちょっととまどう（この野郎、どうやって、とっちめてやるのかと考えながら）。

はてしない宇宙の彼方まで一気に飛躍して「そうだな、それじゃお前は この世界を神様がつくったとでもいいたいのか」と反問する。「そうだ」と自信ありげに答える。それもカトリックの神様がつくったとでもいいた そうに。「それじゃ神様というのはどこにいるんだ。お前らは、わからない ことがありゃ、神様、神様でかたづけてしまうのか。それじゃ発展がないよ」ときびしく追いつめる。

そのうちに、うやむやのうちに「お前は聖書を読んだことがあるか」とくる。「ずっと背に読んだことがある。ひつじがどうのこうのとか、信ずることがすべてであるとか、かなりくだらなくはあったが、おもしろいことが書いてあったような気がする」と、かなり低くおさえる。「そうだな、俺も苦しいことがあったら、神様というものにすがりたいものだ。だけど、何のために、教会へ行って礼拝をしなければならぬんだ。ただ聖書に書いてあるからそうするのか、全くこの国はどんな小さな村に行っても、ちゃんとした教会はあるが、学校は少ないし、貧弱だし、その辺はいったいどうなんだ。ただ信じ込むだけでいいのだろうか。俺が見る限り、神様の恩恵とは、たいしたことはないな。信じている割には、お前らは全く Fe（道徳）ができていないじゃないか。それが神の教えなのか。それとも信じかたが足りないのか」。

「俺は神がどうのこうのと考えはしないが、少なくともお前たちよりは、ずっとまじな礼儀をもっているし、利己的な考え方もあんまりしない方だ。神様を信ずるといっても、日頃の行ないが、そのようじゃ、神様というの もたいしたことはないんだ。もし神というものを考えるならば、それは、礼儀とか作法とかいった日本という道徳、人の道ではないのか。教会へ行って賛美歌を歌ったり、聖書を復誦したりするより、学校で、人と人がうまくいくためにはどうあるべきかを教育した方が、ずっといいんじゃないか」と迫る。

この会話の間には、もっと多くのことが入っている。彼らは、どうして私に神というものを信じさせようかと、熱心な宣教師になっている。例えば、「お前は神の姿を見れば神を信ずるか」とか、「お前はどのようにして毎日飯が食えるのか」とか、「お前はすべてを科学的に考えるのか」とか、「それじゃ、お前は何を信じて生きているんだ」とか(まるで神を信じなければ生きていけないように)。

ここはもう両国の慣習の違いということで片づけた方が無難だということで、「俺もこの国に生まれていたら、そうになっていたかもしれない」と1オクターブ下げる。

「要するに人間は、いかに人に迷惑をかけずに、礼儀をもって正しく生きるかということを経々な形で表現しているんだよ。よくわからなければせいぜい“Reje bien para que salvas” (助かるようにいっしょうけんめい祈るんだな)」と抑える。実におもしろい。神というものの抽象性を教会とか祈りの形で強く表現する国々。だが、実生活の中身は……。もう少し、そういうものを学校教育という形に変えたらどんなものだろうかと思った。

—ホンデュラスの山—

ホンデュラスは飛行機の上から見ても「ほんとうに山国だな」と感ずるが、車であちこちの村々を回る時でも目に入ってくるのは、松、松、松。ほとんどが松林。それも特別な手入れをしているわけでなし、本当にきれいな松林というのはほとんどお目にかかったことはない。伐採後も植林するわけでなし、自然に生えれば生えるという感じである。この国には森林開発局がある。名前は cohdefor という。しいたけ栽培を始めるにあたっても彼らの協力を得た。松だけではないかと思うが、この国の輸出産物の第3位に木材が控えている。1978年の統計によると、1位はコーヒーで1,000,000袋(60kg) 422億円(当時)、2位にバナナ39,200,000箱(40lb) 270億2,000万円、第3位が木材で400,000m³ 84億6,000万円、第4位が肉22,600t 77億7,000万円、第5位がえび類2,500t 31億2,000万円となっている。

これからもわかるように、資源不足の今日、ホンデュラスはますます山林の重要性を見出し、大いに植林を進めるべきである。現在のような営林管理では、せつかくの国の資源を有効に利用できない。まあ Cohdefor

では、ここ数年来、輸出量を毎年 400,000m³ に抑えている。賢明な策ではあろう。営林管理がうまくできない今は、伐採量を増やすと、山を荒廃させてしまう恐れが十分にあるからだ。しかし、それだけにとどまっていたはいけない。植林技術をどんどん導入して、もっと密度の高い山林をつくっていくべきだ。

Cohdefor の大きな仕事のうち、もう 1 つ大事なものは、山火事の防止及び消火である。この国にはまだまだ山を焼く習慣が残っていて、それから飛び火して大きな山火事になることも多い。彼らは、四六時中、高い山の見張り場所から双眼鏡等で監視してはならない。焼き畑の習慣が悪いことを農民にわからせるのはなかなか難しい。彼らは、山の斜面を焼いて、きれいにして、トウモロコシやフリフォーレスを耕作するのだが、草や木々を燃やすことによって、有効な有機物が灰となって雨で流され、ますます山を荒廃させ、結局、何をつくってもうまくできないようにしてしまうのである。我々が村々を指導して回る時も、焼き畑をしないよう、強く説いている。

Cohdefor では、山に住む人々に松脂の採取も指導している。1 人で 1,000 本から 1,500 本ほど受け持つ。ある程度以上の大きさの松の木の高さ 1.5m ほどのところの一部をはぎとり、ブリキの受け皿を釘で打ちつけその先端にプラスチック製のコップをつける。松脂はベタベタするので、彼らは腰に軽油を入れた容器を下げている。数日ごとにロバをつれて、たまった松脂を樽に採取して回る。一杯になった樽はロバの背につまれ、Cohdefor で用意しているドラムカンのある場所まで運ばれ、あとはトラックで精製所までもって行かれる。彼らの仕事も、月にすると 150 レンピーラから 200 レンピーラほどになるそうで、なかなか仕事のない彼らにとっては、よい収入源である（1 レンピーラは 2 分の 1 ドル）。

もう 1 つ Cohdefor では、村人の使っているかまどの改良にも力を入れていて、割と効率のよい粘土のかまどを普及させている。まきの量がずっと少なくすすみ、農民もかなり積極的に取り入れているようである。松脂にせよ、かまどの改良にせよ、今日のような資源不足と高いコストの燃料しか出回らない時代のことだから、これからも、もっと力を入れてもらいたいものである。

—出張授業—

コマヤグアから75kmほど離れた山の学校（程度は中学ぐらい）から、野菜の授業を3日ほどやってほしいという要請を受けた。これまでほとんどが試験場や農家回りで、多くの人々を前にして話をするなどという経験がなかったので、できるかどうか不安だったが、一応承諾して出かけた。途中の道の悪いこと。まだ雨期の後半だったため、タイヤはすべるし、初めての道だし、なかなか大変だった。約3時間を要した。とても普通の車では行けない所だ。トロクの4輪駆動に感謝した。

最後の渡河はまた大変だった。もう夜になっていたし、川の水がかなり増していた。それでも、ここまで来たからにはと、ドブレのロウにギヤを入れかえ、川の中へ飛び込む。川の真ん中あたりで、ライトは完全に水の中にかくれてしまった。一瞬ヒヤッとしたが、アクセルをグッと踏み込みじわじわと脱出。対岸についた時には、さすがにホッとした。前にもエスベランサという所へ行ったが、この時は川ではなかったが、道が沼みたいになっている所で完全にはまりこんでしまった。ダブルアトラクションでも脱出できず、最後の頼みの綱、ウインチで脱出しようと牧細の太い杭にそれを巻きつけて出ようとしたが、杭の方が抜けてしまって、非常に困った。その時は仕方なくかなり左手の方にあった樫の根本に巻いて脱出できた。その時の嬉しかったこと。そのように、この国の雨期の道路事情は極端に悪いし、4輪駆動のウインチつきというのは実に頼もしい。

話はそれてしまったが、その町サンルイスに着いてから、その学校の校長と授業の計画を練り、学校の様子等も聞かせてもらった。校長はまだ35歳ほどの若い人で、先生は全部で5人、生徒数は120名ほどであった。クラスは3つで、1年30名、2年30名、3年60名といった感じだった。

学校の校舎も借り物で、思うような設備もなく、生徒たちも不自由していることだろうと思った。計画では全生徒に、一般的な野菜栽培の講義と学校のもっている小さな土地で実地の栽培指導をすることにして、最初の2日間を講義にあて、夜は16ミリフィルムの上映、1日半を実技に振りわけた。

講義の方は、たった2日ほどで野菜のすべてを教えるというわけにもいかず、今までやってきた仕事の内容を中心に、野菜の重要性、病害虫の種類と防除、主な作物の栽培方法等について、かすった程度で終わった。

初めての授業であった。「生徒もいろいろのものだなあ」と、先生の苦勞をちょっと垣間見る。真剣にノートをとっているもの、ポケーと見ているもの、アクビをしているもの等様々である。最初にスペイン語がまだまだであることを断わったが、黒板にチョークで書いている時も、RとLの区別がよくつかない私は、生徒に聞きながら進めたものだった。そこはもう厚顔である。私のヘタなスペイン語で、彼らがどれほど理解できたか疑問であった。最後に、そのことを聞いてみたら、よく理解できたとのことだった。彼らは礼儀を心得ているなと思った。1年から順に2年、3年と3クラスを受け持ったが、3年の60人は授業をやっていても手ごたえがあるのを感じた。質問もするし、生物の授業も受けているので、かなり興味があったと思われる。また卒業も間近で、次の農業関係の学校への進学を希望する生徒もいくらかあって、有意義な、なかなかおもしろい体験であった。夜の映写会の方も両親を一緒につれてきたりして盛況であった。

実習の方は、主に苗床のつくり方、播種方法、堆肥のつくり方を中心に行なった。それぞれの家庭からクワやスコップ等を持ってこさせ、土の準備から始めた。女生徒は全体の半分以上もいるが、日本の女生徒のように妙に恥づかしがったりすることもなく、クワを持って畑づくりに励んでいた。やっていてなかなか嬉しい光景である。苗床に種を播くにしても、皆競って種を受けとり、播いていく。こんなに多くの女生徒に囲まれて、こんなことをするのも悪くはないなと思ったりした。

ホンデュラスの中学生、高校生というのは、日本と同じく制服をつけている。日本にいる時は、制服とは、やぼったく、いやなものだなと思っていたが、こちらでは何か、かえって制服の方がすっきりしていて、いいもんじゃないかと感じた。和気あいあいの中で3日間が終わり、その後、適当に出向いて栽培指導をすることとして、その学校を去った。貴重な体験でもあったし、1つの仕事の方向を見出した感じでもあった。

—指導者養成—

11月から12月にかけて、遺跡で有名なコバンの近くからきた若い3人を野菜栽培の習得のためということで受け持った。名前はベドロが2人、もう1人はヘスース。いずれも小学校を出ただけの連中だ。なかなかやる気十分の連中だった。彼らの住むところもだいたいコマヤグアと似たようなところで、現在まで働いてきた自分の経験から、あちこちの村々で普及指

導をやりながら、彼らの面倒を見ることができた。彼らは私のよき助手であり、また受講者でもあった。対象農家で畑の土の見方とか、苗床のつくり方、堆肥のつくり方、病害虫対策、農薬の種類、施肥、栽培技術の細かな点等々、実際の農民を客観的な目でとらえながら、彼らは私のいうことを少しずつ学んでいく。

2ヵ月近くも一緒にいたから、いろいろなことがあった。仕事の方にもだんだん慣れてくると、ホンデュラス人特有の悪い怠けグセが出てきた。実際に私が彼らに指導をしている時、例えば私がクワを持って働いている時でも、生徒が代わりに積極的にそのクワを取ってやるということにはなかった。ある時は、それは堆肥づくりの指導をしている時であったが、もう昼近くになって仕事もそろそろきりあげようと思って、「さあ、そろそろ午前中はこれくらいにしようか」と彼らにいった。だが、私はまだクワを持って、あるいは牛の糞を手でつかんで、堆肥づくりの箱の中にほうり込んでいた。そのうち、1人が近くの水路で手を洗い始めた。カチンときた。その時は、その行動をきつくたしなめてやった。「どこの世界に先生より先に手を洗うものがあるか。ちゃんとけじめをつける。最近お前らはたるんだ。どちらが生徒か先生かわからない。もしやる気がないんなら明日からくるな。他のちょっとしたことでも同じだ。すべて気をきかせて、自分から師の手間を省くくらいの心がけがなくてどうする」と。ある時は「皆で使った車だから、このよごれを落として、きれいにしよう」といって、「今から洗おう」と皆に伝えた。ところが「ちょっと部屋にもどってくる」といったまま、なかなか帰ってこない。私がもうほとんど洗い終えたころ、3人そろってやってきた。私は、何もいわず、また彼らにも洗わせず、黙ったまま洗い終えた。

夜は彼らのために、野菜栽培の講義を設けることがたびたびあったのでその折に、またきつくしかった。「お前たちはどういう心がけでいるのだ。そんなことで平気でおれるのか。まったく礼儀がなっとらん。当然、俺がやらなくとも、お前たちが感謝の気持ちで、我々だけでやってもいいというというのが普通だろう」と。彼らはシュンとしていた。私もいろいろこまごまとそんなことをいうのは嫌いな方だが、礼儀を知ってもらおうと、彼らにはたびたびそのことをいったものだ。

彼らは思ったに違いない。「とんだ日本人にひっかかったもんだ」と。全

く彼らにとっては災難だったかもしれない。私はたいていのそういう人々に、最初は、冗談に皮肉をいう。それでも相手に通じない時は語調を強くする。礼儀を知らない連中には、それを直してもらいたいからだ。2ヵ月間で彼らは、野菜の栽培方法より、礼儀を多く学んだかもしれない。今思えば、災に、おもしろおかしく思い出される。「あれでよかった」と。彼らにも結局は、よい思い出として残ることだろうと自負している。

この2ヵ月を通じて、指導者養成というものもだいたいこの方法でいけると思う。ホンデュラスの国も、小さいとはいいいながら、なかなか広い。わざわざ出かけて行って、その地方ごとに仕事をかたずけていくということは不可能だ。1人のボランティアの行動範囲は限られている。コマヤグア周辺の村々で精一杯である。あちこちの村々を回りながら普及指導をしていく。その過程の中に、別の違う地区から数人、指導者になれるような若者を呼んで繰り入れていく。こちらも助かるし、彼らも学ぶことは多い。期間はせいぜい1ヵ月。人数は、3、4人が適当なところだと思う。国は彼らの宿と食を確保し、研修が終わった後も指導者としての地位を少しでも助長してやる努力も怠ってはならない。後任のボランティアには、ぜひ、そのようにやってもらいたいものだと思う。

—ピースコー—

アメリカのピースコーはこの国に約200名ほどいる。ざっと我々の7倍。この1～2年のうちに急激に増えたホンデュラスの日本隊員よりはずっと古く、また様々な分野で働いている。このコマヤグアにも、Cohdeforやボーイスカウト、養殖（淡水魚）、生活指導といった方面で活動している。彼らと我々との大きな違いは、資機材の入手の難易と協力に対する考え方にあるように思う。

協力隊の場合は、現地で資機材の入手が困難な際は、事務局からかなりの援助を受けることができるが、彼らの場合はゼロといってよい。すべてを自分の力で切り開いていかねばならない。協力の原則的なあり方というのが、『民衆レベルでコッコッ』ということだとすれば、ピースコーはその原則を守りとおしているといえるだろう。だが原則は原則であって、それが協力に対する士気の高さ低さを左右しているのは皮肉であると思う。

コマヤグア地区のピースコーの一面からだけで、どうこう判断するのは問題かもしれないが、少なくとも、彼らは資機材、交通手段等でかなりの

問題をかかえているし、「思うようにやれない」ということを、よく口にする。また彼らの協力に対する考え方の相違から、現地との調整がうまくいかないとか、現地人の長年の反米感情からくる不快感といったもので、彼らも少しやりにくいかもしれない。反米感情というのは表だって強くは出ないが、現地人と話していると、そのことがよく話題になる。「米国は小さな国を踏みつけにする」とか、「国の資源を大資本によってむさぼっている」とか「高姿勢である」とか、米国に対する感情というのはあまり芳しくないのが現状である。当然、ピースコーの連中もそういうことは肌で感ずるのであろうし、おもしろくないに違いない。そういうことからかもしれないが、私の目には、彼らが一生懸命に何かをやっているようには映らない。ピースコーの連中は、よく旅行をして回っている。ちょっと変わった所とか、遺跡とか、しょっちゅう行っているように思う。まあ、その国を知るといっても、1つの協力のあり方かもしれない。だが腰をすえて、ひたすら、何かに取り組んでいるというような感じではない。彼らの意図は何かつかみがない。「そうあわてても仕方がないさ。長い目でゆっくりやろうじゃないか」と思っているのだろうか。彼らは人間的には本当にいい連中ばかりで、自然とつきあひも多くなるが、「日本人ボランティアとは一味違うな」とつくづく思う。

V おわりに

現在この国におられる専門家との間で話題になったことだが、ホンデュラスにおける農業開発協力というものは、個々人バラバラにやっても、その効果は、まず見込めないのではないか。やるならグループによる集中的で効果的な開発というものを手がけていかねばならない、ということから話が始まった。2年近くもホンデュラスの農業関係の仕事にたずさわっていると、もどかしくなってきた、誰しも、「もっと効果的な、よい方法はないものか」と考えるのは同じであろうというのが私の実感である。

確かに、この国の農業はまだまだ開発の余地はたくさんあるが、それを進めようとした場合、国民性とか、国政とかで、かなり大きな障害が出てくることは明らかである。そういう場合、1人々々の力というものの非力さに、どれほど泣かされるかわからない。これからの協力は、1つの機軸をもって、それを中心に外へ広げるような方法でなくてはいけないという

ことになった。

国際協力事業団の専門家の派遣のし方にも少し問題があるようだ。局所的な見方で農業というものを見ているようだ。一番先に灌漑の専門家がきている。いわゆる、実際の作物栽培の技術者がきていない。農業の開発というのは最初、栽培技術者がきて、国の農業事情を把握し、問題点を指摘し、ある程度の計画を立て、それに従って開発に必要な関連の技術者を呼ぶべきであろう。現在のありようは、最初の農業事情の調査が現場型でなく、机上型に終わっているのではないかということである。どういうものを、どれだけ、どのようにしてつくて、どのように処理するか、という基本的なことを、実際、現場で栽培して検討してみる余地があるのではないかと思う。夏場の水がないから、灌漑専門家を派遣して、その対策にあたるというのは、もっともらしくはあるが、その水をどのように利用するかということが確立されていないことには、せっかくの貴重な水も流れるだけに終わってしまう。そういうことも、こういう国々では往々にしてありうるのである。そういうことから、もっと現場型の栽培専門家が数年にわたって下地をつくらなくてはいけないと思う。その灌漑専門家のかたも、そのようなことを話されていた。まあ、結果としては、今度、日本がかなりの援助で灌漑センターを設置することになったそうで、日本から栽培技術の専門家も呼んで、一貫した農業センターにしたいということであった。

いずれにせよ、こうして、1つの機軸ができることは頼もしいことである。農業協力は、1人でぼちぼちやっても、はがゆいばかりで、どうにもならない。だが、そうして1つのセンターができるなら、それを軸に、かなり思い切ったこともできるのではないかと期待している。いわゆる、力の結集である。協力隊とは一味違った意味で、かなり効果的な協力ができるのではないかと思う。

中村隊員の報告書を読んで

太田成美

1. この報告書は、ホンデュラスにおける試験場での野菜栽培の試験と現地の普及活動を主体としているが、同時に国民性とか道徳教育、出張授業あるいは指導者養成、農業開発協力のあり方等にも及ぶもので、ホンデュラスの実情を知るうえで、興味深く、また開発途上国に共通的な課題も提起されており、大いに参考となる。

2. 中村隊員は、コマヤグワでの最初の1年間を試験場でトマト、たまねぎの品種比較、栽培管理法等の試験に従事したが、ここで品種選択、病害虫の種類とその対応策等を得たことが、後半の普及活動に大いに役立っているとしている。

次いで普及活動に移るが、その重要な課題として、第1に、普及対象農家の選定に当たっては、真にやる気のある農家を見出すこと、第2に資金、水、病虫害対策であること、第3に畑で共にクワをもって働くことであると報告している。普及活動が人と人との接触であることを思うとき技術的な確かさと共に忍耐力についての自己との闘いともなるので留意したい。

中村隊員はその努力がむくいられたのであろう、各地で野菜栽培に関心をもち指導を依頼されるようになったと率直に喜ぶと同時に、これはまだ表面的なことで一部にすぎず、本物になるには単調ではあっても、同じことを繰り返し、疲れ果てるまで指導しなければならぬと反省している。まことに感服の限りである。

ホンデュラスも都市には各種外国製品があふれているものの農村の食生活は貧弱で、トウモロコシ等の耕種方法も原始的であり、電気もほとんどない状況を憂い、工業発展をうながし、生活水準の向上、食生活の多様化、それが食料消費量の拡大へと結びつかなければ農業の発展はないのではないかとレポートしている。したがって、現状では野菜のように商品価値の高いものを生産しても、それに見合う消費量が無い。さらに、そもそも販売経路が確立していないこと等もあって、野菜栽培で最も肝心なことは、家庭菜園の村落普及を行ない、料理方法も含めて指導し、個々の家庭から食生活の改善を図るべきであると指摘している。もっともトマト、きゅうりについては冬期のアメリカ向け輸出が数年前から試験的にアメリカ資本と提携して行なわれ

ているので、この面の積極的開発を行なうべきであるとしている。確かに需要拡大には長い年月を要するので、当面これらの方法を地道に進めることもよいであろう。

さて、国民性としては自然条件に恵まれていることもあって、あくせくと働く必要もなく、したがって努力と前進に欠けるので倫理面を含めた教育改革が必要であると提言している。

次いで、しいたけの試験栽培を4ヵ所で行ない帰国前にチェックしたところ、きのこがついており、大いに感激にひたっている。山間地でのしいたけ栽培とは着想が面白く、また有意義なものであり、さらに充実させたいものである。

ホンデュラスの輸出は農林産物が主体であるが、木材は第3位となっている。にもかかわらず焼き畑農法の慣習が続いており、山が荒廃しているので、それを中止させようと努力していること、また松脂の採取による収入の拡大、農家のかまどの効率燃焼化のための改良等、生活実態を含めたレポートが続いている。

次いで、山の中学校に3日間ほど野菜の出張授業にいくが、総じて高学年生は真剣な受講態度で好感をもてたとしているが、やはり教育の重要性を認識したい。

さらに、3人の若者に対して野菜栽培の指導を行なうが、礼儀作法を含めてきびしく指導する様子がよくレポートされている。同時に指導者養成のあり方、コツをつかんでいる。

最後に、農業開発協力の効果的方法にふれているが、それは1人のボランティアの行動範囲に限られるので、何かどこかに機軸があって、それを中心とした外延的拡大活動がよく、それはいずれ完成される予定の農業センターというものを軸にしたものがよからうと報告している。日本からの専門家もどの分野の人を先に派遣するのが適切か十分検討すべきであるとしている。

本報告書は、農業普及活動のあり方と同時に倫理面にもおよぶものを一体としてとらえるべきであるとする観点からレポートされたユニークなもので、今後の派遣活動に当たって大いに注目すべきものとなっている。(協力隊技術専門委員)



漁業の現状, 展望と協力活動

総合報告書 (昭和55年3月29日)

派遣国	ホンデュラス	52年2次後期組
職 種	漁具漁法	
氏 名	黒 木	隆
配 属 先	天然資源省天然資源更生総局 漁業部	

—黒木隊員の略歴—

氏 名	黒 木	隆
生年月日	昭和26年8月21日	
出 身 県	福岡県	
職 種	漁具漁法	
派遣期間	53年4月~55年4月	

1. 序 言

私の2年間の協力隊活動が終わろうとしている昨今、私の心境を述べれば、80年代の石油の動向をめぐって世界情勢が大きく変わろうとしている折、我々協力隊員はいかなる意義をもった協力活動を行なうべきであろうかということが、まず第1の問題である。対外的には、資源貧困の日本において、各国との国際協調をはかり、国際社会における日本の地位を向上させるために、協力隊員はその最前線で、まず日本という国について、少しでも多くの人々の理解を深めるということが第1義の使命だと思う。

利潤の追求を目的とせざるを得ない各企業、商社の驚くほどの海外進出の中であって、相手国の立場に立って活動できる日本人は、協力隊員以外にない、というつもりで2年間を過ごしてきた。その町にたった1人しか住んでいない日本人は、日本人全体の代表でもある。

出発前、日本では、ホンデュラスという国について具体的な情報というものもまったくなく、とにかく中米諸国の中では最も遅れた国だ、ということだけが頭にあった。着任後、首都テグシガルバでは、小型バスがさも忙しそうに町の中を走り、人々は楽しそうにか、暇そうにか、中央公園にたむろしていた。外国へきたんだという実感は湧かなかった。一方、しばらく過ごした後も、日本への郷愁の情は一向に湧かず、ただ懐かしいのは日本の食べ物と日本酒の香りのみであった。

私の仕事現場、カリブ海岸に着任した時、気がついたら、いつの間にか黒人を目の前にしてしゃべっていた。皮膚の色の黒いことさえ普通のことのように感じていた。かえって、白人の白さが、やけに異常に目に映るようになっていた。

カリブ海岸に点在する各漁村は、実際、何をやって、何を食って生きているのか不思議なくらいで、汚ないとか、貧しいとかいった印象は訪れた時からもてなかった。彼ら黒人たちが汚なくて、貧しいものだとは決めつけているのは先進国の人々だ。彼らにとって電気の明るさはまぶしいだけのものである。1から10までの数があれば、ほとんど事たりの世界に、10³の世界の価値を押しつけても仕方がないのである。何も10³は1,000でなくてもかまわない。彼らにとって、10以上の幸福は現実味がないからであり、0になれば、それは死を意味する実生活に直結しているからである。

協力隊の原則は、現地に溶け込み、その住民の生活を少しでも向上させるよう自分で計画性をもって、自分が身につけている技術を通じて幅広い協力活動を行なうこと。そして、自分のもっている技術を少しでも多くの人に伝え、彼らが自立してやっていけるよう、技術的手助けをするということだと理解してやってきた。以下、その協力隊の目的とすることを念頭において、私自身のこの2年間の生活と活動の経緯を述べる。

2. 現地での生活

ホンデュラス着任後2週間ほどは、当国漁業の実情を知るため、首都テグシガルバにある配属先の天然資源更生総局漁業部において、漁業法、各種漁業資料に目を通す毎日であった。

テグシガルバには、大きなスーパーマーケットもあり、品物も豊富で、日本を出る時、「粉しょう油を持っていこうか」と思っていたのが嗤みたいであった。ともかく、どんな国でも、その首都や中心都市では、日本で生活するのと、さして変わりはないのではないかと思うようになった。

その後、ラ・セイバという当国第3の都市にある海洋生物研究所に移り下宿屋を探したが、なかなか見つからず、ついに、ホテル暮らしをすることになった。ホテル暮らしなどは日本ではおおよそ考えられないけれど、味けなく、つまらないものだった。3ヵ月ほどして、やっと自分で下宿先を見つけたところ、研究所の所長など、「日本人だからお金を持っているだろうし、ホテルの方がいいのではないか」いった感じで見ており、まいてしまった。一般に、当地では日本人と中国人の区別はなく、すべてチノ（中国人）と呼び、道を歩いているだけで、知らない奴でも「チノ、チノ」と呼びかけてくる。バカにされているようで、けっしていい気持ちはしない。また「日本人（チノ）だったら、たくさん金を持っているだろうから、少くらしい料金をごまかしても当然だ」といった空気があり、まったくやりきれなく思う。これがアメリカ人に対しては、けっして路上で、グリーンゴ（米国人）などと呼びかけたりはしない。

自動車、オートバイ、カメラ、電卓などはもとより、スプーン、食器類から家庭用品まで、実に多くの日本製品が入ってきているにもかかわらず日本という国についての正確な知識はほとんどない。工業製品の売り込みばかりに走っているのは、近い将来、国際社会の中で日本は、だんだんと孤

立せざるを得なくなるのではないかと不安になる。

着任後1年を経過したところで、サンボ・クリークという漁村に住みつく。ほとんど黒人ばかりの小さな村ではあるが、これといった不便はまったく感じなかった。人間、生活しようと思えば、どんな所にも住みつくことができるのだと自信をもったり、太陽が沈むとともに床に入り、太陽が昇るとともに目覚めて仕事をするのが、人間本来の本当の生活というものではないかと思ったりした。

3. 技術協力

技術協力については、2つの立場から考えることができると思う。

- (1) 日常の中で、周りの住民に、または巡回して各地区の人たちに自分のできる範囲内の知識の啓蒙と技術の指導を行なう。
- (2) 任国の政府機関そのものに働きかけ、その政府目標に対する具体的な活動方針の方向を見つけながら、その実践を行なっていく。

いわば、下からの協力と、上からの協力ということになるが、現地各漁村に住みつき、その中で生活していこうとすれば、どうしてもその地域の漁業活動に対する手助けという、さしあたっての活動に大きな時間をさかれる。長く住みつくると、その地域に対する愛着もわくが、その国の政府機関の要望事項や全体としての見通しがおろそかになるという危険が生じる。そこで、我々ホンデュラス漁業関係隊員は、月に1度、斉藤シニア隊員を中心として漁業会議をもち、活動方針や問題点について話し合い、解決をはかってきた。

特に漁業という産業は、漁具・漁法のみでなく、造船、機関、食品加工及び流通と各方面にわたる協力が必要であり、有効に漁獲をあげ、それを流通させ、消費するには、各政府機関の統一された協力が最も重要となってくる。残念ながら、当国においては、各機関の調整が十分には行なわれておらず、まず漁業に対する理解が必要だと思われる。

我々漁業隊員の多くの配属先である天然資源省においては、漁獲統計、漁民の登録、新漁具・漁法の開発・普及及び資源調査ということが目的となっている。当国の漁業の現状を見るに、まず考えねばならぬのは漁民たちの生活の向上であるが、それについてはまったく理解がなく、何のための漁業かわからなくなってしまう。

資源調査、新漁具・漁法の開発ということについては、十分な機具器材及び実験用漁具資材がなくては、どうしても一応の成果をあげることができない。それら漁業用資材については我々の機材だけが頼りであるといった現状である。その漁業用資材についても、協力隊事務局に申請してから一年半以上たち、帰る間際になってやっと手もとに届いたといった状態で、味さには聞いていたけれど、私の場合にだけは、そうであってほしくなかった。

漁業は、海という共有の財産を漁民たちが協力して利用しなければならないという性格上、どうしても行政上の制約や指導は必要となってくる。その行政当局である天然資源省更生総局漁業部に、漁業行政及び漁業技術の専門家と呼ぶべき人材がないことは、ホンデュラス国漁業発展にとって大きな不幸である。

また、カウンターパートというのが、予算の関係上からも、各隊員に1人ずつつけられるというわけにもいかず、結局、各地区担当の行政官が、現地で直接我々の接触する相手ということになった。彼らインスペクター（検査官）にしても、実際の漁業そのものについて知識はなく、単に、漁業法の監査官でしかないとともに、当国漁業発展のための手段、方法を考えあうということは、ついにできなかった。

4. 技術者の育成

現在、ホンデュラス国には、漁業に関する技術者を育成すべき教育機関はまったくない。というのも、漁船と呼ぶべき船もなく、ほとんどがカヌーによる手釣りといった漁業の段階では、漁業知識やその技術も直接現場で習得すれば十分であって、専門的教育など必要性はなかったものと思われる。しかし、近年に入り、船外機、船内機及び刺網漁業の普及が進み、その知識及び取り扱いについての教育の必要性が高まった。

政府機関においても、各国技術者を招いて各種講習会というものが実施され、我々協力隊としても配属機関主催の漁業講習会を実施してきた。限られた期間内に、一般受講者に各種漁業知識の講習を行ってきたが、その理解度についてはまったく疑問である。現段階においては、同じ地域に住む各漁村の参加者が一堂に会し、同じテーマについて一緒に学び、意見の交換を行なうだけでも、それなりの成果はあったと思う。なぜなら

ば、漁業とは、けっして排他的なものではなく、各漁民との相互協力が最も必要であり、これら講習会を通じ、地域連合による新しい漁業形態の芽が出てきている。我々にとっても、直接、多くの漁民たちと接することができ、いろいろなテーマについて話しあうことができた。

今後は政府機関内の人間を含めて、一般的な漁業知識と同時に、個別的な、例えば船外機専門、刺網専門、組合経理専門など各部門ごとに人選、調整を行ない、本格的な指導へと移行していくこととなる。

5. 漁業の現状及び将来への展望

表1、及び図1は、サンボ・クリーク協同組合の最近6ヵ月間の漁獲量(単位=ポンド)、出漁日数、総売上高(単位=レンピーラ。1レンピーラは約130円)、出漁日1日当りの平均漁獲量(単位=ポンド)、漁師1人当りの各月の収入について示したものである。

6月、7月、8月は天候もよく、出漁する機会は多かったが、漁獲量は非常に少なかった。9月から雨が多くなり、出漁日は少なくなったが、1回の漁獲量は増えている。この時期より Sierra (サワラ類)の回游が始まり、漁獲物のほとんどを占めるようになった。12月には天候も回復し、この6ヵ月では最大の漁獲をあげた。しかし漁師1人当りの月収入をみると、最低12レンピーラ(1,500円ほど)、最高でも71レンピーラ(7,400円くらい)である。これらは、純収入ではあるが、各月平均して40レンピーラ(4,200円くらい)ほどにしかならず、多くの家族をかかえた漁師たちにとって、けっして多いとはいえない。といっても、当漁村では朝と夕方のおわずかな時間だけを漁業にさき、その漁獲物の中から、まず自分たちの分け前を差し引き、残りを他の集落の住民に販売するわけである。日中は他の仕事に従事し、いくら漁獲が少ないといっても、けっして、がっかりした様子もない。まったく不思議な漁業である。

さらに、船、網、船外機などの漁業手段はすべて組合の所有であり、その借金も組合が肩代わりし、各組合員たちは、それらの資材を利用して漁業活動を行ない。その売上高の50%を組合に収め、運営費としている。したがって、漁業手段、燃料費などすべては組合が負担し、組合員たちは漁業資材をまったく持たない漁師といえるのである。

彼ら組合員は、「組合が負っている借金は、自分たちとは関係ない」く

表1. 7~12月までの漁獲量実数 (於; サンボ・クリーク)

月 別	総漁獲量	出漁日数	総売上げ高	出漁日・1日当りの平均漁獲量	漁師1人当りの月 取 入
7月	716 ポンド	24日	358 レンビラ	29 ポンド	44 レンビラ
8	418	16	209	26	26
9	192	4	96	48	12
10	402	9	201	44	25
11	809	13	405	62	50
12	1,380	21	690	66	71

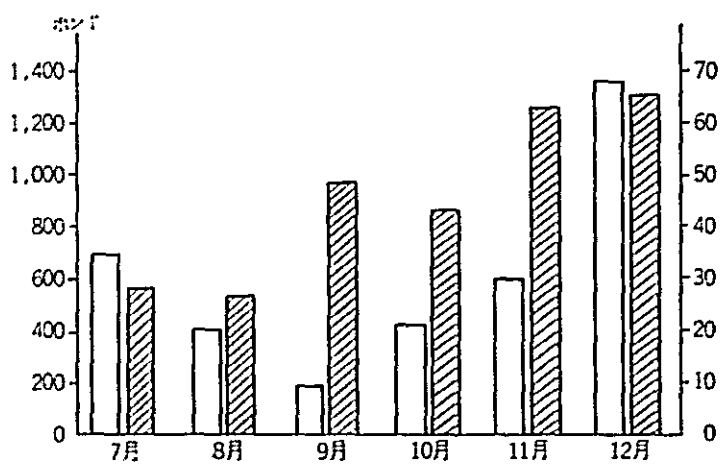


図1. 各月総漁獲量□と出漁日1日当たりの平均漁獲量斜線

らいにしか考えておらず、漁獲量も多いにこしたことはないが、たまに多くの漁獲量をあげた時など、その売上の50%という、彼らにとっては多額のお金が組合に入ることになり、かえって不満が多くなるという、きわめて変な結果を招いているのである。

将来、組合は漁業資材を組合員に払い下げ、組合自体は漁業の生産活動から離れ、漁獲物の流通販売、信用事業などの方向に変わり、より多くの一般漁民たちをその組織のうちに吸収し、漁村発展の中心的存在とならねばならない。そのための下地となる各地域における組合の連合を呼びかけ、共同出荷による利益の実績をつくることに努めてきた。

ここで初めて人種問題ということにもかかわった。漁村に住む一般漁師たちは、そのほとんどが黒人であり、彼ら自身が都市に出て魚を売ろうとする時、町のスーパー、病院などでは、黒人の、しかも漁師から買う時は仲買人（彼らは一般に黒人ではない）と同じ扱いを受けないというのである。もちろん、それは単に人種だけの問題ではなく、商業上のいろいろの理由によるが、黒人の漁師が町に直接持ってきたものは、他より安いのが当然、ということになってしまうのである。したがって、はっきりとした販売流通組織をつくり、漁獲→運搬→販売（消費）という一貫したシステムを確立することが漁業の使命でもある。魚肉タンパクをその地域の住民に供給するといったことから重要である。

漁業の技術的な面においては、今度くる練習調査船及び実験用資材を用いて、新しい漁場の開拓と、まずは、刺し網の有効利用、延縄の活用が中心となるであろう。

6. 漁業用資材

すでに述べたように、各漁業協同組合は漁業資材を所有してはいるが、次の資材を買うべき何らの計画性もなければ、現在の借金を返済することさえままならないといった状態である。したがって、現在持っている資材が消耗、疲労して、それ以上使用できなくなった時、再び、どこかの援助に頼らざるを得なくなるのである。そんなことを繰り返していても、まったく無駄である。その大きな原因は、各組合員たちに、自分らの資材だという自覚がなく、組合経理はまったく杜撰であり、こうした問題に一般組合員は無関心だからである。組合のお金がいつの間にかなくなっているとい

りことも珍しいことではないのである。

それに反し、組合に頼らず自分自身のわずかな漁業資材で漁業活動を行っている少数の漁師たちは、自分自身で網をつくり、船内機を購入し、それなりの利益をあげているのである。本来なら、協同組合も彼らのように独立して漁具を持つ漁師たちをその中心に組み込むべきである。現在の漁業組合の形態では、独立してやっつけ漁師にとっては何の利益も魅力もないのである。

組合だからといって、むやみに漁業資材を与えるということは、現状では、単に資材を持たない漁民の救済にはなっても、それ以上の発展性は期待できない。もっと漁師そのものの育成にも力を入れることが必要となってくる。そのためにも、まず、できるだけ安い網をつくる、つまり糸から網を編むことを普及すべきである。組合単位による編網作業を指導してきたが、少数の2、3の組合員しか作業に参加せず、結局は長続きせず終わってしまった。

自分の漁具を増やすには、まず自分の手で糸だけ買って、ある程度の網地をつくり、沈子、浮子は、できるだけ代用を見つけ、最低の網地としての条件に見合うようにすればよいのである。その場合、網のバランスといった点で多少の問題はあっても、とにかく自分で仕立てあげれば大きな自信になる。苦勞してつくりあげた網なら、それだけ手入れもゆきとどき、大切にできるようになるであろう。組合には多少“資材援助慣れ”しているところがみられる。独立して資材を持った漁師が増えていき、彼らが組合を構成するようにならなければ、当国の漁業発展は望めないだろう。

7. 異文化との接触

日本では、カルチャーショックという言葉をよく耳にしていたので、実際どんなものか楽しみにしていたが、ついに、どういうことかよく解らずに過ぎてしまった。ホンデュラス人の考え方と、日本人のそれとが同じであるはずはないであろう。ただ、しばしば頭にくることは、約束を守らないということである。

最初は、スペイン語がよく通じずにゆき違いになったのかと思っていたので、次からはよくよく確認して、しつこいくらいにいておいても、実現されない例がほとんどである。スペイン語には、「約束する」という言

業と「悪かった」と謝る言葉はないとしか思えない。どんなに自分が誤りだと思ったことでも、絶対に謝ったりはしない。日本人のように素直に「ごめんなさい」という民族の方が、むしろ世界では珍しいのではないだろうか。

8. 結 び

私のこの2年間の協力活動というのは、いったい何だったのだろうか。配属先である天然資源省漁業部が期待していたであろう漁具の改良及び新漁具・漁法の導入、また資源調査といった面において十分な成果をあげないまま、2年間で本当にアッという間に過ぎ去ってしまった。ただ少しでも漁民たちの生活がよくなるようにと思って、毎日の活動を行ってきたつもりである。それが彼らにどのくらい理解されたかわからない。ずいぶん頭にきて、「もう漁業なんかやめてしまえ」といってやりたいことも何度かあった。

最後に、2年間の協力活動が、ただ、彼らの平和だった生活を引っかき回しただけだった、ということにはなっていないのである。確かに、何百年、何千年と続けてきた、カヌーだけを使った魚とりは、彼らにとって平和であったかもしれない。これといって何の不便も感じられなかったからこそ、昔ながらにほとんど進歩というものもなく続けてこれたと思う。当国では、漁業技術史がほとんどないに等しい。それだけ生活しやすい所だったと思われる。しかし、今後は、「自分たちだけは放ってくれ。自分たちは今までの生活で十分なんだ」といっても、もはやそれが許されない国際社会の状況になっている。

今まで自由に魚をとっていた自分たちの海に、突如、見たこともない外国のトロール船が出現し、いくら自分らのものだと言っても、外国漁船はエビや魚類をごっそり持ち去ってしまう。

不便だった漁村にもバスの通る道ができ、それと同時に多くの便利な日用品が入ってくる。何もなければ、何の不便も感じなかったであろうが、1度便利な日用品に慣れてしまえば、もうそれなしではすまなくなっていくといった畏がある。船外機がない頃には、カイをこぎ、わずかばかりの古布で帆を張って、かなり遠くまで出かけていた漁師たちが、今では、「船外機なしでは漁にも出ようとしなくなってきた」と、ある老組台長は

語っていた。

今後ますます、どんな小さな不便だった漁村にも、いやおうなく、貨幣経済は大きく浸透していくであろう。都市の商人たちは、純粋、いや無知だと思っている漁民たちから、いかにして儲けようかとするであろう。そうした状況の中では、「昔の平和な生活がよかった」などと、のんきなことは言われていない。網を買い、船外機が入れば、今まで以上の漁獲をあげるのは当然である。少しばかり多くとれるようになったからといって喜んでばかりおれない。資材はいつかは疲労、消耗して、ついには使えなくなるものである。それまでに次の新しいものが買えるような、いや、次には新しいものが2つ買えるような、そんな漁業の心づもりを漁民たちに解ってほしかった。

2年間の経験は、これから私自身が生きていくうえでの大きな力となってくれるであろう。この協力活動は、本当は、一番、私自身のためになったのかもしれない。

われわれが目指すもの

黒木 隆

「青年海外協力隊」——日本国内においてその名前を知っている人はいったい全体の何パーセントくらいだろうか。われわれが青年海外協力隊員として任国へ赴任した時、その国により職種により、迎えられ方は実に様々なものである。

われわれ隊員自身の中においても各職種においてその修業年数は各隊員一律ではなく、年齢も同じではない。25歳くらいの若僧が「自分は技術者です」といったところで、相手国ではどのように処遇すべきかということにとまどうであろう。また一方、協力隊においてはボランティアということがよくいわれる。私自身隊員として2年間の協力活動を終えた今でも、このボランティアという言葉がどういう意味なのか実はよくわからないし、自分はボランティアでやっているのだと思ったこともない。つまり青年海外協力隊とは日本国内においても任国においても、きわめてとらえにくい立場にある。

協力隊員はまた相手国にとっては非常に便利な存在ともいえる。第一自分のところで給料を払う必要がない。それどころか隊員が必要と考えるいろいろな資材は申請して認められれば日本から送ってもらえるわけである。日本車が走り回り、電気製品から家庭用品にいたるまで“Made in Japan”が氾濫している任国において、日本という国はお金がいくらでもある国だと思われるのである。しかし一方、われわれは自分の活動に際し、その事業主に対して直接利潤を目的にしなくてもよい。つまり完全に相手側の立場に立つことができるのである。その中でわれわれにしかできないことがあるはずである。

中米ホンデュラス国における協力隊員としての2年間の活動を振り返りながら協力隊活動とはどういうものであるか、そのひとつの局面を考えてみたい。漁業隊員として着任して、まず、当国の漁業発展と漁民の生活を少しでもよくなるようにと漠然と考えたものであった。そして、もうひとつは日本という国、日本人というものを自分自身の日常活動を通じて現地の人たちに少しでも正しく知ってもらいたいということであった。

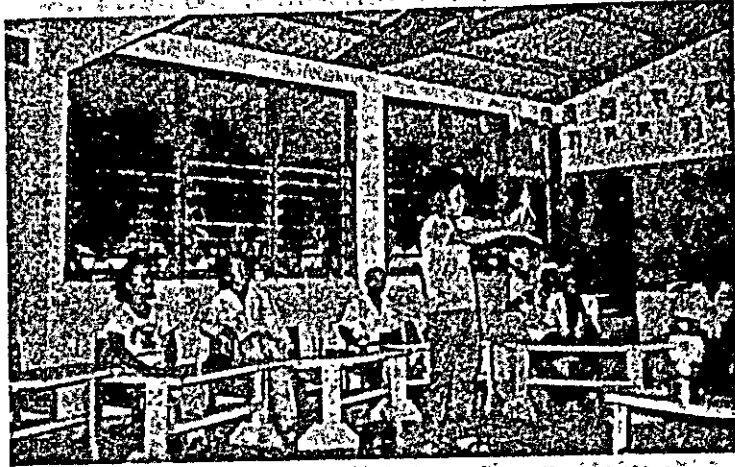
当国の漁業の現状はといえば、小さなカヌーによる手釣りがその大部分であり、新しい漁法を受け入れるべき経済的・社会的下地というものがまだ充

分ではなかった。いや逆にいえば、今まで何百年の間、何の不自由も、またそれ以上の必要性も要求されなかったからこそ、昔のままの生活様式、生産様式で事足りてきたのであろう。実際、カリブ海に点在する小さな、そして交通の本当に不便な各村落をひとつの単位とした漁業活動において、村落内で消費しきれないほどの漁獲物が、いったいどれほどの価値をもつであろうか。

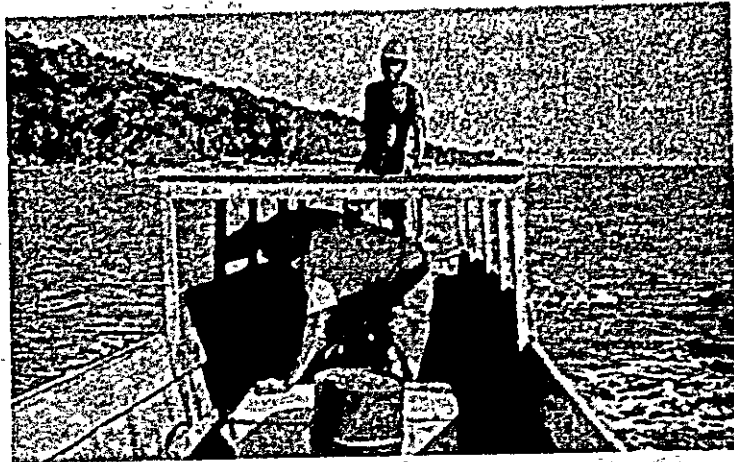
許されることならば、彼らを昔の生活のままにそっとしておいてあげたい。文字は書けなくても彼らには楽しい歌があり、ゆかいな踊りがある。いつも感心させられたものであるが、どんな小さな不便な村落においても、彼らを見ていて、貧しくてきたならしいといった印象を受けたことはない。これはどういうことなんだろうか。われわれ協力隊員が「お前たちが俺たちの生活をひっかき回してくれたおかげで住みにくくなったじゃないか」といわれたら、どう答えればいいのか。

しかし現在、どんな小さな村落においてもコココーラが飲まれ、ラジオの音が響くようになった。そしてより便利な日用品の数々が押し寄せてきている。なければならないで別になんてことはなくても、一度便利な文明の利器を手にしたら、もうそれなしではすまないといった魔力がある。老組合長がボツリと語っていた。「昔、船外機のない頃は、みんなで船をこいで何時間もかかって魚をとりにいっていたのに、今では船外機が故障でもすれば誰も海に出ようとはいわなくなってしまった」と。いくら昔のままにそっとしておいてくれといっても、もはやそれは許されないのである。今まで使っていなかったもの、たとえば漁業の場合の船外機、網類といったもの、これらはすべて消耗品であり、使っている間に次のを買えるように計画していかなければならない。すなわち今までのように今日が無事に楽しく過ごせればよいといった生活から、将来の計画をもった活動というものを村落全体で考えていかなければならないということである。このような発想はお金が入ったらペッと酒でも飲んでその日は終わりといった生活をしてきた彼らにとって、明日のことを考えるということは、死んだ後の心配までするのかということになる。

これからますます新しい経済活動による社会機構の中に組み込まれていくであろう各村落の人々が、その中で自立して自分たちの生計をたてていけるような、そんな手助けと考え方を漁業を通じて行なってきたつもりである。そして自分が去った後でも彼らの胸のうちに残る日本人でありたかった。



漁業講習会もすんで今夜は漁民たちと交歓会。「手品のダネがわかるかな」。窓の外には子供たちもいっぱい



さあ、出発。今日は大漁だ！

黒木隊員の報告書を読んで

野村正恒

協力隊活動を通じて若者としての日本人を知って貰う、これは尊い活動である。そして隊員がその活動を通して自分の人生上に何か大切なものを掴みとり、現地の人もまた尊い友情をもってくれたとするならば、協力隊派遣の実は挙がったとみてよい。

現地の住民が如何に自然とのかかわりの中で生きているか、先進国の人たちの価値観をそのまま彼らにもたせることがよいのか、西欧文明が入ることが彼らにとって必ず幸福につながるのかなのか等々の疑問をもちながら、一体どうして彼らの役に立つ協力ができるのかを模索する。そして技術移転の意義をどのように関連させるか、これはこれからの隊員の課題でもあろう。黒木隊員が2年間で得た体験として、人の住むところなら私も一緒に住んで協力できる、という自信の言葉を語ってくれたが、これは何にもまして、かけがえのない経験だと思う。その昔、山田長政は機帆船でシャム国（今のタイ国）に渡り、3,000人の日本人町をアエタヤにつくった。こういう先人の尊い体験もある。

途上国の人たちの多くは自然人として大自然を相手にしている。私たち日本人の先祖もまた自然から多くを学んだ。これは引きつがれ、知識というより人としての尊い生きる智慧であった。大自然の示す啓示を純粹にナイーブに受けとった結果といえる。こうしたことは現在の途上国の人たちにもあるに違いない。それにふれて羨しいなあと思う感情は、それ自身また素直なことだと思ふ。だから余計、彼らの幸福とは何であるかを考えるのだと思ふ。

さて、現地の政府の中でエキスパート（スペシャリスト）をどう育てるかについて隊員の悩みが書いてある。何をするにしても人間のモチベーションが主役であり、これにより実践が生まれ、金や資材もそれについてくると考えたらいよい。途上国ではこのやる気のあるスペシャリストの少ないことが大きなネックであろう。このために日本でも海外研修員を受け入れて訓練するのであるが、第1、敵が間に合わない。それから訓練を受けた人が国に帰ってから魚が水を得たように充分活躍できる余地があるかとなると、悲観的要素が大きいのである。マイナスの要因があまりにも大きく、彼らはその大勢の中に埋没してしまう場合が多い。この点『日暮れて道遠し』の感なきにしもあ

らずだが、だからこそ援助が必要なのだと考えることができるのだ。自助努力を期待することにやぶさかではないが、なんとか、そのためのポテンシャルエネルギーを助長するインパクトを、この援助で賦与するのだと考えたいのである。隊員の責任もまた大きいといわざるを得ない。

とにかく隊員が1人でもよいから現地でそのような人を見つけ相談相手になってあげられたら、これは大きな援助ではあるまいか。

ホンデュラスでは漁業協力隊員が力を合わせて現地で漁業講習会を開いたということは大変よかったと思う。これがきっかけで新しい漁業形態の芽を出すことができる、と書かれてあることに心からの希望と賛同をする。現地の漁民はまた農民でもあろう。だから1人の収入は少なくとも自給漁業としてやっていけるのであろう。ここに記されているように、だから漁業組合の形態も変則的にならざるを得ないと思う。つまり漁業手段——漁船、エンジン、漁網、燃油——はすべて組合もちであって組合員の漁獲高の50%は組合に納入するといった形になるのであろう。これが目下のところ、ごく自然な形であったからである。しかし、若い隊員の熱烈な働きかけによって、ある熱心な篤漁家が、自分で資材を組合からゆずりうけ自己経営をして、利益を出し、少しずつでも独立の機運と経営拡大の実績が得られたとするならば、これはこの地域の人たちに大きなインパクトを与えることにもなる。そうになったら、すばらしい。こうしたことが隊員の努力によってできるかもわからないと思うのである。

ホンデュラスの漁業隊員が定期的集まって研究会をもっていることの幸運を思うとき、黒木隊員が去っても、その考え方は後任の隊員にも伝わって行って、やがて漁業形態が徐々によい方向に改変されていくであろうことを確信するものである。全員の和の協力は本当にすばらしいことであるからである。(協力隊技術専門委員)

グアテマラ研修と業務活動

第4, 5号報告書(昭和55年1月10日)
(昭和55年4月7日)

派遣国	ホンデュラス	52年2次後期組
職 種	船舶機関	
氏 名	小 川 賢	
配 属 先	天然資源省天然資源更生総局	

小川隊員の略歴

氏 名	小 川 賢
生年月日	昭和27年3月5日
出身 県	群馬県
職 種	船舶機関
派遣期間	54年4月～56年4月

I グアテマラ研修報告

1. 日 程

1979年

- 11月30日(日) 午後5:50 テグシガルバ発, 同6:40 グアテマラ着,
現地泊。
- 12月1日(土) アンティグア・グアテマラ見物, グアテマラ泊。
- 2日(日) 午前7:00 グアテマラ発, バスで同11:45 研修地ケサル
テナンゴ着。
- 3日(月) 午前8:30 研修先の Projecto Linguistico Francisco
Marroquin (PLFM)を訪れ, さっそく研修に入る(～7
日)。
- 8日～9日(日) ウニウエテナンゴ見物。
- 10日～14日 語学研修。
- 15日(土) 港町チャンペリコ見物, 16日(日) トトニカパン見物。
- 17日～19日 語学研修。
- 20日～21日 港町サン・ホセ見物, 22日～23日 チチカステナンゴ見物。
- 24日(月) 午前中語学研修。25日クリスマス。
- 26日(水) 午前7:00 ケサルテナンゴ発, 同11:30 アマティトラ
ン着, 見物後, 午後5:00 グアテマラ着, 28日朝まで滞
在。
- 28日(金) 午前10:00 グアテマラ発, 空路にて同11:00 メリダ着,
31日まで滞在。
- 31日(月) 午前7:00 メリダ発, バスにて午後3:30 カルメン着,
2日まで滞在。

1980年

- 1月2日(水) 午後7:30 カルメン発, バスにてメキシコシティへ向
かう。
- 1月3日(木) 午後0:30 メキシコシティ着, 5日まで滞在。
- 1月5日(土) 午後8:20 メキシコシティ発, 空路にて午後9:40
グアテマラ着。
- 1月6日(日) 午前9:00 グアテマラ発, 空路にて同10:00 テグシ

ガルバ着。

2. 感 想

今回のグアテマラ研修に先立ち、私は次の2点について、自己啓発のための主眼をおいていた。すなわち、①スペイン語に磨きをかけること。そのためには研修所でのレッスンのみならず、一般の人々ともなるべく会話の機会をもつこと。②中米の他の諸国の様子を見聞することにより、社会・文化・歴史・風俗・習慣・言語その他において、ホンデュラスとの共通性や相異点をよく認識してくること。

さて、上記①については、東京での派遣前語学訓練を含め、すでに1年にもなる私のスペイン語学習を振り返り、次の点をとくに集中的に学習して、欠点を少しでも克服するよう目標を置いた。i) 接続法, ii) 前置詞や副詞の、とくに慣用的用法, iii) 関係代名詞, iv) 手紙の書き方, 電話のかけ方, etc.

このような意気込みで、私は11月30日、テグシガルバからはほぼ8ヵ月ぶりに出国して、グアテマラ行きの飛行機に、同じく研修を行なう他の9名の同僚とともに乗り込んだ。そして翌年1月6日に帰国するまでの38日間の体験は、私にとって非常に貴重なものであった。その成果を述べてみたい。

まず、語学研修所(PLFM)では、その学習指導システムや管理に問題が多いが、ともかく念頭においていた接続法について、理解を深めることができ、以後、会話の中はかなりとり入れて話せるようになった。副詞的用法については、以前より疑問に思っていた点について解決をみた語法もある。例えば、

El agua se fluyó fuera de la vasija.

El agua se fluyó afuera de la vasija.

これは、グアテマラ人の私の個人教師によると、どちらも正しく、同じ意味として用いてよろしいとのこと。

それにしても、この1年間のスペイン語学習の成果は、すでに相当蓄積されていたようで、普通の話題についての会話では、教師ともかなり自由にコミュニケーションが可能だった。おそらく、日本での語学研修直後にいきなりこの研修所にきたのでは、このような余裕は生まれることはなか

っただろう。今回の研修が有意義なものとして感じられたのは、このためであることは明らかである。しかし、それと同時に、今まで自分自身正しいと思って使っていた用語が、実は不適當であることを教師に指摘されたことも意義がある。やはり、マンツーマン方式によるレッスンの利点といえる。

また、4週間にわたって、グアテマラ人の家庭に宿泊して、その家族の一員として扱われたことは、たいへん良い体験となった。その国の文化・風俗・習慣を知るには、これくらい長期間、現地の家庭に入り寝食をともにすることが最良の方法である。私にとって、研修所でのレッスンよりも、実質的には家庭での体験の方が効果が大きいと思った。ちょうどクリスマスをはさんだ研修期間のため、グアテマラ人はどのようにクリスマスを過ごすのか、その背景となるカトリシズムをどのように信仰し、日常生活の中に組み入れているか、若い人々はどのように考え、どのような希望をもち、どう余暇を過ごしているのかも、よくわかった。また、一般家庭ではどのような食事をつくって食べているのか、直接、家族に、料理の名前とか材料、つくり方などを教えてもらい、味わえるなどということは、とても普通の旅行では望めない。4週間のケサルテナンゴ滞在中、街角で顔見知りになった市民と挨拶や世間話が交わせるようになったことなどで、日本人を少しでも理解してもらえたことは嬉しかった。この研修のもつ真の意義は、この点であるかもしれない。

休日を利用して、私はできる限りあちこち見てやろうと、バスに乗った。隣りに居合わせた乗客との会話、街角で道を尋ねたとき、親切に教えてくれた行きずりの人たちと親しく言葉を交わせたのも、一応8ヶ月のホンデュラス滞在経験で、中米人気質が少しでも身についたためであろうか。もし、日本から派遣された直後にこの研修が行なわれていたら、半分も楽しめず、これほど充実感のある38日にならなかつただろう。とにかくこうして旅を終わり、いろいろな人々との会話が懐かしくよみがえってくる。ホンデュラスにとどまっていたは、とても味わえない、これらのバラエティに富んだ思い出が、私の残りの任期を、一層、励ましてくれる。ぜひ、このよい研修制度を続けて、後に続く隊員の皆様にも体験していただきたいと、切に希望する次第である。

3. グアテマラの思い出

楽しかったグアテマラ研修の思い出を長く記憶するために書き残したいという欲求にかられ、拙文を覚悟で、気ままに筆を起すことにした。普段の報告書のような肩の合った文ではなく、紀行文、あるいはドキュメンタリータッチでまとめた。

『グアテマラは近くて遠くにありにけり』

1979年11月30日の朝がやってきた。早朝6時半のグアテマラ行き飛行機に乗るべく、眼い目をこすりながら空港に行き、やはりグアテマラ研修の他の9名の隊員とともにチェック・インを済ませた。下着とノートだけの小さなリュックサックを預け、搭乗券をもらって出陣管理へ赴く。なるべく人のよさそうな担当官の前の列に並んだ。ところが、いざ私の番になってパスポートをしげしげと見つめていた男は、トラブルが起きませんよという私のはかない願いも空しく、私にいった。「君は出国できないよ」。「えっ、そんなアホな、だって私と一緒にグアテマラへ行く仲間のうち、すでに女性2名と男性1名は出国のスタンプをもらっているではないか。いくらあなた方がフェミニストとはいえ、そんなムチャクチャなことは……。私はこのとおりちゃんと外人登録もしてあるよ」と抗議したが、全然とりあってくれない。隣をみると、他の仲間も隣の窓口で何やらもめている。

原因は何かというと、出国ビザがないためである。男に「ビザはどのオフィスで、誰にもらえばよいのか？」と尋ねる。メモ用紙にそれを書かせて、最後に「あなたのサインを頼む」というと、これだけは強く拒否された。というわけで、飛行機はテグシガルバに協力隊員7名を残して、荷物だけを載せたまま、一足お先にグアテマラへ行ってしまった。さあ、それからが大変である。午後の便の出発までには7～8時間あるので、時間的には余裕があるだろうが、とりあえず協力隊事務所に戻り、体勢を整え直してから、メモを持って、いわれたとおり移民局へ赴いた。ところがここで一波乱。外人登録を済ませた仲間の1人には即座に出国ビザのスタンプを押したのに、私には頑として押してくれない。「それではどうすりゃいいのだ」というと、無能そうな顔をしたインスペクター（検閲官）が偉そうに答える。「まず外務省領事課へ行って20レンピーラ（2,000円）払っ

てパスポートに居住証明をもらって再びここにこい。それからここでも20レンピーラ払って書類にいろいろ記入しろ。そしたらビザのスタンプを押してやる」とのこと。長々と続くその言葉を聞いて、私は暗澹たる気持ちにおちいったが、とにかくビザは何とか取得できるらしいと判って、少し元気を出した。

手はじめに、いわれたとおり外務省へ行った。2階建てで中庭のある石造りの重々しい建物の2階に目指す領事課がある。このボスは女性だったので、「こりゃ、やり易い」とばかりに、さっそく愛想よく挨拶して、おもむろに用件をきり出すと、最初はニコニコしていたのに、そのおばさん俄に真顔になっていった。「居住証明が欲しければ、移民局で外人登録をしたときに受け取ったはずの証明書（カードではない）のコピーを持ってこないとだめよ」。幸い、こんなこともあろうかと、前もって持参してきた証明書のオリジナルを見せると、コピーじゃないと受け取れないという。居住証明書の番号が判れば用は足りるはずなのに、しかも外務省にも、もう1枚の証明書が原簿として保管されているはずなのに、しつこくコピーにこだわるのである。このような恐るべき不合理に染まったこの国の役所システムは、改善の方向に向かうどころか、ますますその度合いを増している始末。

やっとコピーを持って行くと、おばさん、やおらでっかい台帳を取り出して机の上に広げると、私の名前やパスポート番号、そして証明書の番号を記入した。パスポートに居住証明のハンコを押して、20レンピーラをしっかりと私からまきあげ、今度はボスの Sr. Santiago Amilcar Lopez という巨漢の男の部屋に連れて行かれ、旅行目的など2、3の質問をされたから、やっとサインをもらった。

もう時計の針は11時をずいぶんまわっていた。これまで3時間は経過した。いよいよ移民局へ行って「さあどうだ文句はあるまい」といってやろうと意気揚々と外務省の入口を出た。さて、インスペクトールのオフィスでパスポートを見せたら、何と今度は、全く見たこともない別の用紙を引き出しから取り出して、私の前に置くではないか。「今度はここに行きなさい。大丈夫、金はかかりません……」。これで完全に腹から頭にきて、あとはもう日本大使館の手に委ねることにした。このおぞましい不合理のかたまりの原因は、担当者がこぞって無知、無能、無責任なことである。

また、各部局間はもとより、各セクションで統一した事務手続きの順序が確立されていない（というよりは担当者が、それを学ぼうとしないのである）ためである。

さて、日本大使館の大池書記官の手を煩わせて、再度、外務省へ赴くと今度はウソのようにスムーズに行く。その結果、私の場合は、居住証明をもらうために奔走したあの一連の手続きは全く不要であったという。というのは政府間の協力隊派遣の取決めで、そういう手続きは一切不要ということが明記されているためだが、移民局のボスにも、外務省領事課の担当者にも、公用旅券だということはちゃんと聞いておいたのに、彼らは全然、そんな政府間の取決めなど知らないのだ。つまり、デパートの店員が自分の売り場にある商品の知識を全然もたないようなもので全くあきれてものもいえぬ。現在は、とりわけ、隣国ニカラグアから逃れてきた人々がホンデュラスへの居住手続きに殺到しているの、書類が山積みになっていて、そうでなくてもスローモーな役所の処理がいつそう停滞しているという。それにしても各セクションとも、暇そうにコーヒーなど飲んでいるものが多かった。この点は、どこかの国にもよく見られる現象である。結局は、外務省の旅券課に行けば、すぐに出国ビザをもらえたというが、私は午前中、ここにも足を運んでいた。その時は、「これは領事課の方でやる手続きだ」と窓口係は確かにいった。全く何が何だか、ムチャクチャである。そして領事課に払った20レンピーラは返してもらえなかった。

一方、我々より一足先に行った荷物のことも気がかりで、これもホンデュラスの日本大使館からグアテマラの日本大使館宛に電報を打ってもらい。税関から引き出して、保管しておいてもらうことになった。こうした一連の事件がやっと片付き、今朝と異なり、ずいぶん重い足どりで我々7名はトンコンティン空港へと向かったのである。そしてこの事件は、その後、研修旅行中に起こる幾つかのトラブルを暗示していたのだ。

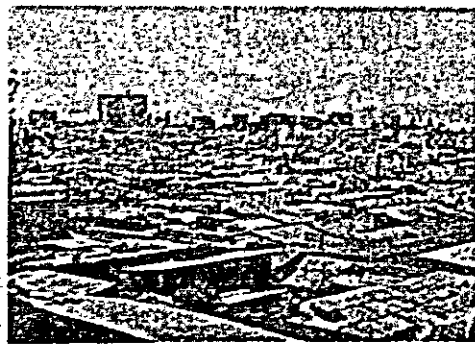
【グアテマラ見参】

かねてより、グアテマラは工業化の進んだ国だと聞いていたし、例えばホンデュラスで買物をした際には、プラスチック加工品とか、文房具、食品（加工品）などにも HECHO EN GUATEMALA とある場合が多かったので、ある程度は予想していたが、11月30日の夕刻、語学研修のためグアテマラ・シティのオーロラ国際空港に降り立った時、そのニア・ター

ミナルのモダンぶりにまず驚いた。そして入国手続きのため、ビルの中に入ってまたビックリ。まるでアメリカのロサンゼルス空港と同じような内装であった（もちろん、規模は全然違うが）。こんなことで我ながらあきれるほど目を見はらされるところをみると、知らぬ間にずいぶんとホンデュラスでの常識に慣らされてしまった自分に改めて気づく。

この驚きは、空港からタクシーで首都グアテマラ・シティの中心部へ向かった時にも、さらに深められた。なにしろ日本の地方都市も顔負けの高層ビルがあちこちにニョキニョキと立ち並び、夜空に煌々とイルミネーションを輝かせているし、空港から市内への道路の広さと、街路灯の光茫の列、疾駆する車のライトの洪水、またケバケバしく点滅する原色の雫々しいネオン、よく整備された街並み（もっとも、ダウンタウンにくると見られないが）など、全くホンデュラスでは想像もつかない光景なのである。その晩、投宿したホテルがまたデラックスで（もし直接日本から当地へやってきたのであれば、感涙にむせびたくるようなこんな感激は得られまい）、ノリのきいた清潔なスーツにくるまっていると、かえって寝つきがよくなかった。1泊4レンピーラ（400円）のホンデュラスの安ホテルは、いや全く凄まじい部屋ではあるが、しかしまた、奇跡的に安い料金だと、つくづく懐かしくも思いしらされた。

翌日、市内を巡ってみたが、通行人の顔がいやによそよそしく感じられた。もっとも、この時は官庁街を歩いていたのだが、これでは全く、日本の霞ヶ関界隈をうろつくネクタイ族と同じではないかと思った。よく手入れされた植込みや芝生、そしてきれいに並べられた歩道の縁石、マヤの遺



グアテマラ・シティ中心部（ダウンタウン）

跡からヒントを得たかのようなモザイクを彫った石垣や、洗練されたデザインのカーテンウォールに身を包んだビル群、同じ中米の小国というのにホンデュラスとの差異はあまりに顕著すぎる。広大なバナナ園やパイナップル畑で、1日5〜6レンピーラ(500〜600円)の賃金で労働者が収穫したものを大きな価格変動に悩まされながら売り、かろうじて得たトラの子の外貨を使ってホンデュラスが工業製品をグアテマラから購入し、その外貨で、一層グアテマラの工業化が進み、こうして立派な都市が建設されるのだと思うと、不思議な気持ちをした。日本人々も、このことはよく認識せねばなるまい。

(注) グアテマラは面積13.2万平方キロ(ただしベリーズを含む)。人口530万人。このうち120万人が首都グアテマラ・シティに住む。通貨単位はケックアル。これはドルと完全にリンクしており、1Q=1USDで、アメリカ人には非常に換算が便利だろう。

【グアテマラの治安】

ところで、グアテマラの治安については、近頃とくに注目のマトになっているが、荷物引き出しの件でお礼と挨拶がてら在グアテマラ日本大使館を訪れた際、黒瀬書記官から伺ったところによれば、つい先頃、1人の日本人旅行者がグアテマラの山間部地区(Quiché州)で殺害されたという。小林さんというこの25歳の青年は、小田実の影響を受け、世界各地のいわゆるキナ臭い地帯を歩きまわり、そのレポートを本にして出版することもやっていたそうで、旅先で知り合ったカナダ人と3名でグアテマラに入り、もっぱら、この国のゲリラが根拠としている地方を歩いているうちに、ついにこの国が最後のレポート地になってしまったわけである。事件の真相はつまびらかではないが、所持品が失われているので、単なる物盗りか、それとも上記のような理由で、ゲリラの潜伏地区でカメラで隠れ家などを撮ったために銃で撃たれたのか、カメラも盗られているのではっきりしないが、とにかく頭を撃たれて即死の状態であった。他の仲間も同じように撃たれ、1人は死亡、もう1人も重傷で、事件のいきさつも聴取できない、と書記官は顔をくもらせて語っておられた。

このグアテマラの日本大使館は、上記のいきさつのためであるのかどうかしらぬが、常時ものものしい警戒態勢をしいているとのこと、その警戒ぶりは、とてもホンデュラスの日本大使館からは考えもつかなかった。ホ

ンデュラスでは、ガードマンは一応腰にピストルをぶらさげているものの、腹も出っぱり気味の愛想のよいおっさんだが、グアテマラでは、まず正門のところに完全武装の戦闘服に身を固めた軍警の若い男が2人、こわい顔で見張っており、外来客をいちいちチェックする。また、大使館の玄関に入ると、正面に防弾ガラスでできた大きな見通し窓があり、内部の執務室が見えるかわりに、内部からも一目でどんな客人がきたのかすぐ判るようになっていた。この受付のガラスの下には、小さなスリットしかあけておらず、いろいろな申請なども、このスリットを通してしか行なわれないようになっていたらしい。

さて中に入ろうと、右手にあるドアを開けると、これが90°の角度をもたせた2枚ドアになっており、さらにもう1枚の扉が内側に設けられていて、どうしても、1人ずつしか入れないようになっていた。そして、執務室で働く現地人の男は、いつも机のわきに自動小銃を立てかけており、また入口のドアも、中から操作しないと開かないようになっていた。ちょっと神経質すぎはしまいかと思っていたが、「これでもまだ足りない」という面持ちで書記官の方が語られたところによれば、この1ヵ月ほど前にも、首都の野球場前で、白昼、テロ事件があったばかりで、その際、書記官自身、車に乗って現場近くに居合わせたという。市内のあちこちでこうした事件がよく起きるといふから、まだ実感としてよく判らないが、いつ何時、この大使館も襲撃されるかもしれぬ。

とにかく、あまり不用意に、ことにゲリラの出没あるいは潜伏しているという地域には興味本位だけで訪れることのないよう充分気をつけて欲しい、という書記官の言葉に、いささか緊張の面持ちで退出した次第である。ついでに付け加えると、さる5月には太平洋側の港町サン・ホセで日本人の船員が現地人の酔漢にナイフで刺し殺された事件もあったとか。この場合は全くの通り魔的事件であったが、警察は全く捜査をしようとせず、犯人は皆目わからず、殺され損ということである。

グアテマラ入国早々、このようなアドバイスを受け、やはり工業化の裏には、いろいろと歪みも多いことを悟りながら、研修に入ることになったわけだ。

【アンティグアの思い出】

研修に入る前の土曜日を利用して、“グアテマラの京都”ともいえるアン

ティグア・グアテマラへバスで行ってみた。ダウンタウンのバスターミナルから片道45セントパス（90円）でバスに乗り込んだのはよいが、アメリカから中古で買入れたらしいフォードのこのオンボロバスは、機関の調子がよくないようで、常にバックファイアの景気のいい音を、さながら爆竹の如くまきながら、ゴミゴミしたダウンタウンを抜けて、一路アンティグアへと向かった。密集した街並みを抜けると、道路は片側2車線と広くなり、久しく見たことのない歩道橋とか、ハイウェイらしい高架の下をくぐり抜けて郊外へと続く。右手には、個性的な外装の建物の工場やら研究所が、だらだらとした斜面に続き、左手には、1戸建ての平屋の住宅が並ぶ。いずれも日本の工場や住宅のような、没個性のスレートぶき工場とか、庭のない“兎小屋”とは大違い。緑地のスペースがゆったりとってある。

グアテマラ・シティは盆地状の場所にあり、アンティグアへの道は首都の西方に横たわる連山をまいて、次第に高度を上げた。振り返ると、アップタウンの高層ビル、そしてダウンタウンの細かな家並み、それらの間をうねるハイウェイが緑地の緑色を素地とした中に美しく見えた。バスは喘ぎながら前を登って行くトラックを、乗客がヒヤリとするような無理なカーブの地点で追い越して行く。しかし「爆竹」のせい、パワーがそれほど充分でない、他の高性能のバスには簡単に追い越される。それにしても、このバス（ここではカミヨネータと呼ぶ）、ダウンタウンを出発した時からケチのつきどおし。出発して30メートルも行かないうちに、交差点を右折する時、停止線オーバーの乗用車と左後車輪で接触事故を起こした。10分ほどすったもんだしたと思ったら、郊外に出て、この国のバスの運転手の常で、アクセルを目いっぱいふかして猛スピードですっどぼしている時、屋根にのせていた乗客の荷物の食卓机を振り落とし、頭をかきかき助手に拾いにやらせる1コマもあった。なかなか面白かったが、このため、この頭の薄い運ちゃん、ますます薄くなるのではなからうかと、いらぬ心配などしたりして……。

さて例によってスペイン語の勉強という大義名分のもとに、運よく隣にすわった女性に話しかけると、なかなか感じのよい人であった。23歳で独身。グアテマラ・シティのデパートに勤めているそうで、きょうは妹2人を連れて家族に会いにアンティグアへ行くところだという。山間部に入っても舗装は切れず、やがてサン・ルーカスという村で、パンアメリカン

・ハイウェイからそれ、アンティグアへとバスは進む。路傍に咲き続く白い野花のガードレールにそって、道は次第に下りとなり、そのうちに山の合い間に町並みが見おろせた。シティから45キロの道のりに1時間半ほどかかったことになる。

中米の都市というのは、たいていワンパターンである。つまり、町の中心部にしゃれた中央公園があり、それに面してカテドラル(教会、大型堂)や市役所が、そうでなければ博物館や何か由緒のある建物が並び、絶好のカメラの被写体となり得るのであるが、ここアンティグアもやはり同じで、とりあえず中央公園へ行けば、あとはここを基点として市内を迷わず歩きまわることができるわけである。市内のどこからも南西方向にそびえるVolcán de agua (アグア火山)が望めるので、方向オンチの人でも大丈夫である。この「水火山」という変な名前の山は、なんと標高が富士山クラスもある。あまり高く感じないのは、このアンティグアが1,500m以上の場所にあるためである。そういわれれば、運動不足のせいもあるが、坂を登る時など、なんとなく息苦しい。

“グアテマラの京都”というキャッチフレーズにしては埃っぽく、ゴミゴミした感じがするが、しかし、その方がなんとも好ましい。町の石だたみはデコボコしていて、家並みもまちまち。崩れかかったカワラが今にも落ちそうなところがいい。海抜が高いので、気候的には温帯で、夕方にはめっきり涼しくなり、アグア火山の向こうに夕日が沈むところなどを眺めると、晚秋といった風情である。町を歩くと、思わぬところに、半ば朽ちたような建物がヒョッコリ現われる。通行人に尋ねると、名のある遺跡であったりする。ちょっと町の中心からはずれたところにある教会では、ちょうど結婚式をやっていた。盛装した親戚縁者が自家用車やタクシーで乗りつけて、教会の中ではおごそかに結婚式がとり行なわれていたが、式を終えて教会から出てきたカップルに、タキシードやベールを着た小さな子供たちが、手に持った贈り物を手渡して祝福するところなど、まことにほほえましい。所変われど、祝福する側、される側の心境は、いずこも同じであろう。いつになったら私も祝福されるのやら。

『ケサルテナンゴは浅間山の頂?』

12月2日の朝7時、昨日予約しておいた切符を握ってケサルテ行きのバスターミナルへと赴く。シティからケサルテまでは約200キロ、3時間半

の子定である。バスは全席指定でリクライニング付き。今は涼しいので必要ないけれど、恐らくはエアコン付きで、日本では珍しい車内トイレもある。「これでは、さぞかし料金の方も」と思われるであろうが、さにあらずなんと、たったの3ケツツアル(600円)。私の実家は群馬県だが、高崎市から安中市まで僅か10キロ足らず、それなのに今から2年くらい前でも、100円では乗れなかったと思う。

バスは快適にパンアメリカン・ハイウェイを走った。ハイウェイといっても中央分離帯があるわけでもなく、普通の道なのだが、ホンデュラスの虫食い舗装に比べると、センターラインも鮮やかだし「なんとまあ、立派な道路だ」と思ったものだ。とにかく海拔が高いため、途中、雲の中も走った。さしずめ伊豆スカイラインといったところである。車窓風景がまた好ましい。ちょうど妻(Trigo)の刈り入れ期で、たわわに実った妻穂が、起伏のある地形を淡いカーキ色に染めて、うねって広がる。さながら、暖かそうな毛布をフワリ大地にかぶせたようだ。トウモロコシ畑も冬枯れのように薄茶色に色づき、全く晩秋のたたずまいである。そして、漆喰の眩しい白壁の民家その中に点在して、見る者に一層閑静な風景を印象づけてくれる。また、このグアテマラは火山の多い国である。日本の火山とはマグマの粘度が異なるのか、富士山よりももっと稜線のシャープなコーデ式火山が、ニョキニョキと立っているのが面白い。頭のとっぺんを雲の上に隠して、私には下半身しか見せてくれなかった。

やがて、いい加減すわり抜れてきたころ、絵にかいたような大きな盆地のパノラマが前方に見えてきた。遙か向こうに、例によって美しい2つの円錐形フォルムが裾野をひいている。そして4時間余りかかって、バスはケサルテナンゴの中央公園のわきにすべり込んだ。

このケサルテナンゴ市は人口約26万(はっきりしないが)。シティに次いでグアテマラ第2の都市というが、高層ビルなどなく、古い街並みの美しい、静かなところである。もっともクリスマスが近づいていたので、町のあちこちでは、クリスマスソングとか気の早い子供らの鳴らす爆竹の音が賑やかだったが……。私はこの町の中央公園が気に入った。というのは、ここから火山(Volcán de Santa Maria)をはじめ、町をとり囲む環状山群や、町のはずれにある丘が見わたせるからである。やはり日本のように、いつも山が見える風景が懐かしいのだろうか。



淡いカーキ色に染められた田園風景（ケサルテナンゴ郊外で）

ところで、この町自体が標高2,333mの地点にあるといえ、読者はどうお思いだろうか。なんと浅間山に匹敵する高度である。確か群馬県、新潟県、福島県の県境にまたがる燧岳（尾瀬ガ原から見える山）は東北地方で一番高い山だが、やはり、これくらいの標高であったと記憶する。ケサルテナンゴ市のパンウレットに、そう書かれてあるのを見て、急にまた息苦しさを覚えたのは自己暗示によるものか。したがって話が飛躍するが、アルコールのまわりの早いこと。これも飛行機に乗っている時、1本のビールでフラフラになるのと同じ現象（もっとも私の場合3本くらいでないでダメだが）である。無事、研修地到着を祝って市内のレストランで昼に1杯やった時、そう思った。

『語学研修開始』

ホテルで当地第1夜を過ごし、12月3日の朝8時半、研修先の Projecto Linguistico Francisco Marroquin（略して PLFM）を他の6名の仲間とともに訪れた。建物は新しくはなく、中庭を囲んで周囲に小さなコンパートメントが十数室あり、ここが教室というわけである。朝の弱い日射しを浴びて、中庭の陽のあたるところに机と椅子を出して勉強している組もあった。

まず、ディレクター(ディレクター)に挨拶して、鶴巻調整員の作成してくれた我々の語学レベルと、どこに各自の研修のポイントをおいたらよいかについて記した研修所側へのインフォメーション・レターを渡す。そして研修費300ケツアルと、現地の家庭に滞在するための宿泊費、食費

4週間分100ケツアルを支払った。そのあと教科書を渡された。これは米国で出版されているスペイン語テキストで、このデポジットに12ケツアルとられた。ケサルテナンゴには PLFM は2つの研修所をもち、教師は全部で30数名いる。生徒はアメリカ人が断然多く、次いでヨーロッパ人の順である。パカンスできたり、仕事のためスペイン語が必要だったり、その動機や年齢、国籍はさまざまである。

さっそく研修が始まった。私は研修前に、我々の語学レベルを教師が判断するため面接による口頭テストがあると聞いていたが、そんなものはやらず、他の研修生と同じ英語版のテキストを使って始められた。マンツーマンで行なわれる研修で、教師は毎週交替する。最初の週、私の担当になったのは21歳の女性だったが、既婚者だという。一応、教員免許はもっているという。「それでは、まず私の苦手の接続法から教えて下さい」というと、先生は答えた。「それはできません」。「えっ、どうして？ ここ研修所だろ」。「この学校では、最初の週は動詞の活用から教えることになっているんです」。「でも、時間ももったいない。私の習いたいのは、接続法とか慣用句なんだ」。「それじゃ試しに、Caber の活用をいってみて下さい」。「えーと、Caber……何だい、そのCaberとかいう単語の意味は？」。「やはり活用の勉強が必要なようね。だいたい、Caber などという死語に等しい単語を例にだすとは……」。「ところで先生、我々の語学レベルについて書いてある手紙をディレクターから見せてもらった？」。「えっ、何それ？」。「……」。

授業はそうして始まった。研修所は午前中は8時から12時まで。途中10時から10時半までティータイム。午後は2時から5時まで。途中3時半から4時までティータイム。パンフレットによると、「1日7時間みっちり勉強できます」というふれこみだが、実際は正味6時間。しかも翌日、午前7時50分ごろ研修所へ着くと、なんと、まだ鍵がかかっており、開いたのは8時5分すぎだ。下宿で昼食をとって午後1時50分ごろ行くと、これもまた2時すぎに開いた。どうも時間にルーズだ。中米人の特色として時間に至極いい加減なことはホンデユラスでよく判っていたが、この研修所へは我々はちゃんと金を払ってきているのである。換言すれば、これは契約であり、研修所側はこれを守る義務がある。またティータイムが終わっても、教師らが世間話をしているなかなか始まらなかったりする。その反

面、午前12時や午後5時になると、彼らはさっさと家に帰ってしまうのである。

『怒り心頭に発す』

以上の2点をなんとなく不服に思っていた矢先、我々の間で「研修最後の週すなわち4週目はクリスマスである。24日の午前で授業が終わり、25日いっぱい休講になる。どうせ、その頃は爆竹がガンガン鳴り、人々はうかれて、とても勉強に身が入らないだろうから、最後の週の授業を辞退してその分の授業料を協力隊に返納しよう」という話がまとまり、ディレクターにかけ合うことにした。折も折、教師と授業で話をしている、彼女たち（中には男の教師も何人かいるが）のもらっている給料額が話題となった。訊いてみると、彼女たちは、人によって多少の差はあるにしても、1ヵ月に120ケツアルから最高でも150ケツアルしかもらっていないという。また、下宿先の家族に、「PLFM から下宿生の食費、宿泊費としていくらもらっているのか？」と尋ねると、家庭によって違いますが、驚いたことに60～75ケツアルしか受けとっていないという（私の下宿先の場合70ケツアルであった）。我々は頭にきて、この多額にのぼる不当な“搾取”に、12月10日午後、さっそくディレクターに抗議を申し入れた。

その結果、払い戻しの件は全然とりあってもらえず、しかも研修所の経理が全くデタラメであることが判明した。恐らく、このディレクターをはじめ研修所の管理者は、相当額を着服していると思われる。例えば、下宿代は10月から100ケツアルに引き上げて生徒に払わせているが、10月から現在に至るまで、そのことは肝心の下宿先には通達しておらず、値上げ分はまるまる研修所のふところへころがり込んでいること。そこで「我々が下宿代として支払った100ケツアルも、そのうち30ケツアル余りは横取りするのか？」と無能ディレクターに詰めよると、「いや、もう90ケツアルを下宿先に払うように改正したから」と答えるではないか。「それは、もう下宿先には知らせたんだな？」と訊くと、「まだだ」とのことだ。「それでは、きょう帰ったら、PLFM は90ケツアル払うことを下宿先にいっていいな？」というと、ディレクターは元気なく頷いた。しかし、それでも、いぜん10%の-marginが残っている。ディレクターは、「これらは下宿先との連絡、タクシー代など、いろいろ間接経費がかかるから」と苦しい出まかせをいっていたが、常識的に考えて、それらは研修費

の300ケツアルから捻出すべきもので、下宿代から天引きするのは間違
いだ。そして「支払いはいつか?」という問いに、「来年1月だ」とい
う。私は下宿先の家族がかわいそうになった。もっとも、私の下宿先の場
合は裕福なので、そんな心遣はいらないが、それでも下宿2日目に、おば
あちゃんに「いったい、いつ下宿代は支払われるのか知っているかねえ?」
と訊かれたこともあった。研修初日にディレクターに下宿代100ケツア
ルを支払う際、「どうせ同じことなら、直接、下宿先に支払ってもいいです
か?」と提案したところ、ディレクターが「そりゃ困る。必ず、学校側を
通してもらいたい」といった真意が、今になって判った。研修費300ケ
ツアルは協力隊から援助してもらっているが、この下宿代は、我々が今ま
で節約して貯めたトラの子の金である。それさえも有効に使われず、横領
されるとなると、事は重大だ。私はディレクターに「おまえでは埒があ
かん。この学校のオーナーを呼べ」と顔は穏やかに、しかしきびしい口調で
いいつけた。彼はさっそく、PLFMの事務局のあるアンティグア・グア
テマラにいる管理者のSra. Miliam Rodriguezという女を電話に呼びだ
した。しばらく事のいきさつを説明してから、私と代わった。それから30
分近くにわたってその女と話したが、私はもう怒り心頭に発する状態であ
った。その時の心情を記しておいたので、引用してみると……。

『……しかし、このPLFMでの研修は、もう打ち切るべきではないだ
ろうか。今日(12月10日)ディレクターや、責任者の27歳のミリアン
という女に電話してみたが、とにかく経理が杜撰で、やたらと生徒から
金をとるくせに、ちっとも学校のためには金を出していない。というこ
とは、少しも学校のこと、ひいては生徒のことを思っていないらしい。
例えば、学校に備えられるべき備品のおそまつき加減については、コピ
ーマシンや、生徒用のタイプライターが皆無で、黒板さえ1つもなく、
掲示版に紙をとめるビョウやテープさえない。我々への教材といえば、
落書き用のワラ半紙数枚と、12ケツアルのデポジットを納めて借りた
教科書3冊くらいなもの。しかも郊外へ屋外学習に行く時は、教師のバ
ス代も生徒がもつありさまである。そのくせパンフレットには「400ケ
ツアル(邦貨10万円)で4週間の研修費(うたい文句は個人レッスン
Individual instruction)、グアテマラの典型的家庭での宿泊と食費、
そしてコースで必要なすべての教材(これは上記の12ケツアルの教科

書も含められるべきだ)が自由に使用できます」とある。出発前に調整員から、「この研修に臨んでは、とくによい機会だから、しっかり勉強せよ」との訓話を賜ったが、実際にきてみると、研修所の管理がいい加減で、肩すかしを食わされた。例えば、調整員からの研修所ディレクター宛の手紙を持参して当人に渡す時、「これに我々研修生のスペイン語歴と語学レベルについて記されているから、今後の研修担当教師に見せて役立たせてくれ」と念を押したにもかかわらず、どの教師に訊いても、「そんなことは聞いていない」というし、私自身、初日に教師に、「特に接続法と関係代名詞そして前置詞の用法についてみっちりやってくれ」と頼んだが、「最初の週に接続法などという難しいことはやらないことが、この研修所の方針で決まっているので教えられない」といわれ、非常にナンセンスな気がした。しかも始業に間に合うように8時きっかりに研修所へ行っても、まだ門が開いていないことが多く、5分から、ひどい時は10分ものロスがでる。これは午後の始業時間の2時についても同じことがいえる。

ちなみに PLFM のパンフレットによれば、「朝8時～12時、午後2時～5時、毎日7時間の語学特訓 Curso Intensivo」とあるが、途中で午前、午後各30分ずつの休憩時間があり、しかも終業時間になれば教師はさっさと帰るくせに、休み時間が終わった時は、時間どおり戻ってこない。これでは1日に5時間が正味の勉強時間であり、これからすると、4週間の語学研修といっても、実際には、1日半のクリスマス休日(これとて、まる2日に等しい)を除くと、勉強時間はなんと18日×5時間=90時間となる。これに対して授業料として300ケツアル(300ドル)を支払うのだから、時間あたり、なんと、3.33ドル(800円)を支払っていることになるからたいへんだ。しかも、この300ケツアルの内訳といえば、教師には月に150ドル(ディレクターの話。教師側の話によると120ドル)を支払うだけで、あと全部学校側がいただくとか。例えばケサルテナンゴの PLFM の場合、生徒が35人いるとして、4週間で、150ドル×35人=5,250ドル(126万円)という大金がころがり込むことになる。これから学校の管理費、維持費をまかなうとしたら、大半の金が余ることになる。しかも、我々研修生がやっかいになる家庭には「100ドル支払う」と我々にいっているくせに、実際には30ドルをピンハ

ネして70ドルしか渡していない。この件もディレクターに突っ込んで訊くと「最近値上げすることにし、90ドルに改正した」といったが、これとて、まだ下宿先には PLFM から通知を出していないという。しかも我々からは前金でとるくせに、下宿先には翌月に支払うという、金利日当のずるい操作をやる場所だけは抜け目ない。

国民の重大な血税300ケツアル（研修費）と、我々のなけなしの貴重大金100ケツアル（下宿料）を、このように杜撰に取り扱われたのでは、とてもやりきれない。我々は、24～25日の両日がクリスマス休日で、しかも、その前後はクリスマス気分で人々がうかれて、とても授業に身が入らないだろうから、思いきって最後の週をキャンセルして、その分払い戻してもらおうということと、下宿代100ケツアルのうち学校が横取りした30ケツアルの用途について追求すべく、ディレクターに面談した。その結果、ここケサルテナンゴには責任者がいないので、アンティグアの PLFM 事務所に電話した。このオーナーは27歳の既婚の女で、金持ちの道楽であるところのいろいろなタイトルをもつ役員などをしており、PLFM など眼中にないといったようす。この女との電話で、私は非常に憤りを覚えた。ネゴの要旨は、ともかく①払い戻しには応じられない、②お前たちは研修生であり、“契約”は調整員との間で行なったのだから、でしゃばるな、③そんなに PLFM がいやなら、他にいくらでも研修所があるから、そっちに移ればいい、④今までの JOCV の研修生は誰も文句をいわなかったが、今回の研修生は育ちが悪い (mal criado) のか、⑤この PLFM はグアテマラのゲリラ潜伏地域のキチェ州をはじめ各地域の方言の研究生のための奨学金制度を設けており、我々外国からの語学研修生から大金をまきあげてそれに当てるので、PLFM の取り分が多くなっているのだ、などとヒステリックにいうので、いくら冷静に話そうと思っても不可能であった。全く“とりつく島もない”とは、このことである。もっと我々にインフォメーションを与えなければならぬのに、全部こちらに不都合を押しつけるようなことをいわれ、⑥この PLFM ではもう我々の予約を28日までとっているから、代替がきかず、払い戻せない（教師の話によると、今は生徒希望者がたくさんあるので、生徒にあふれて失業する心配はないとか、また失業保険に似た制度もシンジケートで設けているという）。したがって、

我々が一定期間を予めキャンセルしたところで、こうも難しく返事をすることもないと思うのだが、1度金庫に入った金は2度と出さない、という。まさに守銭奴のようなご婦人である。とにかく、私に浴びせた言葉の幾つかは、とても自分の学校の研修生（すなわち客）に対するものとは思えず、私はこのドーニャの人間性を疑わざるを得ない。電話では埒があかないので、とにかく文書主義のこの国の例にならい、抗議文をしたためて、直ちに郵送することにした。

私の下宿先の主人、73歳の弁護士のアスト氏も、「以前に、やはり、アメリカ人の PLFM 研修生がきたが、この時も70ケツアルしかもらっていない」といい、カンカンに怒っていた。話が少し前後するが、下宿先に支払うべき100ケツアルのうち30ケツアルは、やはり学校の経費の補てんに使うのだと、その女もいった。ディレクター（ケサルテナンゴ PLFM）に、「何故そんなにピンハネするんだ」というと、今度は急に「90ケツアルに改正したから、経費は10ケツアルとなった」と、いうことがコロコロと変わる。この10ケツアルは生徒のための、例えば、はじめて PLFM から各下宿先へ案内するためのタクシー代、下宿先が気に入らず変更した場合の連絡電話代、これらを各研修生に10ケツアルも要求するのは法外である。タクシー代など、市内のはずれまで行っても1ケツアルがいいところで、手紙代などホンデュラスに出しても6セントポス（12円）だし、全くいうことがムチャクチャである。とにかく、断固として、この PLFM だけは、今後利用するのをやめた方がベターである。

我々が抗議したので、ディレクターは、「明日、先生たちに時間厳守を訓令する」といっていたが、どうもピン트가はずれたことしか考えていない。要は、もっと我々研修生の金を研修生に還元せねばならない。グアテマラはゲリラに対して相当気を使っているようで、この PLFM で儲けた金で奨学金を100人くらいの学生に与えているというが、はたして、この剰余金を全部これにつぎ込んでいるかどうかは極めて怪しい。この奨学制度で方言の研究をすることにより、なんとかしてインディオと中央の同化を図ろうという意図もあるのだろうが、いくらボランティア精神をもってなる JOCV も、こうまで肩入れする必要はないと思う。前述の PLFM のドーニャは、「日本政府（JOCV のこと）は金

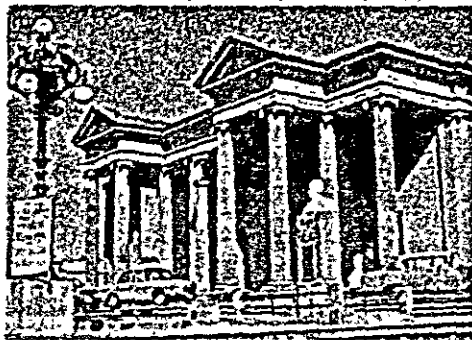
持ちだから、これくらいの金は問題なからう」と、とんでもないことまで電話で私にいったが、こんな誤解を生ませるほど彼らを儲けさせる必要がはたしてあるのだろうか。これが、きょうのネゴの感想である。なお、語学研修所は、PLFM の他にいくらかもある』(12月10日記)

私は翌11日、12月10日付でオーナーのミリアンに対して正式に抗議文を送付した。なお、コピーはシンジケートを組んでいる教師たちと、協力隊ホンデュラス調整員、そして下宿先にも配布した。我々の投じたこの抗議の一石が大きな波紋を投じることを希望しつつ……。

『研修風景』

12月24日まで続いた語学研修で、前記のようなトラブルはともかく、私は一応マンツーマン(正確にはマンツウーマン)による授業を楽しんで受けた。今、私の手もとにあるその時使ったノートには、新しく教えてもらった有意義な単語、面白い俗語、文法上の要点のみならず、グアテマラの面白い風俗、習慣についてのエピソード、食物の名前などがびっしりと書き込まれている。

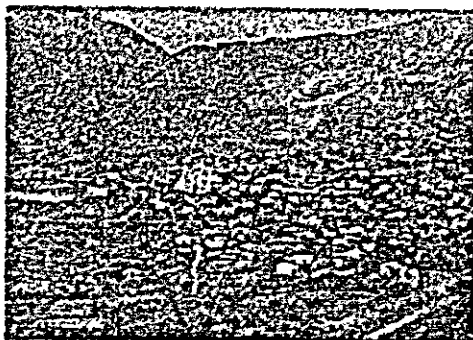
授業は、研修所内にもってやるだけでなく、毎週1度はピクニックがてら、野外研修と銘うって、バスに乗って出かけた。1週目は、ちょうど近郊の村でフィエスタ(お祭り)の1日目を見に行き、マリンバ楽団の演奏に合わせて皆で踊ったりもした。折りからラジオ放送中で、司令官が「明日が本番の踊りの日だけれど、1日早く訪れたようです」などといって村人を笑わせた。グアテマラは田園風景が美しい。ピクニックは、グア



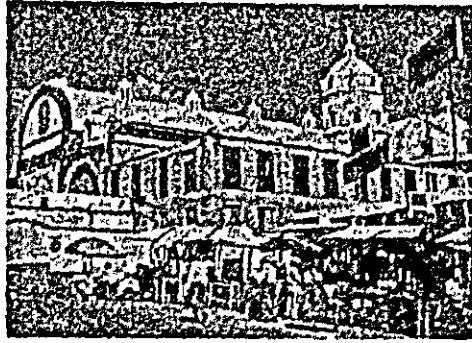
ケサルテンango市内にある市立劇場 (Teatro municipal) の正面風景

テマラ人に最も好まれる休日の過ごし方のひとつでもある。2週日には、ケサルテナンゴ市の西方にそびえるスニル火山 (Volcán de Zunil) の山肌に湧く温泉プールへ教師らと泳ぎに、というより、入浴しに行った。温泉に入ったのは、全く何年ぶりだろう。

研修は野外や学校ばかりではない。ここで面白いエピソードをひとつ紹介したい。ケサルテナンゴの町にもかなりうちとけてきた頃、仲間の1人の下宿先で、「何か日本料理をつくってみせてくれ」という話もちあがった。グアテマラ人は、東洋の料理店で出す焼きソバ(チャオ・ミンと呼んでいる)か、チャブ・スイ、炒飯(アロス・フリト)くらいしか知らない。そこで我々男ばかり4人で「ようし、日本の男の実力を見せてやろう」とばかり、日本風のチャオ・ミンに挑戦することになった。実は私なども普段は「君つくる人、ボク食べる人」であるが、「家事、洗濯、料理、裁縫は女の仕事だ」といい、「手伝うことさえプライドが許さぬ」といって嫌うこ中米の男たちよりは、まだ我々4人は女性の味方であるので、日本男児のすばらしさをより多くグアテマラ女性に知らしめようと、某日、その下宿先のキッチンに集まって、材料を揃え、慣れぬ包丁をふるった。皆、学生時代の自炊生活を思い出したのか、だんだん作業はスムーズになり、2時間後には20人分くらいのチャオ・ミンが大鍋の中にもうまそうにできあがった。本物の醤油がないので(Salsa de soya という名称のグアテマラ製のソースがあるが、醤油らしいのはその色だけ。だが味の素はさすがに、ここでも売っている)、味付けに苦心したが、どうやら満足のいく



スニル火山の入口にある町 (Zunil)。教会だけは、どこの町村にも立派なのが建っている



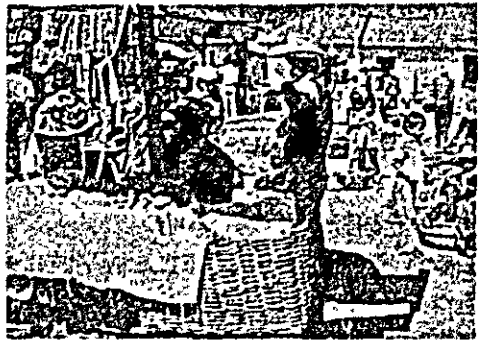
カテドラル（聖堂）とセントロコメルシアル（コマーシャル・センター）（ケサルテナンゴで）

ものができた。我々と下宿先の家族、その友人などもやってきて、一緒に試食した。なかなか好評であったが、量が多かったため残ったものは翌日、温泉プールへのピクニックの時に持参して、研修所の研修生にもふるまった。ここでも好評を得た。

これに味をしめて、翌週は別の仲間の下宿先で、今度はチャオ・ミンの他にテンブラもつくってみた。経験を積んだため、今度はさらに大好評。我々とともに研修所で勉強しているアメリカ人の男も一緒に加わったが、彼も太鼓判を押した。今後は我々の教えたテンブラがグアテマラでも大流行するかもしれない。しこたまビールを飲み、よく食べ、そして夜遅くまで語り合った。下宿先のベランダから見おろせる中央公園では、子供たちが花火遊びに夢中になっていた。いよいよクリスマスも迫ってきたらしい。

『市場風景』

その国の庶民の暮らしぶりを知るには、なんといってもメルカード（市場）を見てまわるのが一番だ。ケサルテナンゴの市場はもとより、あちこち見物した時も、いろいろなメルカードを見た。やはり町とか村のメルカードが素朴でいい。あの雑踏、そして埃と臭い、活気のある売り手の声、少しでも値切ろうとする買い手の声、子供の走りまわる姿……。これらはいずれも同じ風景である。日本にそのような場所が少なくなったことは残念である。韓国の市場（シージャン）、タイのフローティング・マーケッ



メルカード風景 (ケサルテナンゴ近郊のコンセプション村で)

ト、インドのオールドデリーのチャンドニチョーク通りと、アジアでもあちこち、そういう場所を訪れたが、そこは人間の生活力のダイナミズムを感じさせるものがある点で共通している。百聞は一見にしかず。写真でも見て、その雰囲気の一掃でも味わっていただきたい。値段の1例は、ミカン(というよりオレンジ)2個が5セントボス、モンキーバナナは1ダースが10セントボス、食事は1品が30セントボス、といったところ。近隣地区から売りものを詰めたカゴ(Canasta)を頭の上に器用に載せて、はるばるメルカードまで素足で歩いて集まるインディオの女性は、ここの風物詩である。だが、彼等の現金収入のなんと少ないことか!

【グアテマラの家庭】

私の下宿先は、“中流の一番上”ぐらゐにあたる家庭で、73歳になる

主人のフスト・ロベス・ベレス氏は、このケサルテナンゴ市の名士である。その息子の1人、フリオは私と同じ27歳で、1児のパパでもある。フリオの話によると、フスト氏の幼い頃は父親がおらず、母は、その後、別の男と結婚したが、幸いこの義父は、フスト氏が勉強したいというのに対して干渉しなかったので、彼は昼働き、夜学ぶという苦学の末、弁護士と公証人の資格をとり、今日のような名声を勝ち得たという。何しろフスト氏自身がいうには、このケサルテナンゴ市のライオンズ・クラブ会員であるとともに、親イスラエル評議員、親米会議員など、幾つかのいかめしい肩書きをもっている。若い頃は、グアテマラのサッカーのオリンピック・チームの一員だったという写真も居間に飾ってある。また、資産も貯え現在かなりの面積の畑をもつ。なんでもオレンジの木が20本植えられる土地を2,000ヵ所所有しているという。子供は7人おり、みな成人していて、一番上の息子が弁護士の仕事を継ぎ、現在同じオフィスで一緒に仕事をしている。家には、老夫婦（フスト夫妻）と使用人夫婦、それとフスト氏のいとこのおばあちゃんの5人が住んでいる。近くに息子のフリオが住んでいるので、奥さんと子供を連れてやってきて、時々、一緒に食事をする。

最初の日に、初めてその家族に紹介された際、小柄なフスト氏は言葉をひとつひとつ確かめるような口調で、眼鏡の奥から柔和な目で、「相互信頼でいきましょう」と語った。食事でも団らんでも、家族の一員として椅子をすすめられ、主に日本の文化、習慣、宗教などが話題となった。出される料理は、朝はいつもオレンジジュースにコーンフレーク、そしてそのあとフリホレスと卵焼き、パンとトルティーヤにミルクがつく。昼は、まず、スープが出て、次にメインディッシュはピフテキとかレバー炒め、あるいはチキンのトマト煮など毎回変わり、日本人ということで気をつけてご飯を普通より余計に出してくれて、さらにサラダ、レモンジュース、パンにトルティーヤがつく。夕食もだいたい似たような構成である。おかわりは自由で、おかげでかなり太ってしまった。私の滞在中、出された料理のうちで幾つか面白いものを紹介すると、

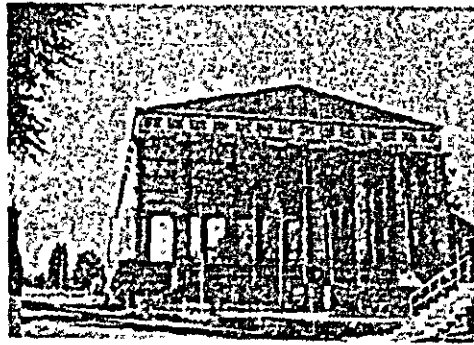
- ① Mosh con leche …… トウモロコシの粉にミルクを加えて調味したスープ、というより1種の飲み物。
- ② Ejote frito …… エホーテ（さやいんげん）の油いため、エホーテの

実を若いうちに収穫したもので、もっと熟させると、さやの中の実はフリホールと呼ばれ、フリホレスの原料となる。

- ③ Tortilla negra……トウモロコシの粉を練って、薄く丸く伸ばして焼いたトルティーヤは、普通、黄色をしているが、黒トウモロコシを原料に使うと、当然、黒いトルティーヤとなる。味もよろしい。ホンデュラスでは黒トルティーヤを見たことがない。
- ④ Rellenos……プラタノ（バナナのこと）をマッシュしたもので、フリホレスを餡頭のようにくるみ、焼きあげたもの。
- ⑤ Tamales……普通トウモロコシの粉を使うが、ケサルテナンゴでは米の粉を使って、これに、チレ（赤ピーマン）、アセイトーナ（オリーブの実）、Recado（?）、そして肉（牛肉でもブタ肉、チキンでも好みによって用いる）を入れてよく練り合わせる。そしてマシヤンの葉（大きな柏の葉のようなもの）でくるんで、蒸すことができあがり。これを当地の人は、おめでたい時などに好んで食べる。またバスターミナルで朝食、あるいは昼食時に車内に売りにくることもある。



民家の庭先：マソルカと呼ばれる干しトウモロコシを軒先ばかりか、屋根いっぱい乾燥させている。これをひいて粉にして、主食トルティーヤをつくる（トニカパンで）



ミネルバ寺院 (ケサルテナンゴで)

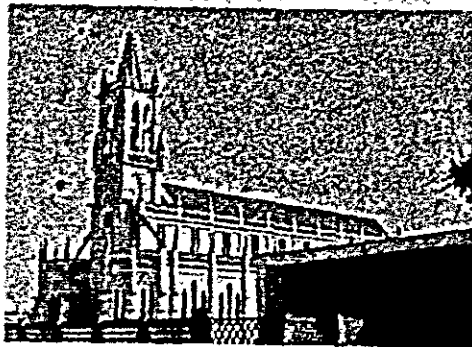
- ⑥ Pacaya ……パカヤはシダ植物だが、細長い茎は、テンブラのように
フライにして食べるとうまい。メルカードでも食べられる。

ある夕暮れ時、誘われて、郊外にあるフスト氏の麦畑を見にドライブに行った。定期便は飛んでいないので、すべて個人所有の小型機しか発着していないという飛行場の少し先に、フスト氏所有の麦畑が広がっていた。コンバインで刈り取ったばかりだという畑は、大きなバリカンを動かしたように、シマ模様がついていた。今年は、とくに山間部のこのあたりは、雨にたたられて、麦の生育具合が非常に悪いという。「しかも粒が小さい」といって、フスト氏は顔をくもらせた。「収穫の時は、息子の我々も手伝うんですよ」とハンドルを握りながらフリオが私にいった。それでもフスト家の資産は、この国の大富豪の所有するプランテーションに比べるとケシ粒みたいなもので、東海岸部の大穀倉地帯には、ケサルテナンゴがすっぽり入るような大農園が幾つもあるそうだ。上には上がある。私の実家など水田、畑を合わせても100アールそこそこしかないというのに。町に戻ると、西の空に火山が2つ、夕陽を背に見事なシルエットを描いていた。

私にあてがわれた部屋は12畳はあろうかという立派な広い部屋で、ベッド、洋服ダンス2つ、鏡台、勉強机などが完備しており、床はモザイク模様のリノリウム張り、ホンデュラスの下宿とは月とスッポンである。洗濯物も机の上にまとめておいておくと、1~2日後にはアイロンをかけてきちんとたたんで、使用人夫婦がもとのところにおいてくれる。洗面所、シ

ャワー室には、ちゃんとタイル張りのバスタブがあり、蛇口をひねると湯がほとぼしる。好きな時にお湯でシャワーを浴びることは、他の仲間の場合には、まったくなかったらしい。

こうして、まずまず何の問題もなく4週間過ごさせてもらったが、ひとつだけ小さな事件が起きた。フスト氏は「相互信頼でいこう」と私に語り、それで、ついに最後まで私は部屋の鍵を持たずじまいだったが、2週目のある朝、起床して、みると私の大事にしているチソットの腕時計が机の上に見あたらない。この時計はなにしろ一生一大の大恥をかいて出演したバンチDEデートの出場記念品だし、これがないと時間がわからず、これからの旅行にも大きな支障をきたすと思い、私はあおくなった。昨夜は1杯飲んで少し遅く帰宅して、すぐに寝たが、ちゃんと机の上に置いたことは記憶にある。しかし、まずはよく捜してみようと、引き出しの中からベッドの下、床の上と、考えられるところはすべて捜したが見つからない。そこで、やむなくフスト夫妻にこのことを告げると、さっそく使用人のミショーが呼びつけられ、「よく捜してあげなさい」とのフスト氏の指示に従って、さっそく私の部屋に入って行った。そして5分もしないうちに「サイドテーブルの下にあった」といって腕時計を持ってきた。私には大体の真相はわかっていたが、後にシヨリを残すのがいやだったので、「そんなところにあったのか、気がつかなかった。とにかくよかったよかった」と安心してみせると、フスト氏も、内心申し訳なさそうに、一緒に喜んでくれた。その後、使用人のミショーにはずいぶん世話になった。早朝は10℃



サン・ニコラス教会（ケナルテナンゴで）

以下まで下がることもあるケサルテナンゴの気候のせいか、風邪をひいて熱を出したことがあった。その時、ミショーは、食事をベッドに運んでくれたり、アスピリンとお湯の入った魔法ビンにコップを揃えて、きちんと持ってきてくれた。やはり、あの時、事をあらだてなくてよかった。

『グアテマラ見てある記』

グアテマラはバスが発達している。現地新聞にも報じられていたが、とくにケサルテナンゴは今後も、交通の要所としてもっと重視されていくだろう。ケサルテナンゴのメルカード、デモクラシアの隣りがバスターミナルとなっており、ここから北のウエウエテナンゴ、東ではモモステナンゴ、チチカステナンゴ、グアテマラ・シティ、南西では港町チャンペリコ、コアテベケ、レタルウレウ、マサーテナンゴ、そして南まわりのグアテマラ・シティという具合に、グアテマラ西部の主なところへ行ける。しかもバス代は80キロ離れたウエウエテナンゴまで1ケツアル、220キロ離れた南まわりのグアテマラでも2.5ケツアルというバカ安さ。これでは利用しない手はない。

使われているのは、昔懐しいボンネットタイプのバス（カミヨネータと呼ぶ）で、屋根にキャリアが付いていて、ここに手荷物（中には貨物と呼ばなければならないデッカイものもある）を満載して、ビュンビュン駆けめぐる。バス会社にもいろいろあり、1台しかない白タクみたいのところや10数台も持っているところもある。したがってウエウエテナンゴやマサ



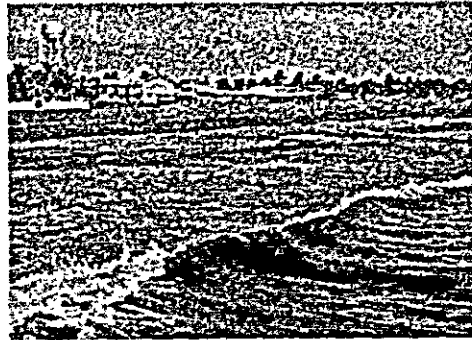
早朝のバスターミナル。向こうに見えるのはサンタ・マリア火山（ケサルテナンゴで）

ーテナンゴ、そしてグアテマラ行きなど主要路線ではいつターミナルに行っても、たいていすぐ乗れる。しかし、カミカゼ運転には恐れ入る。車内のフロントガラスの上に、「このバスは神が祝福したもう」などと書いてあったりするが、祝福されすぎて、召されてしまっては困る。隣のグアテマラ人は、窓をきる風の音にも平気な顔をしているが、私はいつも前の座席の上にある握り棒をしっかりと握っていないと安心できない。とても居眠りする余裕もない。ローカル線ともなると、乗客はいろいろで、見ていて楽しい。まるでチンドン屋のようなケバケバしい暖色をふんだんに使った模様（サイケデリックと呼びたい）ズボンや上着を身にまとったおじいちゃんや、今晚の夕食にするのかメルカードで買ったニワトリをぶらさげて乗り込んでくるインディオのおばさん、赤子を背負ったうえ、3人の子供の手をひっぱってくる、まだそんなに年をとっていないと思われる女性、猫を抱いた少年、マシヤンの葉（クマリートづくりに用いる）の大きな束をかかえてバスに乗ろうとして、バスの助手に「これは屋根に乗せよう」といわれているおばあちゃん、いやはやまったく暇やかである。感心させられるのは、バスの助手の働きぶり。彼は山のように持ち込まれる乗客の荷物を、小さいものは運転席のわきにおき、大きい重い荷物はひょいと肩にのせ、バスの後部のタラップを昇って、すばやく屋根にかつぎ上げる。そして、何十個という荷物と、その持ち主を実によく記憶している。客が降りるたびに、再び屋根にかけ上がり、でっかい荷物をよいしょと降ろす。さらに切符切り、客の呼び込み（バスは町を出発する際、なるべく乗客を集めるために、町の中をひとめぐりする）と、たいへん忙しい。もっとも、中には1杯気げんの助手もいて、客の荷物を間違えて降ろし、トラブルを起こしていた場面にも出くわしたが……。

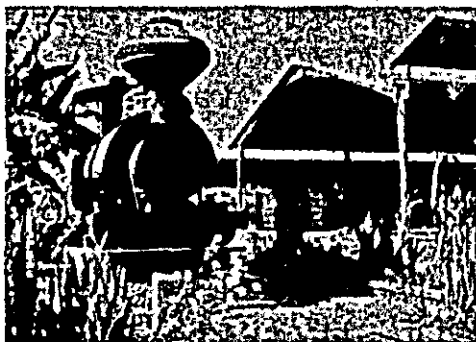
12月15日にチャンペリコへ行った時の模様を書いてみよう。朝9時すぎのバスにケサルテナンゴから乗った。運転手はどんな男かを見ると、ロマンスグレーの初老のおっさんで、白いシャツに赤い毛糸のチョッキがいなせである。ストローハットをかぶり、ちょいとタバコを横ぐわえしながらハンドルを握る。助手がまわってきたので切符を買う。チャンペリコまで1.5ケツアル。さて出発。メルカードの人波をかきわけ、助手は「チャンペリコ」「レタルウレウ」とわめきながら、少しでも多くの客を乗せて満席にしようと頑張る。市のはずれでも、何人かが路傍でバス待ちしてい

る。彼らを拾ってバスは一路西へと向かった。スニル町からはずっと下り坂。途中で検問所があり、通行料（せいぜい50セントボス）をとられ、ナンバーのチェックが行なわれる。もちろん、乗客は何もしなくていい。岩をくり抜いたトンネルを抜けて、バスはエンジブレーキをかけながら下る。なにしろ海岸まで行くのだから、高度差2,333mもあるわけで、高度が下がるにつれて、分厚いセーターからカーディガン、そしてTシャツへと衣替えをせねばならぬ。隣りにすわった農夫だという若い男と話しているうちに、1時間半くらいでレタルウレウのバスターミナルに到着。ここは本当の熱帯。汗がにじむ。ところで、さきほどの助手が「ここでカミヨネータを乗りかえてくれ」という。「えっ？ これはチャンペリコ行きではないのか？」という、「チャンペリコ行きだったが、そこまで行く客は、あんた1人だけだったので、ここで引き返すことにした。あそこにいるカミヨネータが連れて行ってくれるから大丈夫。ここからの料金は俺があの手で払っておく」とのこと。こういうことは、しょっちゅうあるらしい。チャンペリコまでの道は、ほとんど直線の平坦な舗装路。車窓には広大な綿畑が見えた。綿の実が、残雪のように白く広がって見える。先ほどの農夫の話によれば、この地域は、トウモロコシと綿が主要産物で、綿はチャンペリコから日本など諸外国へたくさん輸出されているという。今年は雨で少し収量が落ちたという。その他コーヒーがドイツ、オーストリア向けに少々栽培されているのと、米も少しつくられているとのこと。

太平洋岸のもうひとつの港町サン・ホセにも行って見た。大使館の書記



チャンペリコ海岸。浜の砂の色が黒いというが、そう見えますか？



チャンペリコは棉花輸出港。伐橋のたもとの広い棉花ストックヤードの一角には、昔活躍したSLが記念に置いてあった

官の語られたことが、チラッと頭をよぎったが、やはり少しは好奇心もあったのかもしれない。いつものように南まわりのグアテマラ行きのカミヨネータに乗り、エスクイントラまでの切符を買った。道中の話し相手は、マサーテナンゴで先生をやっているという母親と、7歳の男の子。さすがに教育熱心らしく、「日本っていう国知ってるかい？」と男の子に訊くと、「ウン、本で読んだ」とか。にわか教師となって、子供の質問に答えるハメになったが、私のスペイン語も子供にも少しは通じるらしく、嬉しかった。

【グアテマラの言語】

グアテマラの言語は当然スペイン語だと思っていたが、さにあらず、ここには数多くのディアレクト（方言というよりインディオの種族によって異なる現地語）がある。そういえば、バスに乗り合わせたインディオのおぼちゃんたちがしゃべっているのを聞いていると、中国語やタイ語に似たような発音である。

12月16日にケサルテナンゴの中央公園の近くのもうひとつのバスターミナルから20キロ離れたトニカパン市へ行ってみた。ここはトニカパン州の州庁所在地であるが、人口4万くらいの山あいの静かな町である。この町はずれの丘を登っていたら、暇そうな現地の男たちが私を呼びとめた。「日本語の挨拶の仕方を教えてくれ」というので、ノートの切れ端に書いて教えてやった（こういうことはグアテマラ旅行中、何度もあった）。彼らは喜んでお礼にキチエ語を教えてくれるという。「スペイン語とキチエ語と、あんた方にとって、いったいどちらが日常よく使われる言葉か

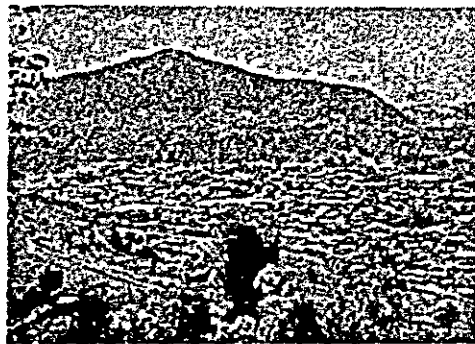
ね？」と尋ねると、キチェ語の方だという。いくつか採語したので、それらを紹介すると、サァキィ・リキィ(おはよう)、シェキッフ(最後のフ弱くは発音する。中国語の無気音のような発音の仕方。こんにちはの意)、ティオン(ありがとう)、チャペフ・チッキ(さよなら)、カシュテウ(冷うのか?)「えますね」といったところで、最後に「I LOVE YOUは何といと訳くと、ずいぶん発音が難しかったが、ウォッツ・カ・ティン・ウィ・ロというのだそう。

丘から見わたすトトニカパン。このキチェ州の隣の州の様子は、とても、この山の向こうにゲリラが潜伏している血生臭い地区があるとは思えないほど、のどかで平和なたたずまいを見せていた。

一方、ホンデュラスに比べて、同じスペイン語圏でも、ここグアテマラで使われる用法には少し相異がみられることを知った。例えば *querida*。この単語は、それまで『恋人』とか『最愛の妻』を意味する言葉だと思っていたが、グアテマラではなんと『浮気の手』を指す言葉だそう。ホンデュラスではグラマーな美人を呼ぶのに *cuero* という形容詞を用いるが、グアテマラでは通じなかった。ここでは *cuero* はでっかいオームの喩のことらしい。バスのことを *camioneta* と呼ぶのも、ホンデュラスとは違う。メキシコでは *camión* と呼び、トラックと同じ単語である。ホンデュラスでは *Autobus* である。

『チチカステナンゴの雑踏』

12月21日～23日にチチカステナンゴでお祭りがあるというので、22日に出かけてみた。午後2時にケサルテナンゴを出発。パンアメリカン・ハイ



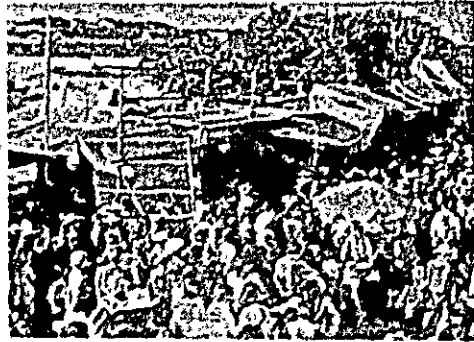
トトニカパン風景

ウエーをグアテマラに向かって走り、ロス・エンクエントロス（出会い、という意味）で北にそれ、さらに17キロ。すさまじいカーブの連続する深い谷を下って上り、午後4時半ごろ着いた。さっそく観光パンフレットでおなじみのセントロの教会前に行ってみると、これまたもの凄い人出があった。そして教会の前の広場はもとより、セントロ周辺の通りには、木を組んでテントを張った出店がギッシリと立ち並んでいた。インディオら現地の人々に混じって、やたらときれいな身なりの米国人の旅行者が目についた。教会前には爆竹の紙屑が雪のように積もっており、粗末な服を着た子供たちが不発弾を捜していた。その横の仮設ステージでは、マリimba楽団が生演奏のまっ最中であった。ラジオ放送中ということもあって、そのまわりは黒山の人だかりである。しばし耳を傾ける。やはりテープレコーダーを持って来るんだ。その晩は当地に1泊した。観光の町だけに、安ホテルが少ない。1泊2～3ケックアルで泊まることを心がけていたが、そういう安宿はついに見つけられなかった。ここはやはり日帰り旅行とするのがよい。

それにしても、全く辺鄙なところに町をつくったものだ。通りは狭く、坂ばかりで、複雑に入り組んでいる。キチエ州の州庁所在地サンタ・クルス・デ・キチエは、これからさらに17キロも奥に行ったところにあるという。キチエ州がゲリラの根拠地となっているのも頷ける。夜、明日のケサルテナンゴ行きバスの出発時間でも訊こうとバスターミナルへ行ってみる。そこにたむろしていた子供たちが「明日は面白い行事があるよ」という。「何だい?」「朝から、この近くの村でニワトリがたくさん首を切ら



教会前の石段にたむろする人々



マリンパ楽団のまわりに集まった見物人



ベニト・フアレス公園 (ケサルテナンゴで)

れて生けにえにされる儀式があるんだ。ぜひ見て行くといいよ」。まだマヤの伝説が残っているのか。その後、そのニワトリをどうするかというと、見物人に売る。彼らはそれを昼食のスープにでもして食べるのだという。残念ながら、それを見ずに翌日ケサルテナンゴに戻った。

【クリスマスはアルコール漬け】

12月24日、いよいよクリスマス・イブがやってきた。この日に先だつこと8日、すなわち12月16日からケサルテナンゴの中央公園に面した市役所のエンタシスには FELIZ NAVIDAD のイルミネーションが飾られ、夜になると Jose y Maria (キリストの両親) の行列が町をねり歩く。中央公園をはじめとして、街頭では爆竹、花火が盛大に飛びかい、それは賑やかというか狂気じみている面もある。これが夜の10時すぎまで、

毎晩繰り返される。

日本でも気の早いデパートはサンタの飾りを12月の初め頃からやるところがあるが、こちらはもっと早い。ホンデュラスでは10月にはラジオからクリスマス・ソングが流される。このケサルテナンゴの中央商店街でも我々が到着してから間もなく、ハリコの雪ダルマがたくさん道の上に吊され、道行く人々のクリスマス気分を盛り上げていたが、その雪ダルマの色も、かなり排気ガスで灰色になってきた。研修所にも前の週からデーンとクリスマス・ツリーが飾りつけられた。点滅する豆電球が、町中の商店、役所、学校、家庭で輝き始めていた。24日は午前中で語学研修も終わり、皆、プレゼントやら食べ物など買い込んで家路に散って行った。

さて、わがフスト家でも、普段はアルコールをのまない主人のフスト氏が、この晩ばかりはウイスキーをはでに飲むというので、私は彼のおつき合いのため、1週間ほど前から体調を整えて、この晩を待っていたのである。また半月くらい前から家の中は、新しくペンキを塗ったりして、この日に備えられていた。当日は、椅子を運んだり、テーブルを並べたりして、親戚、友人などの来訪に備えて用意万端整えられた。夕食は軽く、Tamalを2つほど食べる。そしてフスト氏の居間に集まって、いよいよ、氏のとっておきのウイスキー（ジョニ黒）のキャップがおごそかに開けられた。あとはいつものペースで……。やがて夜も深まり、フスト氏の息子夫婦たちとか、休日でグアテマラ・シティから帰省している友人、親戚、録者が入れかわり立ちかわり訪れては、抱き合って祝福し合う。その都度私も紹介されて、握手したり、時には（相手がうら若い女性の場合は）抱き合って背中を軽く叩き合ったりした。そのうち、フスト氏の奥さんのいとこで、近くに住んでいるというサト・トーマス港務局の取締役という偉丈夫なおっさんが訪れ、しばし話をしたが、ずいぶん気に入られた。それもそのはず、その娘のミリアンさんは、中央公園のそばにある Banco Industrial に勤務しており、私は2度ほど旅行小切手の換金でお世話になっていたからである。このグアテマラでも東京銀行の知名度は低く、バンク・オブ・アメリカしか扱わないという銀行が大多数である。したがって、とくに地方都市では不便を感じるのだが、優しいミリアン嬢のおかげで大助かりだった（後日、グアテマラの Banco Industrial でやはり旅行小切手を見せたら、東京銀行などというのは扱ったことがないからダメと拒否され

た)。

彼女もフスト家にやってきて、「ねえ、私の家にこない？」と誘いを受けた。父親のホセ・アンヘル氏も大賛成ということで、フスト氏に失礼してしばし場所替え。彼女の家は2ブロックしか離れていなかった。居間に通され、まず自己紹介をした。ホセ氏は7人の子供をもつというが、長女は最初の妻との間に、次女は2番目の妻との間に、そして現在の奥さんとの間には5人の子供がいるという（恐れ入りました）。日本だったら、こういう場合、いろいろと兄弟関係がギクシャクする例が多いのに、ホセ氏は自分の離婚歴を誇るように私に話して聞かせ、家庭は円満だという。奥さんはまだ若くて美人。その時居間にいた3人の“腹違い”の娘たちも、そろってチャーミングであった。ここでまたウイスキーをたっぷり飲ませてもらい、上機嫌になったところで、日本の歌をリクエストされ、何曲かノドを披露すると、これが非常にうけた（半分は国際社交辞令によるのかもしれないが）。

午後11時40分、12時まであと20分というところでホセ家に失礼してフスト家に戻る。そしていよいよ夜の12時。町中に轟く爆竹音と自動車のクラクションの音の中、クリスマス・イブはクライマックスとなる。私はフスト夫妻、その息子夫妻たちと、1人々々抱き合い背中を軽くをたたいて、キリスト誕生の“行事”を祝った。フスト氏は感動で目をうるませていた。そのあと、クリスマス・ツリーの飾りつけの前にセットされた長テーブルで、皆で深夜の晩餐を楽しくとった。カラフルな豆電球のイルミネーションがテーブルを色どっていた。

『アディオス シェラフー』

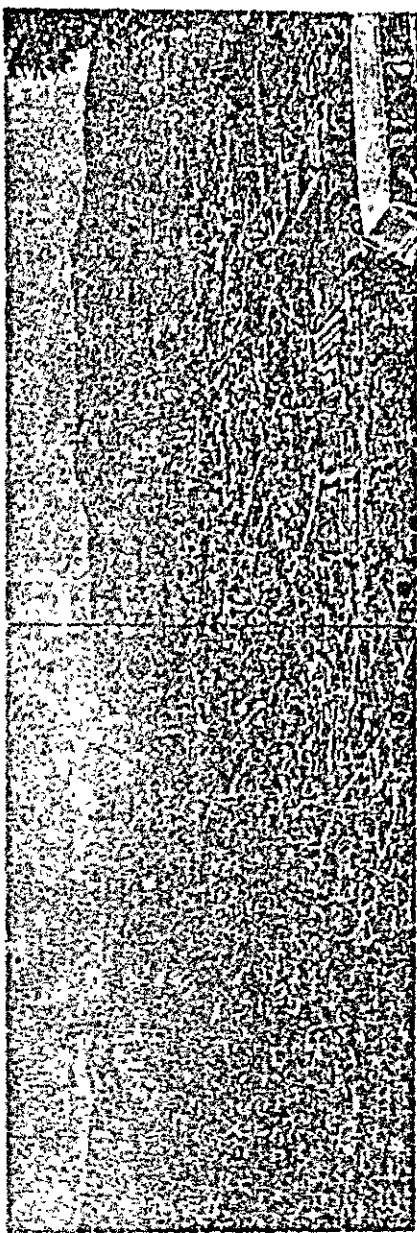
というわけで、翌25日の朝は起き上がれなかった。ものすごい二日酔いが全身を展っていたからだ。息子のフリオが呼ぶので、やっと上半身を起こすと、なんとウイスキーのビンを持っていて、なみなみとついでコップを差し出す。「マサル、二日酔いだろう。むかえ酒にはいいよ、これ」。グアテマラでもむかえ酒なんていう習慣があるのかと思いながら、ちょっとノドに流し込むと、もういけない。またベッドに倒れ、結局昼までベッドから離れられなかった。それにしても、このフリオという男、ウワバミではないのか。以前、彼に連れられてケサルテナンゴを飲み歩いた時も、とてもかなわなかった。何でもリミットはウイスキーボトル3本という。あの

小柄な身体はどこに入るのか全く不思議だ。結局、その日は二日酔いに苦しみ、ケサルテナンゴを離れることができなかった。しかしフリオがいうには、「きょう(25日)バスに乗ったり、不用意に大通りを歩くのは危険だ」そうだ。何しろグデングデンに酔っぱらった輩が、ハンドルを握っているため、どんな災難にあうかわかったものではない。命が惜しげりゃ、きょうは、こりして家で酒を飲んでいるのが最も安全とか。いやはや。

このケサルテナンゴは別名『Xelajú (シエラフー)』と土地の人に呼ばれる。バスの行き先にもケサルテナンゴ行きは Xela と書かれている。これはキチエ語で『10のアイデア』という意味だそうだ。この町には公衆浴場 (Baño caliente) があるというので、仲間とタオルを肩に(ゲタをはいて、というわけにはいかなかったが……) 行ってみた。そこは18のコンパートメントになっており、家族あるいは4～5人のグループ単位で入れる。もちろん“相部屋”(混浴ではない、念のため)もあり、個人でも入浴できる。値段は1人あたり75セント内外である。ここで我々4名は実に久しぶりに熱湯を充分たたえた浴槽に深々と全身を沈めた。つまり日本式の入浴ができたのである。思わず鼻歌のひとつやふたつとび出すぐらいはお許し願うことにして……。そういえば、ホンデュラスではシャワーか、川や沼での水浴しかできなかった。

そして風呂あがりのビールを堪能したのち、下宿先への帰り道、ふと見上げると頭の上に満月がかかっていた。町は一带に霧につつまれ、月のまわりだけが晴れてよく見える。夜の町は、月の光を浴びて、冷え冷えと静まりかえていた。私は、このグアテマラの若い人たちの間で人気のある歌のひとつを、ふと思い出した。Luna de Xelajú (シエラフーの月) という題である。

Luna de Xelajú	(シエラフーの月)
Luna gardenia de plata	月よ 銀のくちなしよ
que en mi serenata te vuelves canción	おまえは私の小夜曲に歌を取り
tú que me viste cantando	戻してくれた 歌を歌っていた
me ves hoy llorando mi desilusion	私を見詰めていたおまえ でも
	今日は 幻滅に泣く私を見なけ
	りゃならない
Calles bañadas de luna	月光に照らされていた道



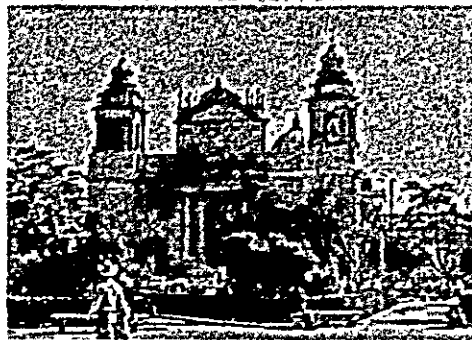
ケサルテナンゴ全原。世のはずれの丘の上からの眺望

que fueron la cuna de mi juventud	それが私の青春の生まれた所だ
quiero cantarle a mi amada	った 我が愛しき人 あなたに
la luna plateada de mi Xelajú	歌ってあげよう 私のシェラフ
Luna de Xelajú	ーの銀の月よ
que supiste alumbrar	シェラフーの月よ お前は灯を
en mis noches de pena por	ともしてくれた 甘い眼をした
una morena de dulce mirar	モレーナのおかげで悩み悲しむ
Luna de Xelajú	私の夜毎に
me diste inspiración	シェラフーの月よ おまえは私
la canción que hoy te canto	に不思議な力（インスピレーシ
regada con llanto de mi corazón	ョン）を与えてくれた だから
	今日はおまえに歌ってあげる
	私の心の涙降りそそぐ歌を

12月26日の早朝、この23日間存続した町をあとに、グアテマラ・シティに向かった。

——グアテマラの貨幣単位はケツアルである。紙幣にもコインにも、尾の長いインコのような緑色の鳥が描かれている。道路の要所にある検問所の壁にも、おまわりさんの紋章にも、この鳥をシンボルとして取り入れている。辞書をひくと、ケツアルは「熱帯アメリカ産の尾長きつつき」とある。では何故、このようなものを国のシンボルとして採用しているのか？ 研修所の私の先生が教えてくれた……。

「この鳥は、絶対に小屋の中で飼うことができません。すぐ死んでしま



グアテマラ・シティ中央公園のわきのカテドラル

うからです。だから伸び伸びと羽ばたくことが、この島にとって生きられる条件なのです……。グアテマラも、この島のように自由な国家でありたいのです」。だが果して現実は……。

2. 業務活動報告

1. 活動経過

- 11/4～6 雨降り続き、下宿で資料整理。
- 11/7 降雨, FRP ボート回航に備えて船外機の整備。隊員用ランドクルーザ運転者心得作成。
- 11/8 降雨, 第3号報告書完了。
- 11/9 FRP ボート回航のため朝9時ラ・セイバをボートで出発。午後1時すぎ、沖合のカコス・コチノス島に立ち寄ったあと、午後5時半、トルヒーヨ到着。航海距離約100キロ。船外機トラブルなし。
- 11/10 トルヒーヨ湾で試験操業を兼ねてトローリング。
- 11/11 トルヒーヨ湾で底刺し網による試験操業。
- 11/12 早朝、空路トルヒーヨからラ・セイバに戻る。そのあと、コバル漁協所有の13馬力ディーゼル修理(噴射ポンプの調整不良)完了。
- 11/13 リモン漁協のディーゼル修理用部品調達のため、ラ・セイバ発、サン・ペドロ・スーラ到着。朝から終日降雨。
- 11/14 午前中、部品調達。バスにてラ・セイバに戻る途中、大雨による山崩れや洪水のため交通止め、サン・ペドロ・スーラへ再度戻る。ラ・セイバへの道路の復旧の見込み全くたらず、15日午後、テグシガルバに戻る。
- 11/16 協力隊員募集要請書作成のため、調整員に同行し、テグシガルバの工業学校視察。溶接と鋳造技術者を各1名ずつ希望していた。
- 11/19 テグシガルバから空路ラ・セイバへ移動。
- 11/20～21 リモン漁協のディーゼル修理, 未了。
- 11/23 ラ・セイバ発, 空路テグシガルバへ移動。
- 11/25～26 船外機技術テキスト作成, 29日完成(全118ページ)。
- 11/27 テグシガルバ発, アマバラ着, 午後, 組合助成局アマバラ事務所です務所所有の船外機(ジョンソン25馬力)の取り扱い講習会。

- 11/28 アマバラ漁協訪問。漁協所有の船外機の調整後、テグシガルバへ戻る。
- 11/30～1/6 グアテマラ語学研修及びメキシコ旅行（詳しくは第4号報告書参照）。
- 1/6 新年会（於：在ホンデュラス日本大使公邸）。
- 1/7 1月定例漁業会議（於：協力隊事務所）。
- 1/10 グアテマラ研修レポート（第4号報告書）提出。
- 1/12 テグシガルバ発、ラ・セイバへ車にて移動。
- 1/14 スニパ・アルメニア漁協の船外機修理（海中落下によるコンタクト・ブレーカの汚損）、完了後、試運転結果良好。
- 1/15 リモン漁協のディーゼル船内機修理、翌日昼に完了。試運転結果良好。
- 1/16 サンボ・クリーク漁協の船外機修理（冷却水ポンプ破損、カーボン堆積、点火時期調整）、翌日完了。
- 1/18 ラ・セイバ発、定期健康診断のため空路テグシガルバへ移動。
- 1/19 新年度第1回隊員総会（於：協力隊事務所）。
- 1/21 定期健康診断。診断結果異常なし。
- 1/22～25 事前調査団来訪のための打ち合せ、準備。
- 1/26 ホンデュラス政府要請による国際協力事業団の漁業事前調査団一行5名、テグシガルバ到着。協力隊漁業関係隊員9名は2月13日まで一行に同行してフルアテンド。
- 1/27 調査団との顔合せ及び日程、調査項目など打ち合せ（於：協力隊事務所）。
- 1/28 調査団一行とともに午前中、日本大使館、経済企画庁、天然資源更生総局を表敬訪問。午後、更生総局で実務打ち合せ。
- 1/29 調査団とともにテグシガルバ発、アマバラ到着。漁村及び周辺海域をボートにて視察した後、宿泊地 Choltecaへ調査団を送る。夜、テグシガルバに戻る。
- 1/30 テグシガルバ発、ラ・セイバ着。ラ・セイバ空港で調査団出迎え。ラ・セイバに案内。
- 1/31 ラ・セイバの天然資源更生総局セイバ支局兼海洋試験場、市内のマーケット、ニビ商人、付近の漁村を案内。

-
- 2/1 ラ・セイバ発，トルヒーヨ着。
- 2/2 午前中，トルヒーヨ空港にて調査団を出迎える。午後，郊外にあるエビ加工輸出会社の施設及びエビトロール漁船を視察。
- 2/3 午前中，グアダルベ漁協へ赴き，隊員所有 FRP ボートをトルヒーヨへ回航。午後，気水湖のグアイモレート湖を湖上から視察。グアダルベ漁協所有の船外機が故障しており，ラ・セイバに持ち帰る。
- 2/4 未明トルヒーヨ発。ラ・セイバに赴き，空港で調査団を出迎える。午後陸路テラ着，周辺の漁協視察。
- 2/5 テラ発，プエルトコルテス着。午後，周辺の漁村，漁協，そしてコルテス港の港湾施設を視察後，サン・ペドロ・スーラへ戻る。
- 2/6 調査団一行コパン 遺跡観光のためサン・ペドロ・スーラで資料整理。夜，調査団との夕食会。
- 2/7 サン・ペドロ・スーラ市内の 船外機ディーゼル代理店，マーケット，釣具店などを案内。午後，サン・ペドロ・スーラ空港へ調査団を送ったあと，陸路テグシガルバへ戻る。
- 2/8 調査団とともに現地機関と打ち合せ（於：更生総局オフィス）。兼田日本大使と高野一等書記官の協力隊主催歓迎会（7：30PM 於：協力隊事務所）。
- 2/9～10 調査団用資料の翻訳作業。調査団がホンデュラス政府に提出する中間レポートの翻訳作業。
- 2/12 調査団，ホンデュラス政府へ中間レポート提出。
- 2/13 調査団一行帰国。
- 2/16 第2回隊員総会（2：00PM 於：協力隊事務所）。吉田隊員の結婚式参列。そのあと結婚祝賀パーティ兼新隊員歓迎会（9：00 PM 於：協力隊事務所）。
- 2/18 テグシガルバ発，ラ・セイバ着。16日に協力隊活動取材のため来ホしたサンデー毎日の築達氏をラ・セイバに案内。
- 2/19 築達氏の取材協力のため，ジョン・F・ケネディ農業学校，海洋試験場，そしてサンボ・クリーク村を訪れる。そのあと，セイバ空港へ築達氏を送る。
- 2/20 グアテマラ報告書（スペイン語版）を更生総局へ提出。午後，サ

- ンボ・クリーク漁協の水没した船外機の修理開始、翌日完了。
- 2/22 サンボ・クリーク漁協へ修理完了した船外機引き渡し、試運転結果良好。午後、ラ・セイバ発、テラ着。調整員とコンタクトとる。
- 2/23 アメリカ平和部隊の看護・衛生分科会の会合に招かれ、調整員とともに1時間におたり協力隊活動について説明を行なう（於：ホテル・テラ）。そのあと陸路コマヤグアへ移動。中村次義隊員の結婚披露パーティに列席。
- 2/24 コマヤグア発、ラ・セイバに戻る。
- 2/25 サンボ・クリーク漁協の旧型船外機修理（シリンダ・ヘッド摩耗冷却水ポンプ破損）。部品調達の要あり、3月8日朝、修理完了。
- 2/26 グアダルベ漁協の船外機修理（点火プラグ穴破損）一応完了。3月12日に試運転してから引き渡す。試運転結果良好。
- 2/28 予備の船外機ローユニットのベアリング・シール交換。午後、隊員用のランドクルーザー再び故障との連絡を受ける。同じくバハ・マール漁協の船外機水没。
- 2/29 ラ・セイバ発、サン・ベドロ・スーラ着。
- 3/1 故障現場でランド・クルーザー修理（デファレンシャル・ギア破損）。翌日、何とか自走させてサン・ベドロ・スーラに運ぶ。
- 3/3 サン・ベドロ・スーラ発、テグシガルバ着。
- 3/4 バハ・マール漁協の船外機修理（点火系統調整、ローユニットのオイルシールカバー破損）。部品がないため未了。
- 3/5 天然資源再生総局オフィスに赴き、日本から購送された漁具資材を引き取る。同時に塩干魚を持参して販売する。本日、28回目の誕生日。
- 3/7 テグシガルバ発、ラ・セイバ着。
- 3/8 スエバ・アルメニアに赴き、サン・エステバン漁協の船内機（12馬力ディーゼル）を修理（燃料噴射パイプ漏れ、冷却水ポンプ作動不良）。完了後、ラ・セイバに戻る。なお、スエバ・アルメニアに行く途中、修理したサンボ・クリーク漁協の旧型船外機を引き渡す。
- 3/9 ラ・セイバ発、バハ・マールに赴き、修理した船外機引き渡し。試運転結果良好。その後、サン・ベドロ・スーラに行く。
- 3/10 サン・ベドロ・スーラ発、テラでサン・ファン漁協の故障船外機

-
- を引き取り、ラ・セイバに戻る。
- 3/11 サン・ファン漁協の船外機分解掃除。3月13日完了。
- 3/12 夕方、サン・エテスパン漁協の組合員来訪し、再び冷却水が止まったというので運転取り扱い手順を指示したメモを渡す。
- 3/13 グアダルベ漁協に貸しておいた隊員用船外機が3月8日に水没。組合員が応急措置を怠ったためクランクケース内発錆したものを引き取り、修理、完了。
- 3/14 サンボ・クリーク漁協へ赴き、漁協所有の2台の船外機再整備。運転不調の原因は点火プラグの不良。
- 3/17 午前中、サンボ・クリーク漁協へ赴き、塩干魚を積み、ラ・セイバの市場で販売。1ポンド3レンビーラで80ポンド売れた。午後ラ・セイバ発、テラ着。
- 3/18 テラ発、サン・ペドロ・スーラで塩干魚の相場価格調査後、サン・ペドロ・スーラ発、テグシガルバ着。
- 3/19 技術資料作成。
- 3/20 天然資源再生総局オフィスへ再度塩干魚を持参して販売。1ポンド4レンビーラで18ポンド売った。
- 3/21 テグシガルバ発、サン・ペドロ・スーラ経由テラ着。
- 3/22 テラ発、ラ・セイバ着。
- 3/24 ラ・セイバで資材調達。
- 3/25～26 中間報告書作成。
- 3/29 ラ・セイバ発、バスでトルヒーヨ着。
- 3/31 午前中、通船でグアダルベ漁協へ赴く。貸しておいた隊員用FRPボートを引き取り、トルヒーヨに戻る。グアダルベ漁協の船外機不調（4サイクルオイル使用のため燃焼室内にカーボン堆積）。午後2時、トルヒーヨ発、ボートでラ・セイバ午後7時着。
- 4/1 セマナ・サンタ休暇の旅行準備。
- 4/2～5 カヨス・コチーノス諸島で休暇を過ごす。
- 4/5 未明、カヨス・コチーノス島出発。ボートでラ・セイバに戻る。午後、ラ・セイバ発テグシガルバ着。
2. 1年をふりかえて
早いもので、もう“任期”というマラソンコースの折り返し点を迎え

てしまった。過去1年間、主として漁業協同組合の船外機、ディーゼルの整備、修理に追われ、ホンデュラス各地を飛び歩いた毎日である。移動した距離は2万キロを越えた。この1年間の活動の“成果”を列挙すれば、

- ① ホンデュラスの20単協すべての組合員とコンタクトをとり、各組合所有のエンジンの状況を把握することができた。
- ② 修理を手がけた船外機台数
 - (i) 各組合別のべ台数=Sambo Creek 6, Paraiso 4, Copal 2, San Lorenzo 1, Amapala 1, San Juan 1, Triunfo 1, Guadalupe 1, Baja Mar 1, Nueva Armenia 1. その他8 (隊員用4, オフィス用4)
 - (ii) 故障原因別台数=水没によるもの7, 燃料系統6, 点火系統6, 冷却系統4, 始動装置2, 老朽化2。
 - (iii) 機種別台数=ヤマハ12馬力ケロシンモデル22, ジョンソン35馬力1, ジョンソン25馬力1, ジョンソン4馬力1, マーキュリー40馬力1, ホンダ4サイクル6馬力1。
- ③ 修理を手がけたディーゼル台数
Limón (ヤンマー7馬力) 1, Copal (HATS 13馬力) 1, San Estevan (ヤンマー12馬力)。
- ④ 船外機を新たに導入した組合
Baja Mar, Masca, Lempira, Copal, Guadalupe, Amapala, Sambo Creek, Nueva Armenia. その他(隊員用2)計10台。
- ⑤ 漁業講習会で技術講習2回(於: Baja Mar, Limón)
- ⑥ 西文技術テキスト作成
船外機技術講習用, 全7巻118ページ, 船外機取り扱い基礎16ページ, マリンディーゼル機関取り扱い基礎18ページ。
- ⑦ 西文レポート作成
「ホンデュラス国の漁業協同組合巡回視察」, 「グアテマラにおける漁業プロジェクト」, 天然資源再生総局提出の月例報告書。
- ⑧ 漁民新聞「PEGAPEGA」への投稿
だいたい以上の通りであるが、問題点は多く残されたままである。首尾よくいった点はともかく、ここでは私の感じている“壁”について

述べてみたい。

まず、私の主要な任務であるところの、漁協組合員に機関修理技術を教えるという点では、皆無に等しいほど成果はあがっていない。例えば San Juan, Tornabé, Trujillo, Baja Mar, Masca などの組合では、以前から機関を使用してきたおり、取り扱いの知識をいくらか知っている人間がいるので、少しはマンなのだが Sambo Creek, Copal, Guadalupe, Amapala, Triunfo などの組合員は、全く新しく機関に接する連中なので、全然といってよいほど取り扱い方を知らない。実際の船外機を前にいくらか丁寧に説明しても、さっぱり要領を飲みこんでもらえない。当人たちは、それでも全くノンビリムードで、壊れたらそれまでである。「今は便利な日本人の修理屋がいるので、タダで、いつの間にか直してくれるから都合がよい」と思っているようだ。

これは私の所属する天然資源更生総局でも、同じである。今まで天然資源省所有の4台の船外機を修理したが、とにかく部品を買わずに直さねばならなかった。1度修理に必要な工具(アーレンキー)を購入して、その代金を請求したが、その後、全くナンのつぶてで、結局、うやむやにされてしまった。爾来、天然資源省から修理を依頼されても、故障の内容と不足部品の調達方法、修理費用の見積りを提出するだけになっている。

とにかく数百キロの海岸線に点在する漁協を定期的に巡回して、きめ細かく機関の取り扱い指導を行なうことは容易ではない。その理由は、漁業隊員用のランドクルーザー2台を7名で共有しているため、私が専用することは、緊急時以外は難しいからである。だから、漁村巡りには、他の隊員が用事のある時に便乗する形になる。赴任当時は積極的な巡回指導により定期点検サービスをしてまわろうと考えていたが、現在では、外務省の“火消し外交”ではないが、トラブル発生時に漁村へ赴き、船外機のチェックをして、必要に応じてラ・セイバの海洋試験場兼オフィスに持ってきて、そこで重整備をほどこすことにしている。そして修理後、再トラブル防止のためのコメントとともに漁協へ引き渡すといった方法をとっているが、それでも非常に忙しい。そのため、各地にいる同僚の漁業隊員に、担当している各々の漁協所有の機関の調子を訊いて、簡単な調整であれば、代わりにやってもらっているケースもある。

漁民への技術移入がうまくいかない理由は、次の通りであると考え
る。

- ① 漁民の教育レベルが低く、満身に足し算もできない程度であり、エンジンの作動原理を教えても理解させることは極めて難しい。
- ② 漁民の向上心が期待できない。むずかる子供に、いくら甘菓子を与えても見向きもされないのと同じで、打つ手がない。したがって有望なカウンターパートが見つからない。
- ③ 教育用の船外機がない。同僚の隊員らが日本から購送してもらった船外機12台は、すべて漁協や隊員活動用に供されてしまい、予備機がひとつもない（しかし、4月29日、プエルト・コルテス港到着予定のヤマハより寄贈された20セットの旧式船外機で、今後は予備機が確保できよう）。

専用のワークショップがないのも不便である。最近まで、海洋試験場の廊下で、机1つと、椅子1つで船外機修理をやっていたが、海洋試験場の管理がズサンで、せっかく協力隊の費用で購入してもらった工具類の相当数を紛失してしまった。工具箱を試験場におく場合、試験場の職員や同僚隊員の個人使用の便宜を図って鍵をかけずにおいた。しかし使用後の整理、整頓を口頭でよく頼んだだけでは、彼らに注意を守ってもらえず、不幸なことに紛失する工具があとをたたないの、今では私の下宿に作業場を移している。紛失した工具類を協力隊費用で補充することは目下ひかえている（メキシコ旅行に行った際、ヤマハ発動機のメキシコ代理店で必要工具をどっさり譲ってもらったので、新しく購入する必要はなくなった）。

私は他の漁業隊員とともに、ホンデュラスの漁業振興にたずさわっているわけであるが、次のような事例を経験することで、“はたして彼らにとって近代化とは何か？”を考え直したくなった。これは Sambo Creek 漁協で実際にあったことである。

彼ら組合員は、以前はカナレーテ（楫）をあやつって、カユーコ（丸木舟）を何時間も漕ぐことをいとわなかった。そこへ協力隊員がやってきて援助してくれるという。そして、ついに船外機が入った。船外機とは全く便利なものである。それまで3時間も4時間も、炎天下、汗を流して手で漕いで渡っていた神台の島まで、わずか1時間で行けるように

なった。日本人のメカニコ（メカニック）がいろいろと取り扱い方を教えてくれた。どうなっているのかよく判らないが、とにかく燃料を入れてまわせばエンジンがかかり、スロットルとかいうものをひねるとスピードが出る。1人だけカヌーコのうしろの方でエンジンの操縦をしていけば、他の人間はカヌーコの底にすわって、ただ水平線や陸地を眺めていけばよい。海の風が頬にあたり実に快適な航海になった……と。これまではまだよいのだが、次第に点火プラグが消耗してきて、燃料タンクの掃除をさぼってゴミやホコリが中にたまってくると、やがてエンジンのかかりが悪くなったり、ぼつぼつトラブルが起きる。燃料はあるのにエンジンがかからなくなった。どうしたのだろう。しかし船外機が動かないのなら、あの遠い島までカナレーテで行くなんて、もうゴメンだ。あの日本人のメカニコに一応話してみよう。タダで直してくれるだろう。とにかく、エンジンは動いているうちは好きだが、動かなくなったらきらいだ。それより、きょうの午後はトランプでもしていよう……ということになる。

もう1つ似たような例を……。 「いや、実に船外機というのは便利なもんだ。きょうも、おかげで遠くまで漁に行けて、漁獲もあった。また、あしたも旗酎を飲めるな……」。そして浜辺で村のおかみさん連中に魚を売って、さて皆で売上を配分することになった。まず組合へ半分を入れて、それから船外機の燃料代を差し引くと、ほとんど金が残らない。

「それじゃまず売上から燃料代と弁当代を差し引いて、組合に納めるのは50%と決まっているけど、そんなに売上がないから20%に組合費を減らしてしまおう。そうすると1人500円くらい残るかな。女房がうるさいが、これで一杯飲もうか……」といったあんばいである。さらにひどくなると、せっかくの船外機を倉庫に眠らせておいて、村の近くの海域へ再び楫で漕ぎ出して漁に行くという光景も見られるようになる。組合には、いつになっても金がたまらず、新しい漁具資材の購入などおぼつかない。

エピソードはまだいくらでもある。なにしろ何も知らないのだから、当人たちは真剣でも、こちらにとっては笑い話のようなこともある。

……ある暑い昼下がり、下宿で昼食後、簡易ベッドでひっくり返って日本から送られてきた技術誌に目を通していると、Copal 組合の組合長が

天然資源省のプロモートル（漁業指導普及員）と一緒に部屋にやってきた。何事かと思って事情を訊くと、実は最近、大枚80万円を投じて、それまで砂浜に放置してあった木造の2トンくらいの漁船を修理して、ディーゼルエンジンを積んで試運転をしてみたという。エンジンを始動させたところが（クラッチがないので、そのまますぐ前進するはずだった）、なんと後ろに進むので一同ビックリ。どうしてなんだか教えてくれ、とのこと。私がエンジンとプロペラはどこで手に入れた、と尋ねると、プロペラは以前に使っていたのが組合長の家の片隅にころがっていたので、それを取り付け、エンジンは農業用のやつを転用したという。プロペラを持ってこさせたら、案の定、エンジンの回転方向とプロペラの羽根の向きが反対であった。

はたして近代化とは何か。グアテマラの漁業プロジェクトの進展状況をレポートした時も思ったが、このホンデユラスでも、4億円あればグアテマラに負けない立派な政府ベースのプロジェクトを成功させることは不可能ではない。もちろん、そのためには人的フォローによるオンブにダッコが当面3～4年間は、プロジェクトが軌道にのって1人歩きできるまで、必要であろう。プロジェクトの大義名分は、雇用機会の拡大、食糧自給体制の確立、産業発展の引き金、輸出増大、外貨獲得の期待などであろう。しかし、こういう大規模な計画は、零細漁民そのものの生活レベル向上にはあまり結びつきをもたない。思うに最近の燃料費の高騰、魚価の低迷で、一向に漁協には資力が貯えられないことから、今後、船の動力化を推進させるにあたっては十分な考慮が必要である。

残る1年の任期を展望するに、恐らく、これらの“壁”を全部クリアするのは不可能である。少なくとも今までと同じことをやっていたのではだめだろう。あるいは、今までと同じ手持ちの駒をどのように使えば、この壁にうまくアプローチできるか、今はそれを考えた方が利口であるかもしれない。以下に今後の方針を記す。根本方針は、とにかく“金をかけないでやること”をしたい。

- ① すでに導入している船外機や船内機の稼働率を維持していくために、従来通り、故障が発生したら現地へ赴く。今後は、可能な限り現地の組合員の前で重整備を行なうようにする。そのため、すぐ要請に応じられるように、専用の修理セット（工具、テスター、予備部品）

をいつも揃えておく。これは同僚の隊員といえども無断では使えないことにする。

- ② カヌーコにアウトリガー装備を推しすすめる。これは赴任当初から考えていたが、日常業務に追われて、ついで試みることができなかった。現在の計画では、まず一番船外機の水没事故の多い Sambo Creek 漁協で、組合所有の2隻の6メートルクラスのカヌーコのひとつにアウトリガーを取り付けて安定性能試験をするつもりである。アウトリガーは、ラ・セイバ近郊に群生している竹を利用し、フローターと支持棒を製作する予定である。これを取り付けることにより、安定性が増し、少なくとも、現在のような、まるでサーカスのように乗組員にバランスをとることを強いるカヌーコに比べれば、カヌーコ転覆による船外機水没事故は激減するに違いない。他の同僚隊員の話によると、組員はアウトリガーを好まないはずだが、アウトリガー取り付けによる網の繰り出しと網揚げ作業の不便さに比べれば、船の安定度を増して、楽に操業し、船外機保守にも役立つメリットを採った方が、はるかによいことは明らかである。
 - ③ カヌーコの安定性を増したところでいざれば、できれば帆走試験も試みてみたい。当地は、ほぼ年中、北東貿易風が吹くので、北海岸（カリブ海側）では沖合いに出漁する際は船外機を使い、帰路、風力を利用して燃費節減に役立つであろう。
 - ④ テキスト作成に邁進する。とりあえず近く購送される3.5トン漁業調査船に備えるべく、ディーゼルエンジンの取り扱い説明について詳しい内容のテキストを作成するつもりである。また将来に備え、各種の船舶機関、海運システムに関するインフォメーションを残そうと思っている。
 - ⑤ 雑用具の製作。とくに秤は市販のものは高価な上、錆で狂い易く、普及に向かないため、もっと安い素材を使って天ビン秤（サオ秤）を試作し、できがよかったら、組合に配布したい。木製巻揚げウインチも手がけたいが、はたして、そこまで暇があるかどうか判らない。
- 以上、とにかく、あまり欲張らず、あせらず、我ら1年をじっくりとやっていくつもりである。とにかく結果はどうなろうと、あと1年たったらホンデュラスを離れなければならない。うまくいかなくて、もとも

とである。

3. 任期についての連絡

私の後任隊員（船舶機関）派遣は、下記の理由により、必要度が少ないと考える。

- ① 主としてヤマハ発動機製の12馬力ケロシン船外機（ENDURO 15AK）を整備、修理する仕事であり、これらは普通の漁業隊員が、1週間程度の整備実習、理論学習を行なえば充分こなせるものである。今後派遣される漁業交替隊員にヤマハでのトレーニングを課せば事足りる。私自身、協力隊に参加するまでは船外機に触れたこともなかった。なお、船外機の他にも小型のマリンディーゼル（主としてヤンマー、LISTER 製）が使われているが、これの整備もヤマハでディーゼルエンジンの技術研修を行なえば充分である。したがって、正味1週間の船外機、1週間のディーゼル研修を行なえば、普通の水産大水産高校専攻科卒の隊員であれば十分に業務活動し得る能力、理解力を身につけられるはずである。
- ② 船舶機関関係に必要な教育用資料、各種機関整備・修理のためのマニュアル類などは、任期中にほとんど不足のないよう揃えておく予定である。また、各種工具、テスター、ケロシン船外機用予備部品はすでに完備しており、もし必要な場合の手配方法も確立していて問題はない。LISTER ディーゼルの場合、故障箇所のアドバイスをすればラ・セイバの代理店のワークショップで重整備可能。ヤンマーディーゼルについてはSVEとYSMの両機種しか使用されておらず、マニュアル、部品リストは揃っており、やはり重整備はサン・ペドロ・スーラの代理店のワークショップでやれる。ヤンマーの代理店はヤマハ船外機も扱っており、協力隊とは関係が深く、トラブルが起きた際は協力してくれる。
- ③ 漁業調査船も、メーカー指示による点検・整備を実行していれば、自動車と同様、そう簡単に故障するものではない。この調査船の主機はヤマハ製であり、ヤマハでの技術研修の際、整備実習もできる。私としても、できるだけ多くの技術資料を揃え、心配のないようにしておくつもりだ。

4. 業務活動報告

① 日本政府 JICA 派遣のホンデュラス漁業事前調査団来訪

1月26日から2月13日まで19日間にわたって、かねてからの懸案だった当国漁業事前調査のためのミッション、一行5名が JICA から派遣された（なお、時を同じくして林業調査団5名も派遣された）。我々漁業関係の隊員は、事前調査団がホンデュラスに滞在中、またとない機会であったので、今後の活動の参考にならうかと思い、一行に同行した。ここでその経緯を述べてみたい。

JICA による各国政府要請に基く水産資源調査の要請から実施に至るまでのステップを図示すると添付①のようなフローチャート（割愛）となる。今回の事前調査団の目的は1月27日にテクンガルバの協力隊事務所において行なわれた事前調査団と漁業関係隊員との顔合わせ及び打ち合せの際、次のように明らかにされた。

- (1) 海洋に生息する有用魚貝類の分布状況調査。
- (2) 沿岸水域の水産資源開発の可能性（これには漁法技術の開発、近代化を含む）をさぐるために陸上調査を行なうこと。
- (3) その調査報告書を JICA に提出して、今後の詳しい調査の良否を決める。

というものであった。あまりに漠然としているので、我々漁業関係隊員の一番関心の強い点について質問、確認を得た。すなわち、

- (4) ホンデュラス国に対して、その国策の重点施策として沿岸漁業振興策の位置づけを行なう。

調査団から追加された留意事項としては、

- (5) なるべく、この事前調査で相手国に期待を抱かせないような配慮をしなければならない。JICA 予算、今後の相手国との好関係保持の政策に鑑みて、実行される可能性が濃厚な内容の音写真であることが、調査結果のまとめの骨子とならねばならないこと。

今回の事前調査終了後の中間レポートは、ホンデュラス政府に提出していくのか、との質問に対して調査団は、

- (6) 中間レポートについては、当初考えていなかったが、必要性があると思うので、帰国前に作成して提出することを表明した。そのあと、ホンデュラス政府に対する事前調査に必要な統計資料項目のチェックを行ない、この中で協力隊員ができる限り調べた結果を伝え

るとともに、残りの項目については、ホンデュラス側担当者との会議でホンデュラス側に手配を依頼することになった。最後に調査団の日程について打ち合わせを行ない、当初我々漁業隊員の組んだ日程がハードすぎたり、不必要な場所もあるので、調査地点を絞り、太平洋側のアマバラ、大西洋側のトルヒーヨ、ラ・セイバ、そしてテラ、港湾施設としてはプエルト・コルテス港を視察することになった。

1月28日、日本大使館、経済企画庁、天然資源更生総局へ表敬訪問のあと、午後から実務ベースの会議を行なった。今回の事前調査団員の中でスペイン語を解する者は皆無であったため、斎藤シニア隊員がホンデュラス側、日本側双方のまとめ役となり、各団員には漁業隊員が通訳兼説明役で付き添って、会議がすすめられた。その概略は次の通りである。

- (i) ホンデュラス政府は、今回の派遣要請は、国家開発5ヵ年計画(79~83年)での重点施策のひとつ、漁業振興計画にのっとったものであることを強調した。調査項目は、現在水産資源の枯渇が懸念されている各ラグーンの実状調査、沿岸水域の普通魚、貝類、軟体動物類その他の資源調査、経済水域内での水産資源調査、そして漁業協同組合の実態調査が要請された。
- (ii) これに対し事前調査団は、今回は淡水魚、養殖の専門家がメンバーにいないことや、マトを放るためにも養殖、内水面漁業の調査は除外し、主として北海岸の大西洋側の地域を調査し、南部の太平洋側も調査要望が強いので視察することになった。

以上を双方で確認し合ってから、統計資料については、事前調査団の巡回視察が終了するまでに、ホンデュラス側で揃えられる限り用意しておくことを確認した。

1月29日から現地調査が始まり、調査団一行は南部のアマバラ、北部のラ・セイバ(一部は沖合のイスラ・デ・バイア視察)、トルヒーヨ、テラ、そしてプエルト・コルテスを視察し、最後にサン・ペドロ・スーラの市場調査を行ない、2月7日テグシガルバへ戻った。その間ずっと漁業関係の隊員8名が付き添い、現地案内、宿泊手配、交通手段の確保、通訳その他を行なった。

2月8日、調査団はホンデュラス側担当者との会議をもち、陸上調査

を完了するとともに、その感想や気づいた点について、双方で質疑応答が行なわれた。当然のことながら、今後の本格的調査の可能性と、その方針についてのガイドライン打診がホンデュラス側の主要な関心事であった。調査団側は、今回の報告書により日本政府がどのような判断を下すか現在のところ断言できぬ、と慎重な態度をとりながらも前向きに検討する姿勢で取り組むことを約束した。そして帰国前日の2月12日に、以上のことを確認する意味で、中間レポートを天然資源省に提出することに決まった。また、ホンデュラス側からは漁業政策、漁業統計に関する各種資料が提出された。

2月9日、10日両日にわたって、漁業隊員全員はホンデュラス政府から提出された資料、データ類の西文和訳作業に忙殺された。その翻訳ページ数は150ページを越え、翻訳を終わった資料データはきちんと分類され、ファイル整理されたあと調査団に手渡された。一方、調査団の今回の調査の当地でのしめくりともなるべき中間レポートについては、9日に和文の原稿を受け取り、さっそく西文に翻訳したがその後英文原稿が調査団から出され、西文に若干手を加えてから、英文オリジナル、西文訳という形で、2月12日天然資源省大臣宛に提出され、調査団一行は13日、予定通り無事ホンデュラスを立ち、帰国した。調査団は帰国後、JICA 提出用の総合レポート作成にとりかかり、おそらく半年くらいのにちに完了し、JICA に提出するとともに、同じ内容の西文のレポートをホンデュラス政府に送付することになっている。

中間レポートには、本格的調査のための Scope of work について案を記した書類が添付されているので、おそらく漁業調査船は、早くて明年早々派遣されるかもしれない。ホンデュラス側でも、この調査船に対する予算を来年度分からは拵取りすると表明した。

② アメリカ平和部隊の分科会で協力隊活動について説明

鶴巻調整員の依頼もあり、2月22日夕方、ラ・セイバからテラに赴き、当地で23日朝催されるアメリカ平和部隊の衛生・看護隊員で構成される分科会（一緒に集まって各自で出し合ったテーマにより勉強会、討論会、発表会を行なうとともに、自由時間にはレジャーも楽しみ、隊員同士の親睦を深めるという趣旨の集まり）に調整員とともに

招かれ、出席した。この席で協力隊活動について説明を行ない、好評であった。このような機会は、もちろん私にとって初めてであるし、ホンデュラスでも今まで外国のボランティア団体同士が互いの活動について発表するといったケースはなかったようだ。平和部隊の担当者は「今後はヨーロッパなどからきているボランティア・グループ（専門家グループを除く）にも声をかけて、合同会議をもちたい」と抱負を語っていた。

③ 塩干魚販売について

いよいよ4月3日～5日のセマナ・サンタ（聖週間、イースターのこと）が迫り、ここホンデュラスでも2月頃から毎水曜、金曜日には肉食をしないようになり、私の下宿でもその日には卵スープとか、野菜サラダ、フリホレス、米飯、トルティーヤなどの“精進料理”が出るようになった。セマナ・サンタ期間中は、ずっと“肉なし”で過ごすことになっている。そのため、この期間は魚のスープとか魚料理を食することが昔からの風習であり、セマナ・サンタ前になると、保存性のよい塩干魚が市場に出まわるようになる。今年は例年になく塩干魚の製造シーズンに原料の塩が不足し、製造量が例年の数分の1から10分の1くらいになり、需要と供給のバランスが崩れ、極端な売り手市場になり、塩干魚の価格はセマナ・サンタが近づくとつれてウナギ上りとなった。2月の時点でラ・セイバで1ポンド3レンピーラ（約300円）だったが、3月末には4.50～5レンピーラとなり、大消費地のサン・ペドロ・スーラなどでは7～8レンピーラにもなっている（以上いずれも小売価格）。最近では1大生産地である北東部のブルース・ラグーナ地区から飛行機をチャーターして塩干魚を運んでこようという商人も現われたという話を聞いている。

協力隊ではこれを見越して、塩の確保に努め、各漁業組合に割安に配布し、塩干魚製造を奨励したので、かなりの塩干魚を各漁協で貯えた。そして運搬手段のない漁協のために、隊員のランドクルーザーで主な都市の市場にそれらを運んで売りさばく仕事を行なった。仲買人たちとの価格交渉の駆け引き、直接販売、販売時期の読みなど、いろいろな面白い体験であった。大部分の塩干魚は仲買人に対し1ポンド3～3.50レンピーラで売ったが、中には、ずるい商人に騙されて、組合

員が安く売ってしまったケースもある。しかし今年は、かなりの組合の財政状況がちょっぴり好転したのではないかと思う。はたして来年はどうなることやら。一部の塩干魚はテグシガルバの天然資源更生総局オフィスに持ち込み、我々の活動を知らしめることと、安い良質の塩干魚を販売することで、一石二鳥の効果をねらった。

5. 感想

① 政府の海外協力について

今回の日本政府からの事前調査団（漁業）の団員の1人で、メンバーの中の唯一の民間人であるT氏とセイバのホテル・パリで1時間以上にわたり話したが、いろいろ興味深かった。彼の話によれば、JICA のこのような調査団派遣には非常に問題が多いという。

すなわち、こうして、相手国政府の要請に応じて調査団を派遣したとしても、調査団が帰国して報告書を作成し終えたら、それっきりで、後のフォローアップが全くないこと。今まで、フィジーや西アフリカの漁業プロジェクトに参加したが、とにかく調査団さえ送れば一件落着、国連で1票をとるに事足りると考えて、あとのフォローをしたがらない JICA の考え方には大いに疑問があるという。

そのため、今まで手がけてきた日本政府による漁業プロジェクトは、どの国でもうまくいったためしがないともいう。日本政府の得意な胸算用プロジェクトのため、例えばインドネシアに対して（ここにある石油目当て）は、必要もないのに何隻ものカツオ船を無償供与したりしている。そして、せっかく無償（あるいは有償）援助した資材も、フォローされないため、とりわけ人的な援助（例えば修理技術を教える人や、経理・経営のノウハウを教える人）がいないので、全く利用されずに放置されてしまう運命にあるという。これではせっかくの予算が有効に生かされない。JICA のこうした実績偏重主義（海外援助費をどれだけ使ったかということだけが問題で、どれだけ実際に効果が上がっているかということに対してはまったく無頓着）の弊害は、何ともしがたいほど顕著化しているらしい。例えば、こうした調査団を海外に派遣する課、技術専門家を派遣する課、予算を組んでプロジェクトを案出する課は、それぞれ別々に活動しており、ある調査団がどんなにそのプロジェクトの重要性、可能性をうたった報告書を

書いたところで、他の部署とのかかわりあいがかたまりが全く形式化しているため、フォローがなく、例えば資機材を送ってしまうと、日本側ではもうこれで一件落着と安心していても、忘れたころ再度、現地から修理技術を教えてくれる専門家を派遣してくれという要請が出てきて、はじめて派遣課が動き出すという。物（ブツ）だけ送ればよいという当座的な見方しかできない日本の海外援助の悪いクセだと氏はいう。

氏によれば、こういうことはちゃんと最初から考えておくべきで、例えば、海外に出ているメカニックから部品を送ってくれという依頼がきた時は、それが少しぐらい不必要だなと思われるものも、氏の会社ではすぐに送るようにしているという。これは、もし船のエンジンが故障して動かなくなった時、予め部品を備えておけば、すぐに修理可能であり、不稼働によるデメリット、損害額に比べたら部品のストック代など、たかがしれているという考え方によっている。すなわち“ころばぬ先の杖”という考え方をもっと取り入れるべきだという。

また、今回の調査団の目的は漁業資源調査というが、氏は、こういう学術的な資源調査など意味の少ない作業ではないか、と疑問を抱いていた。一行が1月26日にテグシガルバに到着してから、同29日に経企庁、天然資源省でホ政府側との会談があったが、いつも首都テグシガルバの本省にいて、デスクを前に学術書やウソパチの統計表ばかりに目を通して暇つぶしをしている偉いさん（リセッションードといわれ、プライドだけはものすごい）連中のキレイごとや要望を聞いてみると、誰にもその実体なき弁舌がきわだっているように思われてくる。しかし連中は、やたらと資源という言葉の口にはするが、それを有効に利用し、経済的価値を見い出そうということには目を向けず、やれ禁漁期だとか、そのためにはどういう規制措置をとればよいか、というようなことばかり考えている。消極的な策ばかりとっていたのでは、いつになっても進歩は望めぬ。漁業調査などやらなくても、漁業を振興させれば、漁師はどんどんあちこちに魚をとりに出かけ、どこで、何が、どれくらいとれるかをちゃんと知るようになる。その情報を集めれば、1隻の調査船で狭い範囲をしらみつぶしに長時間かけて調べることによって、金と人の両面で予算を食われるより、もっと有効であろう。

リセシールドと呼ばれる人種は、やたらと難しい魚の学名を使うことが好きで、どれくらいたくさんそれを知っているかで能力が決まると思っている。こういう御人が机上プランばかり練っては、いつになっても発展しない。机上のプランで、ものを考えたがるのは役人の習性かもしれないが、日本の海外協力も、もっと泥臭くやらねばいけない。

② JICA 調査団の残していったもの

1980年1月26日から2月13日までの19日間にわたる JICA によるホンデュラス漁業事前調査団がようやく帰国した。私は協力隊参加前に海外関係の仕事をしてきたことがある。省庁、商社関係の国内での根回しや客先提出用のドキュメンテーション関係の仕事をやってきたので、日本政府による海外技術協力がどういふものか、民間人の立場において、かなり詳しいと自負している。東京で2年間経験したところでは、とにかく円クレジットにしるグラント（無償援助）にしる、悪名高きタイド援助がいつもささやかれ、援助相手国からの経済的見返りがないと本腰を入れた援助が行なわれないようである。例えばアフリカのセネガルやオセアニアの西サモアなどは、もろに神台の漁業権目当ての援助だし、メキシコに対しては、ご存知のように、その膨大な石油資源がねらいである。そういう打算的な姿勢をとくに批判するつもりはない。むしろ、そういう目標がないと、外務省はじめ各省は重い腰を上げたがらないのも事実で、商社マンにいわせると、新しいプロジェクトの根回しをしている国の日本大使館の担当者はどう取り入って、うまく有利に円クレの操作を仕向けるかに仕事がかかっているという。外国、例えばヨーロッパ諸国の場合などは、大使館が商社まがいの仕事をするケースも多いという。

それはともかく、以前、某国の河川輸送プロジェクトにたずさわっていた時、日本政府から調査団が出るというので、上司のカバン持ちで、団長のところへ挨拶に行ったことがあるが、運輸省の部長クラスの人の表情に覇気がなかったのが、今になってよく思い起こされる。「えらい貧乏クジを引いてしまった」などと団長自ら思っているとしたら、とうていプロジェクトがうまくいくはずがない。

いろいろ問題があることは知っていたが、まさか協力隊でホンデュ

ラスにきてまで、“業者”時代と同じことを体験しようとは思ってもみなかった。とにかく驚いたのは十分な情報も調べずにやってきたことで、一応協力隊員のレポートには予め目を通したというが、時々、レポートに書いてあることを重ねて質問され、首をかしげたものだ。

いくら我々はボランティアとはいえ、はたして、こういう政府ミッション（同じ身内ではないか、といわれる向きもあるかもしれぬ）にまでボランティア精神を発揮する必要があるのだろうか。斎藤シニア隊員をはじめ我々漁業関係隊員は、彼ら調査団に対して全く至れり尽くせりのことをした。これも、ひょっとしてホンデュラス国の漁業振興に対する我々協力隊員の希望・熱意に少しでも理解を示してくれれば、という一途な願いがそうさせたのである。そのため、土産屋の案内から名所・旧跡案内、車の手配、そして運転手役までかってでた。もちろん調査団の目的達成に協力するため、資料収集にあたっては漁業隊員全員が努力してできる限りかき集め、それでも不足な点や、数字では表わせない現地の状況については口頭で説明もした。スペイン語の資料はすべて翻訳し、現地調査地点の地図までわざわざ面倒臭い手続きをして購入し、それらをきちんとファイルして資料集として各員に手渡した。会議の時もメンバーは全然スペイン語がしゃべれないので我々が通訳した。

調査団は現地調査費（交通費、データ収集費、通訳料、翻訳料など）というものが計上できるはずであり、それに大いに助力した協力隊員に対して、それらが支払われて当然と考える。隊員は報酬を受け取ってはならぬというのであれば、名目は実費あるいは経費としてもよい。ところが、交渉の結果、粘りに粘っても、僅か5万円以下しかナイフのヒモを緩めさせることができなかった。こういう調査団の派遣には金がかかる。戦場にいたころ上司の1人（係長職）が、JICAの外郭機関の日本造船技術センターの委託を受けて調査団に加わり、東南アジアの某国へやはり3週間ほど派遣されたが、60万円の稼ぎだといっていた。おそらく今回の事前調査団の派遣費用は、報告書作成費も含めて、かなり多額の手算を食うに違いない。

調査団は帰国後、報告書を作成するが、私の知っているところではJICAの下請けでやはり某国の造船業振興のための調査報告書をチェ

ックしたことがある。これは和文の報告書を一括して下請けの英語翻訳屋に外注し、そこでは、どこかのアルバイト（専門用語を知らない連中）に翻訳させて、JICAは民間会社にその翻訳文をチェックさせるのである。民間会社には、将来のプロジェクト獲得をねらったの思惑があり、タダでこのチェック作業を行なうが、外注先の翻訳屋に対してJICAの出費する翻訳料は、英訳の場合、A4の紙にタイプでダブルスペースで打ったものが1枚2,000円～2,500円（3年前の相場）であった。表や図解入りで空白が多くても同じ値段である。スペイン語は少し特殊になるので、もっと高く、和文西訳でA4、1枚3,500円、西文和訳でも3,000円くらいだったと記憶する。協力隊員が調査団に行なった西文和訳の資料は150ページにのぼる。A4、1枚1,000円としても、15万円の作業である。これに会議、現地調査、そして私的時間での通訳料、ガイド料としての日当を加算すれば（1日1万円×10日）、25万円くらいは当然の“経費”であろう。

しかし、もう何もいうまい。調査団が我々協力隊員の考えているところを汲んで報告書を作成し、日本政府およびホンデュラス政府に勧告することにより、発展の道が開かれるのであれば、安いものである。

最後にもうひとつ気づいたこと。サラリーマン時代、JICAに電話したり、担当者と面会しに行った時のJICA職員の態度が一様に横柄であったことを同僚と話しあったが、今回も同じことを感じた。このことからJICAにとって協力隊というのは、下部の下請け的組織で、“業者”と同じように見下しているのではないか。なおJICAの中でひとつだけ“業者”に対して丁寧な態度をとるところがある。どこだと思われるだろうか？ それは、研修1課、2課で、ここでは海外からの研修員を民間会社や民間団体に引き受けてもらうことを仕事としている。

③ アメリカ平和部隊の考え方と協力隊

2月23日朝8時から、テラにあるホテル・テラで、アメリカの平和部隊の招きで、1時間にわたって協力隊の活動について説明する機会を与えられ、鶴巻調整員の補佐という形で出席した。

話によれば、現在総勢180名になろうとするこのホンデュラスに

おけるピース・コーの隊員数は、1国に対する派遣数としては世界で2番目に多いという。その中で、彼らはいろいろな分科会 (Taller と呼んでいた。英名は Workshop) を設けており、この日は衛生・看護関係の隊員で組織されている分科会の招きであった。今回の集まりには、ホンデュラス各地から、例えば北東部の僻地ブルース・ラグーナに住む隊員から、南部のサン・ロレンソで活動している隊員まで、30名ほどの看護婦とか衛生配管技術の仕事にたずさわっているものが参加した。したがって女性の姿が目立つ。ピース・コーの180名というメンバーに比べ、協力隊は37名。またホンデュラスにおける歴史は、かたや18年にもなるというが、こちらは僅か5年である。ピース・コーの協力隊に対するイメージは、“恵まれている” というのが多い。例えば彼らは毎月の支給額200ドル(協力隊230ドル)、国内積立150ドル(協力隊300ドルくらい)。さらに協力隊の場合、政府間の取り決めの中で、ホンデュラス政府が毎月50ドルを支給することが明記されているが、ピース・コーの場合、皆無である。

我々はスペイン語と英語版の協力隊活動及び JICA の資料を前に、協力隊、JICA の協力活動内容から説明を始め、ホンデュラスの隊員数、職種、生活ぶりから、協力隊の問題点、今後の方針などについてつぶさに説明した。また保母さんを含む看護・衛生関係の分科会であることを考慮して、これまで各国に派遣された保健、医療関係隊員の実績数など発表した。質疑応答で感じた点は次の通りである。

- (1) あまりにも協力隊のことを知らない。ことに政府間協定で派遣されること、機材援助の道も開かれていることなどで、ピース・コーたちは目を見はっていた。
- (2) 社会的な通念、慣例の相異。例えばピース・コーでは、2年間の任期中に辞める割合がかなり高い(30%ともいわれる。このホンデュラスではとくに多いとか)が、協力隊の場合、このようなケースは皆無に近い。契約型社会というか、よくいえば個を重んじる、悪くいえば味けない、欧米型社会と、一旦、事にあたれば、とにかく任期と任務をいじらしいほどに全うせねばならないと考える浪花節的義理人情型社会の相違点であろう。他の例は、日本帰国後の再就職の困難さについてである。ピース・コーの場合、例えば林業関係

(ここホンデュラスは林業が盛ん)の隊員だと、帰国後、優先的に政府の林業関係機関に入れる特権が与えられるという。この場合、普通の人がかようなところへ試験を受けて入ることは非常に難しいという。しかし一方、ある看護婦隊員の話だが、もし帰国後政府機関に入っても、せいぜいインディアン保護居留区のボランティア関係の仕事につくのがおオチで、ホンデュラスで5年近くもボランティア活動をしてきたので、もうボランティア活動はたくさんだ。帰ったら、どこかの企業に就職したいというドライな考え方の者もいた。また日本の場合、年功序列型社会、終身雇用型社会から一旦はみだしてしまると、そのリカバーはとうてい欧米人にはわからぬほど難しいということ、少しは理解してくれたらしい。国際協力に対する理解がまだまだ浅い日本の風土では、そのしわよせが帰国隊員に大きくかぶさってくるという事実の説明に、ピース・コーたちは一様に同情のまなざしで真剣に聞き入っていた。

- (3) ピース・コーの派遣は、協力隊形式でなく、もっと担当部署ベースで、しかも漠然とした取り決め(確認文書)で行なわれている。もちろんG/G(政府間)ベースでは、例えばホンデュラスの場合故ケネディ大統領と現地政府との派遣取り決めが交わされているが、そこには、ただ漠然と派遣することしか記されていない。身分措置や待遇については、各所属省庁とか、各地域の施設、学校単位で取り決められることが多いという。
- (4) 協力隊の場合、機材支援の道が開かれているというのは、ピース・コーにとって魅力的であるらしく、私と同宿したトーマスという衛生配管の男などは、現在働いているホンデュラス北東部の辺地カタカマスでポンプの調達に困っているが、「協力隊経由で、日本の方から飲料水井戸用の手押しポンプを援助してくれる道はないものか」と真剣に、その方法について聞いてきたほどである。
- (5) こういう分科会を彼らは実にリラックスして開催している。3泊4日のスケジュールで、1日目の夕方開催地に集合して、2日目の午前中は浜辺でレクリエーション。午後は、テラスに集まって自由討論会。夕食後、マラリアとデング熱の講義をスライドを使って説明したあとパーティー。といっても各自酒や飲み物を持ち寄り、歌

を歌いたい者はギターのまわりに集まって歌うもよし、友人とダベリたい者は歌など無視して、硬い話、柔らかい話にかかわらず一生懸命会話に熱中しているし、実にあっさりとしている。思うに、この“個”が強い、すなわちアイデンティティーがあるというのは、決してエゴの強さではない。その証拠に、こうしてちゃんと30名が和気あいあいと集まり、自由なテーマで討論する時は話す方も聞く方も真剣にやりとりしているし、レクリエーションともなれば全員参加でワイワイやっている。かと思うと、もう講義が始まっているにもかかわらず、話しかけの話題について友人とコーヒーを飲みながら悠然と他の場所で時間をつぶしていたり、いろいろなタイプの者がいる。しかも討論といっても、講義者の中には椅子に片足をかけ、まるでちょっとそのへんで立ち話でもするかのようなスタイルで、気軽な雰囲気話で話をすすめているのも面白いと思った。協力隊ではこのようなことはまず不可能に近い。やたらと我をはっては、会議の進行を無闇に妨げたりする輩が多すぎる。すなわち、まだ精神的に1人立ちしていない者が協力隊には多すぎる。普通の常識ある（ここでの常識とは、社会的に通用する最少限度のモラルや考え方や、行動規範のこと）隊員であれば、もっと協力隊活動もスムーズに行なわれ、少なくとも“ヒョッコ協力隊”という陰口はたたかれずにすむと思うのだが……。このあたりの相異も社会的な背景が要因となっていることは間違いあるまい。

我々が持参した資料は、今後ピース・コーのテグシガルバ本部事務所の図書室に置いて、皆の閲覧に供するという。「今後はホンデュラスにきている各国のボランティア・グループとも接触をはかり、近いうちに、それらの全体会議も催したい」と若い大柄の女性の分科会コーディネーターは抱負を語っていた。

それから、びっくりしたのは、もう50歳近い“おばさん”が隊員として参加していたことだった。22日の晩、テラの看護婦隊員の家でピース・コーの連中と飲んだ時も、“おばさん”がしきりに私に話しかけてきた。酔っていたので、何について話したのか忘れてしまったが、とつとつとしたスペイン語で一生懸命話しかけてくるので、つい引き込まれてしまったらしい。年をとってからも、これくらいのバイ

タリティを保持していきたいものである。

④ ホンデュラスの政情不安

きのうの新聞に隣国エル・サルヴァドルでロメロ元首が暗殺されたというニュースが載った。またエル・サルヴァドルのゲリラに対してキューバがホンデュラス・ルートで武器を援助しているということがワシントン発のニュースとして載っていた。さらに最近は、4月20日の総選挙が近づいているため、いろいろと騒々しい。新聞でも、いろいろな職場で賃上げストが繰り返し打たれているのが報じられている。オフィスにいる物識りの現地人にいわせると、現在、山間部の方ではヘリコプターが飛びまわり、ゲリラが潜伏していないか調べているという。「軍隊勤務の友人から聞いた話だが」と前置きして、彼は「今度の土曜日あたりがちょっとやばいかもしれぬ」という（実際は、大した騒動にならずに済んだ）。明日（28日）金曜日には、リベラル党の音頭取りのマルチャ・デ・リベルター（自由の行進）が各地で行なわれる。彼はすでに万が一に備えて自宅に食料を買い込んでおいたという。今のうちに銀行から金はおろしておいた方が賢明とか。フンタ・ミリタル（軍事会議のことで行政の最高機関）では、相づく近隣諸国の政治危機に、その対策会議を開き、同時に4月20日の総選挙の際の秩序維持のために、どういう方策をとるかについて、いよいよあわただしい動きを示し始めた。

確かに最近のこの社会不安は異常だ。なにしろ物価が気遣いのように上昇している、昨年は塩1ポンド8円だったのが、今や45円。生卵1ダース120円であったのが、現在240円。塩干魚については、塩高騰のあおりを受けて、本レポートで既述したように、天井知らずの高騰ぶり。牛肉1ポンド120円が200円。それに反して給料は全くアップされない。オフィスの現地人生物学者で35歳の人の場合、3年前からずっと月給13万円が税いているという。私の下宿の大家のカルロス（農業学校の機械科の先生で、小林収隊長の上司）は26歳であるが、現在11万円の月給がもらえることになっているのに、どうしたことか、昨年11月からずっと給料が支払われていないという。これでもしクーデターでも起こったら、泣き寝入りである。役人でさえこうなのだから、庶民の生活苦はさらにひどい。なまじ給与所得者（といっても実

はニコヨン) であると、余計悲惨である。なにしろ給料は横ばいなのに、物価の方は2倍、3倍となっていく。生産者の方もたまったものではない。漁村で仲買人に1ポンド80円くらいで引きとられる魚が、都市のスーパーマーケットに並ぶ時は180円になるのだから、やりきれない。企業は信じ難いほど安い賃金で労働者を雇い、利潤のほとんどを資本家が1人占めしてしまう。軍隊のお体方などは、こぞってマイアミやニューオリンズに豪邸を構え、有事の時はいつでも、そこへ逃げられる体制になっている。これでは庶民は一層みじめになる。4月20日の選挙は、こういう状況を背景にして行なわれる。いずれにせよ軍隊が介入してくるのは明らかである。前述の生物学者などは「ヒゲをそって、キューバのゲリラと間違えられないようにした」と冗談半分ではあるが、真面目でいっていた。

庶民の一番の関心事は飢えをなくすことである。飢えていると頭が働かなくなり、腹でものを考えるようになる。恐らく明日のマルチャ・デ・リベルターは大変な人出、規模になるだろう。「いずれ2年くらいのうちには、ここもソシアリズム(社会主義)になることは間違いない」とも囁かれている。「空腹に耐えかねた民衆は、いずれ蜂起してゲリラ活動が活発化するのは必至だ」と現地人の知り合いは語った。「その時は俺もゲリラ側になって立ち上がるんだ」ともいった。「貧しい者は教育が受けられない。無知で、いつもツンボさじきにおかれる。しかし空腹は誰しもいやにきまっている。それでダイナミズムが生ずる。さあ立て、ソシアリズム確立のために」とアジテートされれば、当然、そちらに傾くにきまっている。やはりホンデュラスも例外ではないのか。四面楚歌の中で1人安泰を保つことはできないのだ。

協力活動を終えるにあたって

小川 賢

2年近い月日が流れた。サラリーマン稼業からボランティアとして協力活動に参加して、現在に至る期間である。もう2年近くも過ぎたのか、と実感が湧かない。ホンデュラスにきたのがまだ最近のことに思える。何故か生々しい記憶が風化せずにいるためか、それとも一日千秋の如き、テンポの遅い日常生活に没入しきっているためか。いずれにせよ時間は容赦ない。私の協力活動を起承転結にたとえれば、転から結の時期にさしかかっている。

国際化という言葉がマスコミを賑わすようになってから、ずいぶん経つ。まだまだ、その具体化の途上にあるといえる。協力隊に参加してみて、今まで抱いていた国際化の意味がずいぶん変わった。国際化を推進するには、各個人の認識から政府に至るまで、いずれも重要である。協力隊は、その中でもとくにかかわりの強い役割を果たす。自分の力を試したい者にとって、期待に応えてくれる。

今まで日本人は、親戚づき合いを重んじてきた。最近は大都市はもとより町村部でも「隣りは何をする人ぞ」という場合も多いが、国際化の今日、全世界に対して、親戚づき合いをしなければ、資源のない日本はゆきづまってしまう。いわゆる全方位外交の考え方でもある。

日本にいと、このことがよくわからない。一生懸命、勤勉さをもって、より良い暮らしを求めてきたのだから、今の繁栄を享受するのは当然だと考える。その繁栄は、相手あってこそ話である。品物をつくるための原料を売ってくれる国がなければならぬ。国内で消費しきれない分を買ってくれる国がなければならぬ。では、このホンデュラスは日本にとって、どれくらいの経済的重要度があるのか。打算的には、せいぜい国連での賛同の1票を得るくらいしか考えられないのかもしれない。だが、ホンデュラスにとって日本は大国なのである。日本の新聞には、ホンデュラスで政変があったところで、せいぜい外交面の下端に数行くらいしか載らない。ホンデュラスでは日本の大事件はちゃんと取りあげる。もっとも、まだ日本と中国との区別が曖昧である人々が大半であるが、東洋の大国日本に対して、好意のまなざしで、期待しているのは確かだ。

私もそろそろ29歳。自分では若いと思い、いろいろ好きなようにやってき

た。だが、これからはそうもいくまい。これまで培ってきた経験を風化させず、今後に生かしたい。私の人生活動は、そろそろ承から転への過渡期にさしかかっていると思う。

小川隊員の報告書を読んで

横 村 武 宜

文化、経済、風俗・習慣にいたるまでを適確な洞察力と豊かな表現力で報告してくれる小川隊員の活動状況を読んで、まず第1に感じたことは、ホンデラスに対する私の理解が如何に誤りの多いものであったかを認識したことである。

使命感に燃え、思う存分活躍し、それなりの生き甲斐を感じとりながら、機に応じて派遣先での生活をエンジョイしている同隊員の活動ぶりが、できるだけ多くの人に読まれ、この国に対する認識をあらたにするとともに、青年海外協力隊の援助活動が民衆の中に受け込み、いかに多くの人々に喜ばれ、期待されているのかを理解し、「俺も行ってやろう」という若者が1人でも多く協力隊の門を叩くことを望む次第である。

第2に、同隊員が当面の活動方針として取りあげている、次の3点について、具体的な方策と、その成果がどうなっているのかを知ることができたことである。

1. 漁業組合所有のエンジンの稼働率を高め、操業率の向上に貢献すること。
2. 組合員にエンジンの取り扱い知識を普及させること。
3. 改善点を見出し、そこで新しいアイデアが適用できるかどうかを考える。

エンジンの稼働率を高める第1の課題は、故障と修理のイタチごっこで、何とかもちこたえていること。そして、故障の頻度は最近減少しつつあるとのことなどからみて、優秀な“修理工”としての同隊員の努力が報われつつあるように感じとった。そして、頻度の高い交換部品の確保、部品調達ルートの開拓、エンジンメーカーとの技術情報の交換、あるいは同僚隊員を修理工に仕立てるなど、“修理屋”の領域に一步前進しようとしているバイタリティと課題に取り組む姿勢に拍手を贈りたい。

第2の課題についてはどうだろうか。数百軒の海岸線に点在する漁業組合を定期的に巡回し、自作のテキスト類を配布し、エンジン取り扱いの指導・講習を行なうなど、“先生役”としての本来の任務に励んでいる様子がうかがえる。そして、適役であるとみられていた先生役で、“壁”を感じている

ようにみえる。

「実際に船外機を前にして、いくら丁寧に説明しても、さっぱり要領を飲み込んでもらえない。一方、当地人たちはそれでも全くノンビリで、壊れたらそれまで、今はちょうど便利な日本人の修理屋がいるので、いつのまにかタダで直してくれるから都合がよいと思っているようだ」と嘆いている。高度な文化と最新の技術にドブブリと没っている現代の日本人にとって、それが、どうしようもない壁のようにみえるのは当然のことであろう。しかし、日本にもこのような時代があったのである。私の記憶にあるひとつの例をあげてみよう。

トラックの数がひとつの町に数台程度、それも外国産の中古車ばかり。運転できる人の数もその程度。そして、故障の直せる人はきわめてまれな時代である。この時代には、ユーモラスな土産を街路に残してノンビリと走る荷馬車の方が、高いガソリンを使うトラックより安あがり、信頼性も高かったのである。とにかく、トラックは便利だが、当てにはできなかったのである。「エンジンは動いているうちは好きだが、動かなくなったら嫌いだ」という現地の漁民と全く同じとらえ方をしていたのである。こんな時代だからこそ、息の長い青年海外協力隊の活動が必要なのではないだろうか。

いつの間にか直してくれる便利な日本人から、直すのを手伝わせる日本人へ、そして、直すのを教えてくれる日本人へ、と移行する必要がある。漁民への技術移転。それには、長期間を要するであろうし、容易なことではないであろう。幸いにも、小川隊員はこの“壁”にアプローチするための具体的な方策をたて、あせらず、じっくり取り組む決意を示している。困難を克服するのに必要な持続する情熱と思考の弾力性に富んだ同隊員の健闘に期待したい。

最後に、ホンデュラス調整員からの所見の一部を転載し、今後派遣される隊員の範とするとともに、同隊員のたゆまざる努力に敬意を表したい。

「小川隊員の活動現場はホンデュラス南・北両海岸の約700軒の海岸線に点在する漁業組合である。多忙な巡回修理、指導の合い間に、指導書の作成、講習会の計画とその実施、本省との折衝、月例西文報告書の提出、資料の翻訳あるいは発動機メーカーとの間で開発相互協力を定期的に行なうなど配属先での評価は高く、他の隊員からも厚い信頼を得ている。報告書も調査、洞察、表現が的確で、異文化の理解、適応並びに問題解決への方策も示唆に富んでいる。今後派遣される隊員の資料として、充分に活用されることを心から願うものである。」(協力隊技術専門委員)

地方局巡回活動を中心として

第3, 4号報告書(昭和54年9月10日)
(昭和55年1月19日)

派遣国	ホンデュラス	53年1次前期組
職 種	電話交換機	
氏 名	田 淵 昭	
配 属 先	ホンデュラス電信電話公社	

田淵隊員の略歴

氏 名	田 淵 昭
生年月日	昭和23年1月4日
出身 県	島根県
職 種	電話交換機
派遣期間	53年8月～55年8月

I 1年間をかえりみて

1. はじめに

8月18日で、日本出発以来1年が経ったので、前回の報告以後、今まで（6月1日～8月31日）の活動と、過去1年を振り返っての報告をしたいと思う。なお交代隊員の要否については、別途申し述べたいと思う。

2. 6月1日から8月31日までの活動について

① ダンリ局出張（6月14日～7月14日）

6月1日出発予定が、まことにいいかげんな理由をもって6月14日まで延ばされた。首都にいれば、かえって忙しいくらいだから、できることなら地方で仕事ができたら、と思っていた。地方巡回の日程は一応決まっており、これが私の協力活動の中心であるので、「明日〇〇時に出発する」が、また明日、また明日、となると、そのたびに、やりかけた事を中止して準備しなければならない。とても非能率的である。そして私の都合で出発を延ばすと、鬼の首でもとったかのように、すべて、それを理由にしてしまうので、実際、あきれてしまう。「まあ、こんなものだろう」と思いながらも、やはり、1度は頭にこないとおさまらない。

そのうち、突然「14日に出発」となり、なにはともあれ、2番目の地方巡回が始まった。住居はいつもの通り、前もって現地のテクニコ（現場技能者）に見つけておいてもらったわけだが、 Cholteca の場合と同じく、ひどい部屋で300レンピーラ（3万円）の家賃。他人事とはいえ、「よく、こんなのを見つけたものだ」と感心してしまったが、どこでも現地の家族との同居を望むとしかたがないとのことである。当地ではホテルの方が安くつくくらいであった。

ダンリ局 形 式 C23形クロスパー 局舎設置（〇社製）

加入者数 約 350

階 程 E.O., L.O.

テクニコ（現場技能者）2名

試験台作業員 3名

以前から、この局の保全の悪さについては知らされていたが、具体的に

は、何の技術的報告も中央にないので知ることができなかった。到着して1日目に様子がわかった。パンチテープの多発、アラームの多発、保守者のレベルの低さ。ただし、加入者の申告はほとんどみられなかった。これは加入者が接統品質等の悪さに慣れているからだと思われる。

しかし、こういう局ほどファイトが湧いてくるのが“日本製技能ロボット”である。1ヵ月の間に現存する障害修理、いくつかの改善工事、それと保守者の訓練を行なわねばならない。開局以来(5年程度)、いろいろな人が触れた上、保守者は最近までアル中で停職を命じられていた人間であって、最初はなかなか困難を感じさせた。

普通だと実際の障害を利用して関連回路、探索方法等を説明しながら修理するのだが、この保守者はあまりにも知らなさすぎるので、急いで修理を終わらせ、そして彼には最初から訓練をしようと考えた。途中からは訓練時間が不足してきたので、修理とか自分の雑作業には夜と休日をあてることにした。しかし、こういう修理とか改善はなかなかおもしろいので、時間は苦にならなかった。

問題は、当然ながら、対人関係であった。彼は私がきた理由を「停職後の様子を観察にきた」と誤解したらしく、交換機をわかろうとするよりも、ただ私のいうことにならずき、知っているふりを見せることに終始していた。そしてアルコールでやられていたためか、恐ろしく理解しないのであった。これは私のスペイン語が悪いのだと思い、休日に首都へ帰って、他の新人テクニコに同じことをしゃべって確かめてみた。そうすると彼らは理解するので、再びやや自信をもって、いろいろとやってみたが、結局あまり効果はなく失敗に終わってしまった。実に初歩の初歩であったのだが。

地方巡回の目的は次の3点にある。

- (1) 障害修理：現地人では修理できない、また発見されない障害が、かなりある。
 - (2) 訓練：レベルによって再訓練になったり、向上訓練になったりする、いわば職場訓練である。
 - (3) 保全管理：現場における保全の管理方式を確立し、中央で統計的予防保全施策がとれるようにする。
- (1)と(2)はだいたい軌道にのるが、(3)については、目に見える仕事では

ないし、効果もすぐは目に見えないので、全く価値は知られていない。まず正確な記録をつけることから始めるわけだが、これからして、どうもこの国の人間にはあわないようだ。保全管理の記録簿の様式はできるだけ簡単にした。慣れぬことで最初はうまくいかなかったが、最終的にはなんとかあった。ただ、こういう記録をつけるにはかなりの知識が必要で、あまりレベルの高くない局でも、できるように工夫する必要はある。

1ヵ月という短期間ではあったが、HONDUTEL 側の望む障害修理は終了したし、ある程度の訓練もできた。表面的にはまあまあであるが、私の最大の目的である保全管理方式の普及については成果は皆無であり、大いに反省しなければならない。

なお参考ながら、具体的な仕事についてのレポートとして、添付(詞愛)の西語のレポートの要点を手短かに下記に述べる。

障害修理 12件

ANMのサービスイン

訓練

障害テープの分析、統計方法及び試験台受付簿の開始

トラフィック観測

C23用修理カード等の作成・普及

〔ダンリでの生活〕

いつも、「どんな家族と生活するのやら」と楽しみにしてテグンガルバを出発するのであるが、ここダンリの場合は、またちょっと変わっていて、奥さんがチリ人である。あのアジェンデの熱烈なファンで、ラテンアメリカでは先進国のチリでずっと育ったためか、ちょっとした高慢さをともなった、なかなかのインテリ夫人であった。主人はホンデュラス人で、なんとポリカルポ・パス・ガルシア現大統領の夫人の弟なのである。彼もチリの大学で学んだインテリで、義兄の援助を嫌い、多額の借金を背負って、ブルドーザやトラクターを使って請け負い作業をしている。ほんとうに日本人より真面目で、仕事、仕事で、ほとんど家に帰ってこない。そして話し方も静かで、その発想も日本的だ。こういう人もいるのかと、びっくりしたものである。娘が1人いて、小学3年生だが、なかなか利発である。やはり両親のせいだろうと思った。一般的に

ホンデュラス人の小学3年生というのは、日本の5歳児と同じくらいの思考力しかないように思える。もう1人高校生と一緒に住んでいて、彼女は13歳から、こうしてある家庭で家事手伝いをしながら1人で生計をたて、学校へ通っているそうである。それにしても、その不幸を感じさせない。真面目かつユーモアに富んだ生活態度は日本人も見習わねばならない。両親が別れたためだそうだが、こんなケースはざらで、みんなそれぞれ自分の力で生活している。日本人のような甘えたことをいっておれば、すぐ死がやってくるのみである。

やはり、この国でも外国人はなんとなくしっくりいかないようで、特に1度は社会主義を経験したこの奥さんにとって、ホンデュラスの生活が、ばからしくてしょうがないらしいのである。そういうわけで、ひまつぶしの相手が私ということになり、口がだるくなるほど話したものである。

しかし、部屋のひどさと水が朝7時ごろ少しだけ出るという生活には少しイライラさせられた。人が好いということと商売は関係ないようだ。部屋代を300レンピーラ(150ドル)もとる。なお食事は3食ともフリホーレス(豆)、トルティーリャ(とうもろこしのもち)、チーズ、バナナで食事内容の変化のなさにはほとんど参った。それにしても「大統領となにか縁をつくっておけばよかった」とつくづく後悔している。

② ダンリ局の整理、各種文書の作成(7月15日～8月8日)

毎回出張が終わると、成果報告と次回の予定を配属先に提出しているが、これが大いに私を悩ます。西語の勉強にはなるし、保全業務という抽象的なことについての現地語レポートは、おもしろいが、きつい。

今回は急に出張旅費の問題が起こり、1度は協力隊に援助を要請することになりかけたが、その際、総裁の要請書と理由書が必要だということで数回交渉した結果、私がこの地方巡回の目的と意義を書いて、再度、管理部門に請求することになり、その後、かなりスムーズに旅費がおりた。それにしても、この出張は保全部の長が私に命令して始まったという形であるのに、その本人が「旅費が全く無いから中止してくれ」といい、理由を問えば再び「なんとかなる」という始末で、実際自分自身がなさけなくなる。結局、「仲間うちで旅費をうまくしよう」ということだろうとは、友人の、そして私の推測である。ともかく、それやこれや

でかなりの文書を書くことになった。そして第3の地コマヤグアへの出張も、例によって遅れに遅れて、8月9日に到着となった。

③ コマヤグア局出張（8月9日～9月7日）

コマヤグア局 形式：C460形クロスパー 局舎設置（〇社製）

加入者数：約360（4F形式）

附 程：T L S

職 員：保守者 1名、試験 3名

ダンリ局が最悪の部類に入るなら、ここコマヤグア局は最良の状態であると聞かされてやってきた。確かにテクニコはある程度回路を知っているし、毎日きちっと日誌もつけている。さして重要な障害はないようにみえた。そこで、まず全局全数試験を行なうことになり、彼がどのくらい試験方法を知っているか、ひいては各装置のつながりをどの程度わかっているかを試しながら行なうことにした。

しかし私の期待が大きすぎたのか、彼があまり他局のテクニコと変わらないのには失望してしまった。キーとかダイヤルの意味よりも操作方法のみに走ってしまって応用がきかない。こういうことは日本の電電の社員にもあることで、無理がないのかもしれない。彼の場合は、すべてノートに記録するし、私のやることを見ながら、常に自分でやれるように図を書いたりして、なかなか努力している。ただ「こういう人間だからこそ完全に教えておきたい」という野望が起き、少々鼻高になっている彼に日本式の“愛のムチ”という態度で臨むと、やはり関係が気まずくなったりした。しかし、彼がいれば、この局はある程度はやっていけるだろうと思われる。

交換機保守について、基本的な3つの重要な保守管理は加入者からの申告（クレーム）、トラブルレコーダー（自動障害記録機）、アラーム（警報）に対する即時解決であり、保守者は常にこの3つに細心の注意を払わないといけない。しかしながら、加入者からの申告は“親方日の丸”的にしか受け付けられておらず、もちろん記録もない。そして最大の問題はトラブルレコーダーで、これはボタンひとつでその回線だけ停止させておくことができ、ここでは停止していた。こういう状態で「障害はひとつもない」といっているのだから、ちょうど臭いものにふたをして「におわない」といっているのと同じである。これは技術うんぬんの

問題ではなく思想の問題である。広い意味ではこれも技術の一部だろうが。電気通信技術というのは、つまるところ思想の技術だろうと思う。その辺がわかってくれないのだ。細部については、図面がすべてをわからせてくれるから、保守者はもっとレベルの高い知識をもっていないといけない。

この局はあまり障害がなかったし、そしてテクニコの頭もよかったので、かなり程度の高いところまで指導できた。しかし回路の説明とか具体的な仕事については熱心だが、それでは、何故この回路が必要とか、逆に存在していない理由とか、そして保全管理の必要性とかの理論になると、全く興味を示さず、ただフンフンとうなずいているだけである。理論がわからなければできない仕事の例を出してみると、思ったとおりできない。けれども、それで彼は平気なのである。それについて説明を始めると、そのたびに「それは知っていた」という。一口に感覚が違うというだけでは、すまされないものがある。

そのひとつの原因としては、私の立場の問題がある。「どこの国から暇つぶしにきたのだろうか」くらいな認識である。「技術を見せろ」と派遣前訓練ではいわれたが、そんなものなんにもならない。

もうひとつは技術に対する考え方の相違である。例えば日本電電公社のトータルでの障害率は3%内外だそうであるが、米国ではこれを10%程度にして過剰サービスをおさえているようだ。3%という数字は、1人が100回電話すると3回だけ公社施設の障害のためつながらないという意味で使っている。それが、この国では高級技師が「5回に1回つながらるから、いいじゃないか」というわけで、全く根本的に異なる。そして「5回に1回つながらる」というのは加入者話し中を含めての話だから恐れいってしまう。

コマヤグア局での保守管理指導内容

全数試験

障害修理 6件

工法等変更 2件

アナウンスマシン接続関係

訓練 特に翻訳装置と主フレーム、マーカ、保全管理方式の初歩

〔コマヤグアの生活〕

ここは古都であるが、地方都市なので、今の時期はほこりっぼい、概して静かな街である。人間もあまり活気はないが、インテリ風の人が多い感じがした。日本人と奥さんがドミニカ人というカップルが2家族、協力隊員3人、そしてセメント工場建設のためにきている日本人など、この狭いコマヤグアに日本人はかなりいる。ちょうど下宿が同期の隊員のアパートの近くなったため、彼の友人の米国ピースコーのメンバーとも知り合いになった。下宿先は家族構成が変わっていて、家主、その姉、その従姉兄弟の子供と、1家に夫婦とか親子の組み合わせがひとつもないのである。毎日の食事は朝はミルクとパンだけで、昼は米と肉のかけらと野菜とトルティーリャ。肉の味付けはとてもうまいが、ただ毎回の食事の量がとても少なく、いつも腹ペコであった。夜はホンデュラス風定食で、トルティーリャ、フリホーレス（豆）、チーズ、バナナであった。部屋は雨もりがものすごく、ちょうど雨期にあたったので、とても困ったが、電熱器のついたシャワーがあって、それがすべての不満を解消してくれた。人によっていろいろあるだろうが、私にとって風呂（温水で身体が洗える場所）がしっかりさえしていれば、他のたいていのことには耐えられそうだ。

ここは古都特有の閉鎖的な面があり、 Choltecaほど明るさは感じられなかった。それでもマイペースでやっていると、そのうちに親しい友人もできてきて、結局、他と変わりなく平凡な生活だった。つけ加えると、私の滞在中、農業隊員が数本の映画を上映したが、娯楽の少ない現地の人になかなか好評であったし、私にも楽しかった。

3. 1年間の感想

① 技術面

目標は保全管理体制の確立である。しかし、保全管理の知識の不足ばかりでなく、仕事の大前提となる初歩の知識がないため、その訓練と、O社、N社の尻ぬぐい的仕事に追われている。技術的な問題だけ考えてみても、結局人間の生き方とか、人間とは？ などという問題にいきついてしまい、常に混沌としながら手探りで過ごしてきた。実際、このHONDUTELには協力隊の援助は不必要ではないかと思える。日本人技術者は確かに必要であるが、HONDUTELでは、日本人といえばO

社またはN社の人間としかみず、仕事の内容もそれらに相当するものを望み、実際に HONDUTEL 側で必要な仕事には食いこませない面がある。

電気通信のように非常に発達した部門では、計画、生産、建設、運用保全が別会社によって行なわれ、HONDUTEL は運用保全、つまり装置を運用してサービスを生産する会社である。しかし、まだ HONDUTEL の中心は生産会社、建設会社との対応に精一杯で、運用面にはやや力が注がれているにしても、保全までには関心が示されていない。外国製の装置を購入し、それをメーカーのいうままに消費していくのである。私の場合、そのメーカーと同じ国の技術者または社会奉仕者として、メーカー的視野での仕事を要求されている。当国にはメーカーのスーパーバイザーもあり、わざわざ協力隊員がやってくることもないといえる。現在の私は、よくいえばコンサルタント、悪くいえば便利屋である。こういう状態を私は望まないで、初めは上部に直接意見をもっていったが、けんもほろろで聞き入れられなかった。そこで現場から改善していき、その実績を積み上げて上部を動かしていこうとしている最中である。しかし、HONDUTEL の上部から指示されないような仕事を私がやろうとすると、壁は非常に厚い。これを打破するためには、まだまだあらゆる面での私の仕事量が不足しており、残り1年弱、もっとがんばらねばならない。

② 生活面

生活面でも「ボランティア精神を発揮しろ」とのことであるが、なにしろ生活の大部分が仕事であるため、その面ではボランティア失格である。しかし、1回の出張でも常に現地家族の中にもぐり込み、できるだけ話し好きなホンデュラス人と一緒にいて、日本の話をしたり、女の子の話をしたり、というふうに努めている。地方では短期の出張ならホテルしか見つからず、費用もより安いのであるが、いろんな人々と接するのが大きな楽しみなので、こういうふうになっている。

順応性の極端に悪い私も、さすがに1年経つと、すっかり慣れて、今では日本よりこちらが住みよいとさえ感じる。問題は運動不足である。土曜、日曜にはたまにテニスや卓球をするが、ほとんどは洗濯や掃除、その他でつぶれてしまう。以前はマラソンをしていたが、仕事が増えた

すと、毎日帰って寝るだけになってしまう。

はっきりいって私はボランティア精神はもっていない。ただ、こちらの人の生活がわかったので、あとは技術協力(自己満足のため)に全力でぶつかるだけである。そのためは、仕事面以外のわずらわしさはできるだけ避けたい。というより、日本人間のややこしさは遠慮したい。せっかくここまで来たのだから、できるだけ日本人間のゴタゴタは遠慮したい。私は協力隊というものを「現地の人との細かい接触を通して、その社会にもぐり込み、そして技術協力を全力で遂行する」ものと勝手に解釈してやってきたし、これからもやっていくつもりである。ホンデュラスが欲しいのは技術である。あの街中で「Dème cinco」(5セントポ下さい)と集まってくる子供たちが、何十年か先に1人でも渡るために、私たちは24時間働いて協力したいものである。電気通信というのは現在では、あの貧しい子供たちにはなんの関係もない。しかし我田引木的に考えると、電気通信の社会に対する役割は非常に大きいものがあるといえる。そして、この国では、やり方次第で、協力隊員でもかなりのことができるのである。

II 2年目に入って

1. はじめに

私のホンデュラス到着は1978年8月19日であったので、ちょうど前回の報告書の終わりの方が満1年の時期となった。この頃から、1年目の快い緊張感が薄れてきて、悪い意味で協力隊慣れしてしまったように感じた。そしてそれは謙虚さの喪失となって表われてきた。実際は何もやっていないのに、それをカモフラージュするかのように「この人間は何もわからないし、やりもしない」うんぬんと、よく口にしたものである。つまり「そういう現地人に比べ、俺はこんなにもがんばっているんだ……」と自分の無能力に対する不安をかくしているわけである。こういう時の心の整理には、やはり仕事が一番である。何かやっていると、そこから何か窺ふようなことが発見できるものである。仕事から逃げだすとダメだと思う。9月～11月、つまり、この報告書に述べる活動期間は、まさに、おちこみ、弁解、ガムチャラ、視界の開く、そういった期間であった。

HONDUTEL 内における私の地位及び技術者としての価値は比較的安定したと思われる。私たちの目標である「保全管理体制の確立」という点では、あまり効果は上がっていない。第1、まだホンデュラスはそういう時期ではないのである。けれども技術はどんどん進行していく。電気も算数も知らない人が、日本でも最新にあたるような施設を保守運用していかなければならないのである。その中の保守という面についてはメーカーからは学べない点も多い。

私の任期は結局のところ、HONDUTEL 職員の初歩的訓練で終わってしまいそうであるが、交代隊員には、ぜひとも広い目でみた保全管理、ひいては予防保全体制の確立を望みたい。

今、私の残す期間は日付まではっきりしたスケジュールで埋まっております、もう先は見えたというところだが、それが『実』となるかどうかは、1にも2にも私の努力しただけと思う。中途での迷いは去り、現在、再び訓練、障害修理に忙しい毎日である。

2. シグアテベケ局

9月上旬にコマヤグア局での仕事を終え、9月下旬コマヤグアからやや北部よりのシグアテベケ局に出発した。出発までの間は、例によって前回の局での仕事の報告書づくりや、種々雑多な手続処理でつぶれてしまった。

① シグアテベケ局の概要

形 式	C23局舎型
局 階 位	E. O.
交換階梯	L. S.
加入者数	約 370
テクニコ	2名
試験台	3名

この局からの出回線は、すべてコマヤグア局を経由するが（もっとも出回線といってもテグシガルバ TTS 向けしかない）、この局間は、5年前アメリカ製の PCM が装置され、それが結局1週間ほど働いただけで、その後ずっと修理されず、わずか2、3回線が日本製の伝送装置で生きているのみである。

② 活動内容

この局は小さく、障害もあまりなかったので、かなり訓練に時間がとれたが、なにしろ、先のロマヤグアとの間のケーブルが非常に悪く、その監視にかなりの時間がさかれた。この局での活動は、私としてもマンネリ化の極にあったため、どうも納得のいかないものに終わってしまった。その原因としては、「いくら交換機や保守者がよくなっても、あのPCM装置に変わるものがくるまでは、何十回線とある出、入両方向回線が生きず、加入者は相変わらず市外通話ができない。この状態の解決のために俺は何もできない」という意識が頭から離れなかったからだと思う。

③ シグアテベケでの生活

この街は電話局のある土地の中では、かなり海拔の高い方であって、標高1,000mは越えているはずである。またちょうど雨の季節でもあったため、毎日々々が雨降りで、とても北緯15°にある国とは思えないほど寒い気候であった。毛布とシーツ2枚、そしてトレーニングウェアスタイルで寝ながら寝たものである。また部屋はコンクリートに囲まれた、窓がないもので、いつも冷たい湿った空気の中で過ごしていたためか、結局熱を出してしまった。この部屋のある家は熱心なキリスト教徒（エバンヘリコ）の家で、着いた日に聖書を貸してくれた。「毎晩1ページでもいいから読みなさい」というので、その気になり読もうと思っていたら、部屋には20Wくらいの暗い明かりしかなく、最後の日まで、机の上でずっと“昇天”していた。

しかし、この気候は日本とよく似ており、ホンデュラスにしては珍しく緑の樹々が山にも公園にも茂っており、朝はそれに霧がたちこめて、なんともいえない情緒があった。そして、ここには、カナダ人が持ってきたという日本の柿の木があって「quaki (qui)」として売っているが、ちょうど季節はずれで食べることはできなかった。また、局のすぐ近くのボーディングハウスには1977年のミス・ホンデュラスがいて、よくそこへビールを飲みに行ったが、すでに結婚しているとのことで、少々残念であった。こういうような小さなことは、実際何でもないことのようにだが、生活の中では、こんなことでさえ気持ちの整理上影響力をもつてくと初めて意識した。

1ヵ月の予定が、何故か3週間で終わって、その余った期間は前々回に行ったダンリ局、それと予定には入っていないフティカルバ局へ行くことになった。

3. ダンリ局、フティカルバ局への出張

① ダンリ局

ここは以前1ヵ月働いたところで、障害の一番多い局であるので、北部地方へ移る前に、ぜひもう1度というわけで、4日間くらい日帰りを通った。しかし結局あまり成果はなく、南部地方では、ここだけ、問題を残したまま去らねばならなくなった。障害ということだけではなく、保守者のレベルも極端に低く、まことに心残りの局である（チャンスとしては私の交代隊員がくる時の引き継ぎ期間があるが）。

② フティカルバ局

テグシガルバから東へ約300km。ものすごい田舎に、ちょっとした街があり、局にはC23のトレーラ式が入っていた。そこに電力用モータ（エンジン）を設置するため、1度見学してみようと思い、寝袋をかついで出発した。ほこりだらけになって約5時間、山の中を抜けると、これもほこりだらけの小さな街に出くわした。ただ街の近くを流れる大きな川が、そして山々の緑が、なんとなく、今までの荒涼としたホンデュラスのイメージとは異なった清々しいものを感じさせてくれた。

この地には水道はなく、金持ちも貧乏人も川で洗濯したり身体を洗ったりしている。飲料水は給水車が出ているが、水洗トイレの水とかは、すべて川から運んできて使っている。田舎ならともかくフティカルバはオランチョという地方の中心都市である。

障害は2件あったが、簡単なミスによるもので、仕事はあまりなかった。

4. 北部地方巡回について

当初、上司との約束では「11月1日に北部地方管理部のあるサンベドロスーラ市へ行く」とのことであったが、いつものように電話ひとつですむことでも1週間はかかる HONDUTEL の手続きの関係と、私の雑用（専門家要請の件とか各種様式づくり等）もあって、結局11月15日、やっと管理

部長、交換の Jefe, スーパーバイザーにあいさつができた。そして16日は下宿を探すためテグシガルバで知り合った人とともに1日、サンペドロスーラ市内を歩き回った。現在では一般家庭に下宿しようと思うとかなり高く、部屋だけで200レンピーラ(100ドル)は下らない。専門書や2年間の生活にまつわる種々雑多なものが多く、小さな室では入りきらないし、安くて安全な部屋はなかなか少ない。それでも知り合いの45歳のオバさんが(ただ私にとってはテグシガルバの下宿の奥さんの友人というだけのことであるのに)、蒸し暑い市内を歩き回って見つけてくれた。

引っ越しの際には農業隊員用のランドクルーザーを使用し、1日でテグシガルバ→サンペドロスーラ→コマヤグアと走った。この間 HONDUTEL の協力は何ひとつない。これは不満というよりも不思議である。「どこかのホテルにでも住むだろう(神電気の技術者がいつもそうだから)。日本人なら車ぐらいは持っているだろう」という程度に考えているのだろうと思われる。下宿でも探そうものなら「こいつ、何をケチっているのだ」という感じである。こうして11月18日から北部地方での生活が始まった。

このサンペドロスーラ市の印象は極めて薄い。何故かといえば、大きくはないが近代的で、日本と変わらない都市であるからだ。ゴミゴミとした首都とは大違いである。周辺の街リマとかプログレッソはスタンダード・フルーツ会社の街という感じで、まさにサンペドロスーラの衛星都市(町)である。結局、アメリカ人によってつくられた地域なので、変化のない合理的な感じになっているのだろうと思われる。

北部地方の管理部長はコスタ・リカ人で契約で働いているそうだが、あまり話すこともなく、どういう人かもわからない。しかし直接の仕事の相手となる技師は中国系2世で、カナダの大学を終えてから、アメリカへコンピュータの訓練を受けに行ったことがある。これだけだと、この辺に多い肩書きだけの技師と変わらないが、2世とはいえ東洋の血が、彼を謙虚さと、繊細さ、知性……等をもつホンデュラス人になっている。今までは、どちらかといえば、いいかげんな技師(インヘニエロ)ばかりで、技術も知性も乏しい人間ばかり相手にしていたので、知らず知らず自分もそれに慣らされてきていたが、この中国系技師と話し始めると、実にポイントをついた質問をされる。戸惑いながらも、これからの仕事のやり易さを考え、彼の技術をどの程度まで伸ばしていけるかと大いに希望がもてたも

のである。スーパーバイザーは管理部内の局の技術的指導者ともいえるが、彼はあまり技術的なことは知らず、また年齢も高いので、あまり期待はできない。

北部地方最初の局はセイバという港町にあるが、折からの大雨で橋が3つとも落ちて車は通れないため、行きは飛行機ということになった。またセイバの飛行場から市内へ通ずる道の橋も落ちているとのことで、復旧するまでの間、バスで20分くらいの所にあるリマという局に通うことになった。ここはC23の局舎型で障害はかなりあったが、どれも簡単なもので、9割ほど修理できた。ここも、いつか1ヵ月滞在する予定の地である。

5. おわりに

私がテグシガルバに着いた日、たまたま日本からこられていた協力隊の運営委員の1人で東大教授の衛藤先生が、隊員としての心の持ち方についていわれた。「開発援助の主役はあくまで当事国の人々である。隊員の持っている技術も当然、重要な点であるが、最も大切なのは、隊員各々の人間性である」と。

この言葉を聞き、いつも不平不満をいい、自己顕示欲が強く奉仕精神の全くない私は自己反省するとともに、自分が協力隊員であると宣言することに、少なからずおこがましさを感じた。こんな私にまでホンデュラスで活動する機会を与えてくれた協力隊には感謝しているが、国家事業としての協力隊事業は、あくまで開発途上国が少しでも発展するための手助けであり、われわれ隊員が行なっている活動が、本当にこの国のためになっているのかどうか、つまり“効果”について、もっと考えねばならないのではないかと感じる。

日本青年の育成という面も、確かに協力隊事業の結果出てくる点ではあるが、これはあくまで結果であり、副産物である。それを目的としてはならない。協力隊の姿勢には、そういった点で、日本の青年育成を前面に出しすぎる一面があると私は感じる。私のやったこと、やっていることが、本当にこの国のためになっているのかどうか、という点が、私を常に大いに悩ませる。

今思うに、私はこの国の人の世話になってばかりいる。本当にあれこれとわがままをいっては迷惑をかけている。これに報いるには、少しでも私

の知っていること、また、この国に應用できる實際的な技術を、あまり勉強の機会に恵まれないテクニコたちに教え伝え、それとともに私の頭の中の知識を柔軟にして現地の社会条件、技術レベルに合致した指導を研究し、実施することだと考えている。

どうも、ちぐはぐな文章になったが、これをうまく得けるのは、日本へ帰って冷静になった時であろう。そして一方では、それは多少美辞麗句のかたまりとなるのだろうか。

田淵隊員の報告書を読んで

飯 島 幸 雄

まず第1に感じたことは、田淵隊員は、自分自身をよく見つめているということである。自分がどのような立場におかれているのか、またどんな心理状態にあるのか、どういう印象を受けたのか、あるいは、どうして、そのような考えが浮かんできたのか、をよく掴み、適切に表現している。

任地での生活では、任地をよく知り、融け込むために非常な努力を払い、どこへ行ってもホテルへは泊らず、不便を覚悟で必ず下宿住いをしている。さらに、青年海外協力隊の意義というものについても、自分自身で適切な解釈をくだして、この信念に基づいて任務を遂行している。非常に立派な隊員である。

田淵隊員の立てた目標は、電気通信設備に対する保全管理方式の導入ということであるが、これは非常に大きな目標で、達成はなかなか難しいものと思われる。現在多くの開発途上国では、初めて電気通信設備が比較的大規模に導入されたか、されつつある段階にあり、今はちょうど大規模通信システムの管理という問題が開発途上国でクローズアップされてきた時点に当たる。一方開発途上国側では、日先の故障修理とか、トラヒックそ通上のボトルネックにのみ目をうばわれて、保全管理方式導入の必要性をよく理解していない。ちょうど、このような段階にあるため、いきなり保全管理方式の導入を叫んでも、なかなか受け入れて貰えないと思う。ひとつひとつの故障修理等の身近な問題からの努力を積み上げて、先方の信頼を得ていくのが順序ではないかと考えられる。開発途上国側でも、少しずつ理解のある人が増えていく様子が、この報告書からもうかがえる。

電気通信というものは、現在任地にいる貧しい人々には直接には役立たないかもしれないが、その国の経済発展のための重要な一手段である。報告書には、何十年先には貧者を少しでも減らすことに役立つだろうとあるが、10年くらい後には、何らかの目に見える効果が現われるであろうし、また、それを期待して引き続き頑張っていたらいいと思う。(協力隊技術専門委員)

あ と が き

青年海外協力隊員の報告書集を発刊するに際し、数多い報告書を、どう分類し、いかに活用するか、いろいろ意見がありました。隊員の活動を広く紹介する観点から、まず国別編とし、昭和54年度から作成を始めました。55年度もこの方針を継続して9ヵ国編を作成いたしました。国別編が一巡した後は、順次、違った角度で報告書集の作成を続けていきたいと考えています。

国ごとに収録した報告書の数も、諸般の都合で数篇に限定せざるを得ませんでしたし、職種配分などについても、それぞれの国における協力隊の特徴をカバーしているかどうかなど、不十分な点もあろうかと思いますが、御活用下さる皆様からの御意見、御提言をいただきつつ、今後一層の充実をはかりたいと思います。

末筆ながら、この報告書のために、御多忙中にもかかわらず、積極的に御協力いただき、報告書に対するコメントを御執筆下さった技術専門委員の方がた、ならびに報告書の収録を快諾され、「追記」の原稿を寄せられた帰国隊員の皆様に厚くお礼申し上げます。

なお、本報告書集の御活用にあたり、他への転載等を企画される場合は青年海外協力隊事務局(啓発課)に必ずご相談下さるようお願い申し上げます。

昭和55年12月 啓発課長 高橋成雄

海外協力の現場から——青年海外協力隊員の記録 <ホンデュラス編>

昭和55年12月発行

編者 国際協力事業団青年海外協力隊事務局

発行所 国際協力事業団青年海外協力隊事務局

〒150 東京都渋谷区広尾4-2-24

電話 (03) 400-7261 (代)

印刷所 日青工業株式会社

[非売品]

